LIXIL eye

建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌［リクシル・アイ］

no. 3　October 2013

特集
1｜新・生き続ける建築｜鉄川与助
2｜建築ソリューション｜都城市民会館
3｜まちづくりの今を見る｜駅舎復原で活気づく東京駅周辺

探検ロマンを掻き立てるデザイン ｜中国・青島市

団塚栄喜
Eiki Danzuka

探検家とは、探索すべき余地が残されている未知の領域に直接赴くことにより調査する人々を指す。中国には古くから探検家の記録が残されており、同時代、ヨーロッパでも数多くの探検家が大航海時代を築いたという。両地とも探検家により新たな時代が築き上げられてきた。山東半島に位置し、20世紀初頭にドイツの租借地になったことから急速に発展を遂げた青島。その歴史的背景からヨーロッパに影響を受けた独特の街並みや文化を持つ。この青島の新たな時代の商業施設では、その来訪者を探検家、施設を探検地と捉え、デザイン手法を探検術になぞらえてコンセプトと造形をつくり上げた。探検術で読み解いた素材や色彩、形は例えば、"探検家は道なき道を行く"として床にはさまざまなペイブメントパターンや起伏をつくり、先への期待感を高め、歩く楽しさやリズム感を演出。"探検家は自然に染まる"と考えた色彩計画は、青島の自然からサンプリングしたアースカラーで構成。"探検家は偶然の出会いを楽しむ"をエンターテイメントの在り方とし、施設内のさまざまな場所にイベントができるスペースを設け、いつ訪れても違う驚きと出会いがある…など。建築デザインは六本木ヒルズを担当したBrian C H Honda氏（MIX Studio Works）。海外でのプロジェクトは言語や業務構造の違いなど苦労することも多いが、デザインを通じた各国のクリエイターとのコラボレーションは極めて興味深い。

プロジェクト概要
名称：ROCK CITY QINGDAO
所在地：中華人民共和国山東省青島市李村区
主要用途：商業コンプレックス（ショッピングモール、ホテル）
発注者：Wei Dong Group Co., Ltd.
設計：ランドスケープ：アースケイプ、建築：MIX Studio Works
敷地面積：約6.48ha
工期：2011.4–2013.1
（ランドスケープは継続工事中）

だんづか・えいき――アースケイプ代表・ランドスケープデザイナー／1963年生まれ。桑沢デザイン研究所卒業後、環境美術研究所を経て、1999年、アースケイプ設立。2001年–、環境活動であるハーブマンプロジェクト（MHCP）を主宰。
主なランドスケープ作品：晴海トリトンスクエア[2000]、アーバンドック ららぽーと豊洲[2006]、ラゾーナ川崎プラザ[2006]など。

上左―メトロハット（円筒形の地下鉄連絡施設）を臨むランドスケープ：場所ごとにさまざまな舗装パターンをデザイン｜上右―「ROCK CITY QINGDAO」夜景：夕日から夜空へと移り変わる"暮・宵・真夜"、時間帯に合わせて変化する照明計画｜下左―RAMBLING FOREST：森をデザインモチーフとし、建築と一体感のある空間を演出｜下右―DROP TERRACE：賑わいの中心。プログラムによる水と光と音の演出が人々を魅了する[提供4点とも：アースケイプ]

October 2013 no. 3

LIXIL eye ［リクシル・アイ］

CONTENTS

表紙写真：
都城市民会館［撮影：フォワードストローク］

次号『LIXIL eye』no.4は、
2014年2月発行予定です。

『LIXIL eye』はバックナンバーを
インターネットでご覧いただけます。
http://archiscape.lixil.co.jp/lixil_eye

02 ［風景をデザインする　海外編］
探検ロマンを掻き立てるデザイン ―― 団塚栄喜

04 特集1｜新・生き続ける建築 ― 3
鉄川与助

04 ［本論］棟梁建築家・鉄川与助の教会建築 ―― 川上秀人
08 ［作品］青砂ヶ浦天主堂
頭ヶ島天主堂
紐差教会堂
14 ［年譜］略歴｜主な作品

15 特集2｜建築ソリューション ― 3
都城市民会館

22 ［序論］菊竹清訓が秘めていた創造性 ―― 鈴木博之
24 ［鼎談］新時代に挑戦した先駆者
“メタボリズム”の建築理論を具現化した、アヴァンギャルドな都城市民会館。
―― 遠藤勝勧｜長谷川逸子｜古谷誠章
37 ［鼎談後記］時代を先駆ける思想と、それを噴出させる弟子たち、メタボリズムはこれから ―― 古谷誠章

38 ［ARTIST at HOME］― 3
造形家・小川待子さんの巻 ―― 中村好文

42 特集3｜まちづくりの今を見る ― 3
駅舎復原で活気づく東京駅周辺

44 ［序論］まちの個性を引き出すエリアマネジメントに期待 ―― 西村幸夫
46 ［本論］ソフトでまちを育てる ―― 持続的に人々を惹き付ける賑わいの創出 ―― 小林重敬
48 ［インタビュー］進化する東京駅周辺 ―― エキナカからつながるエキソト ―― 野﨑哲夫
50 ［風景1］エリアをつなぐ
52 ［風景2］人をつなぐ
54 ［風景3］時をつなぐ
57 ［コラム］「まちづくりガイドライン」による共通価値の表現 ―― 歴史的建造物を大切に扱うまちづくり ―― 金城敦彦

58 ［素材を語る］
木材の魅力 ―― 木材会館の設計を通して ―― 山梨知彦

60 ［TOPICS］
「日本のテラコッタ建築 ―― 大正・昭和初期の装飾の保存と公開」で日本建築学会賞（業績）を受賞 ―― 後藤泰男

64 ［INFORMATION］
建築・まちづくりの情報ポータルサイト「アーキスケープ」のご案内
LIXILからのご案内｜ギャラリー＋イベント｜LIXIL出版 新刊案内

68 ［新・建築家の往復書簡］― 3
「おっかない父」と「父親のような人」と「もう一人の父親」 ―― 隈 研吾｜妹島和世

LIXIL eye no.3
2013年10月20日発行

発行：**株式会社LIXIL**
編集発行人：安岡淳也
マーケティング本部
LIXIL eye 編集室
〒100-6011
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング11階
Tel：03-6273-3492
Fax：03-6273-3539
制作：株式会社森戸アソシエイツ
協力：フォンテルノ（02,42-57頁）
デザイン：松田洋一
印刷：竹田印刷株式会社

*本誌記事の無断転載を禁じます
*本文中の敬称は省略させていただきました

鉄川与助

Yosuke Tetsukawa

長崎の教会群は、キリスト教の伝来と繁栄、激しい弾圧と250年もの潜伏から劇的な復活を見た。この歴史性を背景に、県内の教会は130棟を数える。迫害は外海、五島の島々にも及んだが、信徒たちは辺鄙で狭隘な場所に小規模な教会をつくり、ひっそりと信仰を継承してきた。
カトリックの教会は、明治期には外国人神父の指導のもとで建てられてきた。五島に生まれた鉄川与助は、島の教会建設に大工として携わったことをきっかけに、リブ・ヴォールト天井の工法や幾何学など、西洋建築について神父から多くを学んだ。また勉強熱心な与助は、力学や微積分などを独学で学び、後にはRC造の設計までをこなすようになる。西洋の建築様式と日本の伝統技術に基づいた長崎の教会群には、日本における教会建築の発展過程や、西洋と東洋の建築文化が融合したデザインの形跡が見られる。
「新・生き続ける建築」の第3回は、棟梁建築家・鉄川与助によって展開された教会建築に焦点を当てる。なお与助の手がけた教会建築は、平成19年に「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として世界遺産暫定一覧表に挙げられた資産に含まれており、現在、各団体が正式登録に向け取り組んでいる。

［所蔵：鉄川進一級建築士事務所］

特集 1［本論］

棟梁建築家・鉄川与助の教会建築

川上秀人
Hideto Kawakami

はじめに

明治の開国に前後し、開港地を窓口として西洋の文化が日本に流入してきた。社会経済の大変革に対応するために種々の分野でお雇い外国人を招聘したが、建築技師は自ら設計施工に携わるかたわら、日本人技術者（建築家）の育成にも努めた。官公庁舎、銀行、駅舎、事務所建築などが建設される一方で、教会堂建築はいくぶん様相を異にしている。長い弾圧や迫害に耐え忍んできたキリシタンは、明治6年［1873］の高札撤去後、長い間思い描いてきた“目に見える教会”を競って建設し始めた。大工や左官など職人の多くは信徒であり、煉瓦の焼成から運搬、部材の組み上げなどの労働奉仕もした。伝統技術を基礎にして、見よう見まねでまず教会堂の意匠的要素を取り入れた。信徒たちは神への祈りの空間を最重要視したからである。
教会堂建築を熟知しているのは神父自身であるため、建設に際して外国人神父は意匠面だけでなく、建築の構造にまで強い指導力を発揮した。彼らの下で職人たちは未知の西洋建築技術を少しずつ身に付けていったが、なかでも特に注目すべき人物は鉄川与助である。長崎県を中心とした教会堂建築はその導入の初期においては外国人宣教師の指導に多くを負っており、それ以後は五島出身の大工・鉄川与助のたゆまぬ努力によって発展的に展開した。

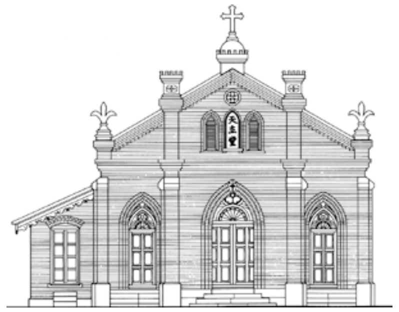
教会堂建築の概観

昭和50年［1975］に長崎県（長崎大司教区）内の教会堂の悉皆調査（全162棟）を実施した。本稿では、周辺域も含めて調査時に残存していた戦前の教会堂を対象として述べることにする。鉄川与助の教会堂は時期によってやや様相を異にするので、前期、中期、後期の3期に分けて概観する。
前期は明治末年から大正初年頃、冷水教会堂から今村教会堂までとする。三廊式平面形式を正立面に明確に示しており、構造的に最も強固なイギリス積みの煉瓦造が主流である。しかし、青砂ヶ浦天主堂の控壁には煉瓦の装飾的な使用の兆候が見られる。この時期の三廊式教会堂8棟のうちの5棟が煉瓦造であることから、教会堂を建築的に完成させるためには煉瓦造で構築することが必要であったことが分かる。
中期は大正時代前半期、旧大水教会堂から頭ヶ島天主堂までとする。特徴のひとつは、煉瓦造壁面の意匠化である。当地域に現存する16棟の煉瓦造教会堂のうち7棟が与助の設計になるが、彼は最も丈夫で経済的なイギリス積みを用いた。そこに彼の信条の一端をうかがうことができる。しかし、彼は煉瓦の凹凸のみで壁面を飾るのではなく、平坦な壁面を煉瓦の色や組積法の変化で飾ることを試み、壁面に変化を与えた。2つ目は、教会堂の正面中央部に八角形のドームを戴いた鐘塔が突出して設けられた点である。彼は大曾教会堂で初めてこの構成を試み、田平天主堂でそれを確固たるものとした。正立面の構成方法は頭ヶ島天主堂、手取教会堂へと継承される。建築材料が相違してもこの構成方法は変化しなかった点に、彼が求めた教会堂建築の姿があると言えよう。
後期は大正末年から昭和初期頃、旧細石流教会堂から水の浦教会堂までとする。RC造という新しい構造の出現に対応して、折上天井構成を採用した点に特徴がある。旧立谷教会堂の側廊部に初めて出現した折上天井は、明治後期から大正初期にかけて主廊部にも採用され、大正末年頃に全盛期を迎える。その構成は日本在来の折上天井を単に模倣した和風的処理ではなく、リブ・ヴォールト天井で構成し得なかった部分を直線に置換させた洋風の意匠と言えよう。
大正5年に与助が旧大水教会堂で初めて採用した折上天井は昭和初期のRC造教会堂へと継承される。構造体である梁が会堂内に一種の装飾と化して顕わとなり、構造と意匠が一体化した新しい内部空間の創造と見ることができよう。

リブ・ヴォールト天井

教会堂建築で最も目を惹くのはリブ・ヴォールト天井であろう。幕末の大浦天主堂を始め、明治10年代に続々と建設された初期教会堂ですら内部はリブ・ヴォールト天井で構成されていたため、それほどに重要な要素だったのである。
会堂内部は4本の柱で囲まれた部分を1つの単位（1間）としてリブ・ヴォールト天井を架し、それを長軸方向に連続させて配する。1間は交叉リブ（対角線に設けられたリブ）で4分割されたり、さらに十文字にリブを加えて8分割するものとがある。当地域に残存する33棟を見ると、1間の分割方法や天井板の張り方に注目するのも面白い。
与助が20歳のとき、最初に教会堂建築に触れたのは旧曽根教会堂で、設計者ペルー神父と出会った。経歴書［1］に記された鉄川工務店の第1作は旧桐教会堂の増改築工事で、この年に与助は鉄川組を継いでいる。ペルー神父は高等工業程度の学校で建築学を会得していたようで、リブの架構法などを学んだのはおそらくペルー神父からであろう。上五島地域をペルー神父が管轄し、拠点を旧鯛ノ浦教会に置いていたことや堂崎天主堂をペルー神父が設計している点を考えると容易に推察し得る。
旧鯛ノ浦教会堂、冷水教会堂、旧野首教会堂の内部空間構成は相互に類似しており、特に前2者の柱頭飾りは酷似している。与助の出発点である冷水教会堂が漆喰仕上げ4分割リブ・ヴォールト天井構成であるのは、旧鯛ノ浦教会堂がその手本となったからであろう。
リブ・ヴォールト天井のリブは曲木ではなく、太材を弓状に削り出したもので、3本継ぎが多い。天井板を張った後で木色に塗装して木目を描いており、遠目には1本の材に見えるため、与助は船大工の技術を有していた、などと言われもしてきた。アーチ窓の枠木も同様の仕様で

冷水教会堂［1907］
与助が自ら設計施工した最初の教会堂である。台座のない角柱上部の植物様の柱頭飾りは旧鯛ノ浦教会堂に酷似する。柱頭の位置が低く、リブが太いために内部空間は重苦しい。側面の窓は取り替えられ、正面中央の尖塔は改造された［写真：筆者［1975］］



旧野首教会堂［1908］
与助の最初の煉瓦造教会堂である。正面中央に城砦風の胸壁様装飾、両脇にはユリ花模様の装飾を置く。洋風とも和風とも言えない小屋組に、与助の進取の気質が感じられる【重要文化財】［実測作図：筆者［1984］］

今村教会堂［1913］
左—正面外観［写真：筆者［2010］］｜右—内部［写真：筆者［1986］］
アーケード、トリフォリウム、クリアストーリーの三層構成をなす完成度の高い教会堂である。双塔形式は珍しく、旧浦上天主堂との関係が考えられる。トラス小屋組だが、うねった陸梁と太い真束を用いており、力学的にはまだ理解し得ているとは言えない【県指定文化財】

田平天主堂［1918］
左—外観［写真：筆者［2007］］｜右—主廊部小屋組［写真：筆者［2010］］
合掌、繋梁、列柱を挟み、方杖でボルト締めする。敷桁と繋梁には火打梁を入れて面内剛性を高めている。振れ止めも備えており、完成された木骨トラス小屋組である。与助の最高傑作【重要文化財】

［1］『私たちの歩み 鉄川工務店経歴書』［鉄川工務店／1968頃］

旧細石流教会堂［1920］
内部の円柱は上方がやや細くなり、簡素な台座と柱頭を備える。主廊部上方の矩形壁面と折上げ面には、菱形の中に花を意匠化した彫刻がある。大正後半期を全盛期とする折上天井構成の頂点に位置する優れた教会堂である［写真：筆者［1975］］

手取教会堂［1928］
正面中央には八角形のドームを戴く鐘塔を設け、大曾教会堂の構成を継承しているが、会堂内部は紐差（ひもさし）教会堂に類似する。与助の最初のRC造教会堂であるためか、正面や塔の四面には石造を模した水平の溝が刻まれており、与助の気持の中に石造の優位性がうかがわれて興味深い［写真：筆者［1984］］

博文館日記（大正８年）
大正８年４月３日（木）、時雨模様の中で頭ヶ島天主堂の上棟式が行われた。与助は４人の職人を連れて出席した。祝儀の総額が150円であること、五島崎浦地区（赤尾）の石工が工事に参加していること、上棟式の流れなどが分かる［所蔵：鉄川進一級建築士事務所｜撮影：筆者］

ある。設計する上で難しかったのは、特に交叉リブの曲率を導き出す点であろう。各教会で主廊幅、側廊幅、列柱間隔は異なるため、そのつど曲率を算出しなければならない。与助が「あのコーモリ天井の図面を初め書かされたときは泣きました。納めるのに。」［2］と言っているのは、このことを指すと思われる。

煉瓦積み壁面の意匠化

田平天主堂に酷似する鐘塔と側面窓の石と煉瓦の割付けを検討した図面が遺（のこ）っている（右頁上図参照）。A２版厚手の方眼紙を使用し、図面右上に「吋（インチ）十割」（太線の１インチ１マスを細線で10分割する）と青色印刷されている。下段左に側面窓、右に鐘塔第一層の立面が描かれ、上段左に正面玄関と楽廊に上がる螺旋階段の平面が描かれている。側面図で左右の窓を比較すると、左図では基礎の上から９段おいて３段の濃色煉瓦があり、右図では10段おいて濃色煉瓦の段がある。要するに、左図は煉瓦３段分を単位としたデザインであり、石造の窓台を煉瓦１段分上げて微調整して仕上げたのが右図ということになる。側面図の右側の図が現状に一致するので最終決定の図である。

右図の右方の控壁内には、台座、柱頭、繋梁、軒桁の図が描かれている。柱頭上端は64段目、繋梁の下端は88段目で上端は93段目、鼻母屋の下端は約92段目で上端は約95段目に相当する。「天主堂設立願」には「軒高地盤より軒桁上端迄本屋参拾八尺下屋弐拾壱尺」と記されており、煉瓦90段目が20尺であるので、この設計図のとおりに施工されたと考えてよい。

図面の左端には一番下の水平線を0として上方向に２種類の目盛りが描かれている。右側には尺を単位とした実寸法を算用数字で、左側には煉瓦の段数を漢数字で記している。右端にも２種類の目盛りと３種類の書き込み数字がある。左側が３段を１単位としたときの単位数（27単位）で、右側が４段を１単位としたときの単位数（左が21単位、右が20単位）である。軒桁の上端（煉瓦93段目）から下方に向けて列柱の基礎の上端の位置を定めようとする設計手順が見て取れる。

与助は青砂ヶ浦天主堂の正面の控壁に濃色煉瓦で十字架をかたどり、大曾教会堂では濃色煉瓦の帯を壁面のアクセントとした。田平天主堂では基礎を濃色煉瓦の小口積みとし、３段の濃色煉瓦小口積みの帯を周壁に巡らすだけでなく、開口部のアーチ等に石材も使用するなど、本来構造材である煉瓦造の壁体を意匠材としても捉えようとした設計意図がうかがえる。

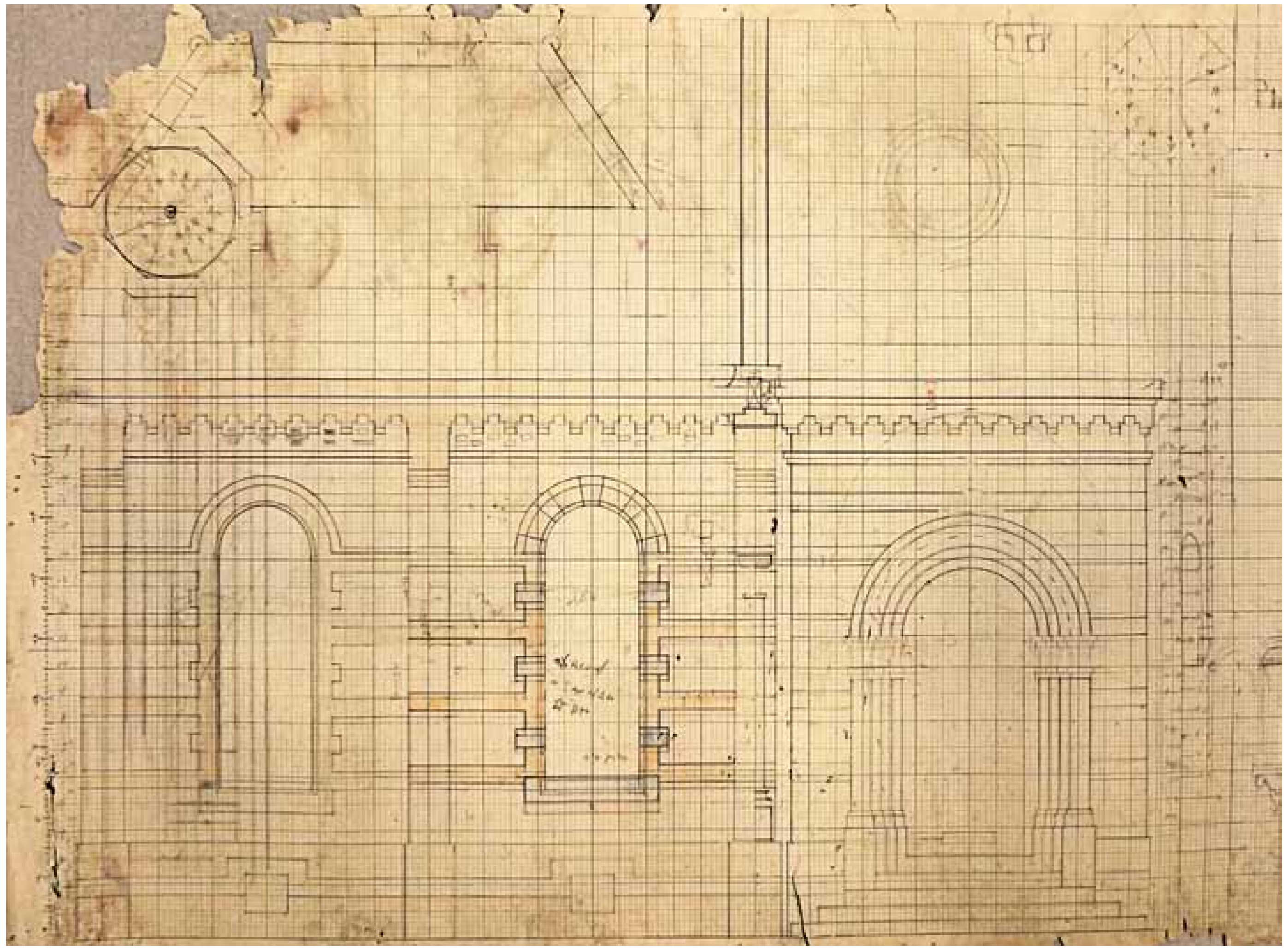
与助の日記

与助が主に出面帳（でづら）（出勤簿）として使用していた日記が２冊（大正６年、８年）遺っており、業務内容や出来事も簡単に記されている。時期的には江上天主堂、頭ヶ島天主堂、田平天主堂に関する記述が中心となる。

江上天主堂の祭壇（香台）に関して、大正６年５月16日「午前七時福江教会ニ脇田師ヲ訪フ（中略）拾一時江上着江村氏ト談ス（後略）」、17日「島田師午后二時来江ス豫算ヲ見ル不足金ニ付協儀アリ決定セズ」、18日「午前又協儀アリ午后二時江上発（後略）」、26日「島田師ヨリ江上香台ヲ弐百円直ニ注文来ル」とある。残存する２枚の祭壇の図面は、寸（すん）十割の厚手方眼紙を使用し、縮尺1/5で描かれている。１枚は正面図（右頁下図参照）、もう１枚は正面図（左半分）と断面図である。裏書きにより、前者は大正６年６月21日、後者は翌22日に描かれたことが分かる。打ち合わせの翌日（６月23日）から祭壇の製作を始め、11月20日「人夫ノ加勢ヲ受ケ江上香台ヲ積ム」とあるので、祭壇が完成して船に積み込んだ日も分かる。現祭壇と比較すると、植物様装飾と塔の形態が異なるので、これら２枚の図面は神父（教会側）との打ち合わせのためのものであろう。

頭ヶ島天主堂の祭壇に関しては、大正８年12月24日「頭島香台ノ件」、28日「余ハ頭島香台図引キ（中略）大嵜師等ト會□ス（中略）大嵜師ト頭島香台ニ付談ス」、29日「余ハ終日頭島香台図引キ畧ボ終ル」とある。24日に注文を受けて直ちに設計し、28日に設計案をもとに大崎八重師と打ち合わせをし、翌29日には図面を仕上げた。図面の密度は不明だが、かなりの早さで設計していることが分かる。

［2］　山口愛次郎・鉄川与助・丹羽漢吉「座談会：キリスト教関係を中心とした長崎における明治の洋風建築」『長崎県建築士会機関誌』1967



田平天主堂 側面および正面鐘塔初層検討図（460×629mm）
側面を実測した結果、濃色煉瓦の帯と３段分の石材を小さな単位として“９段２尺”で壁面の設計をした。その後、敷桁や繋梁など木部の寸法決定と施工（煉瓦積み）のために“４段９寸”に単位を置き換えて微調整をしたと考えられる［所蔵：鯨賓館ミュージアム｜撮影：筆者］

田平天主堂では、大正６年10月１日「余ハ（中略）マタラ師ト田嵜ニテ會談（中略）天井ハ桃色柱ト天井骨ハ石色ニペンキ下地コーパル仕上ト決ス」とあり、職人を交えてマタラ師と会堂部天井の色彩について協議している。

大正８年９月16日「余ハ鉄筋混凝土工学ノ調べ」、23日、25日、27日にも同様の記述があり、寸暇を惜しんでRC造の勉学に励んでいる。与助の最初のRC造建築である長崎神学校の準備をしていたのであろう。大正６年７月28日「中田師ヨリアルフアペットヲ習フ」、８月６日「チリ師ヘ横文字ノ手紙ヲ初メテ出ス」の記述も興味深い。

おわりに

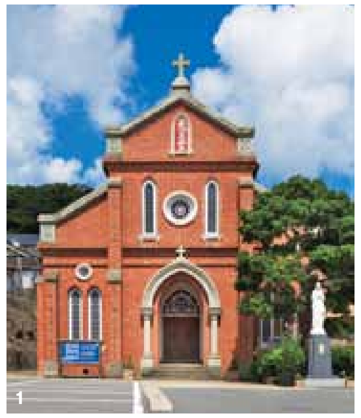
棟梁を目指す日本人大工が西洋（洋風）建築に手を染めることは、この時代では本流から外れることだったのではないだろうか。ペルー神父設計の旧曽根教会堂が与助の目にどのように映ったのか、何に感動したのかは知る由もないが、少なからず葛藤があったことは想像に難くない。しかし、数年後には次々と教会堂を建設し、極めて短期間で完成の域に到達せしめた。建築学会にも入会して建築学を学び、後の者に彼は“棟梁建築家”と呼ばれるに至った。黒の三つ揃いを着てチョッキのポケットから懐中時計の鎖を垂らした姿に、棟梁としての自信に満ちた建築家、と同時に自分の選択した道は決して間違いではなかった、という表情を見るのは私の考えすぎなのであろうか。

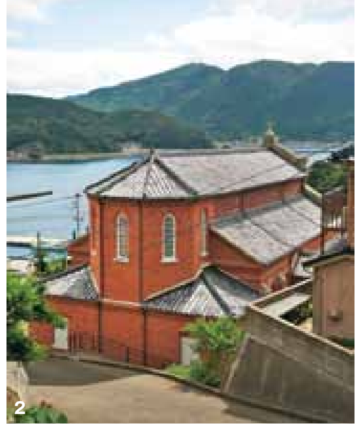
江上天主堂 祭壇全体図（625×457mm）
図面の裏に「大正六年六月二十一日調製／南田平天主堂建築所ニ於テ／五島奈留島江上ノ為メ」と縦書きされている。もう１枚の図面には中央の塔が描かれているが、実現しなかった［所蔵：鯨賓館ミュージアム｜撮影：筆者］

かわかみ・ひでと──近畿大学産業理工学部教授／1948年生まれ。1972年、九州大学工学部建築学科卒業。1985年、「長崎県を中心とした教会堂建築の発展過程に関する研究」により、九州大学で博士号を取得。
主な著書：『大いなる遺産 長崎の教会』［共著、智書房／2000］、『NHK 美の壺 長崎の教会』［監修・著、NHK出版／2008］、『週刊日本の世界遺産25』［共著、朝日新聞出版／2012］、『鉄川与助の教会建築』［共著、LIXIL出版／2012］など。

青砂ヶ浦天主堂

竣工年：1910年
所在地：長崎県南松浦郡新上五島町奈摩郷1241
構造・規模：煉瓦造平屋建
【重要文化財】





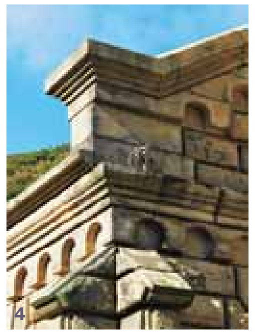
1　正面（西面）外観
正面は内部の断面形態を素直に表しており、美しいプロポーションを持つ。中央出入り口両脇の石造の円柱と葡萄（ぶどう）をモチーフにした柱頭飾りが尖頭アーチと十字架を支持する。要所に用いられた濃色煉瓦と石材が正面意匠のアクセントになっている

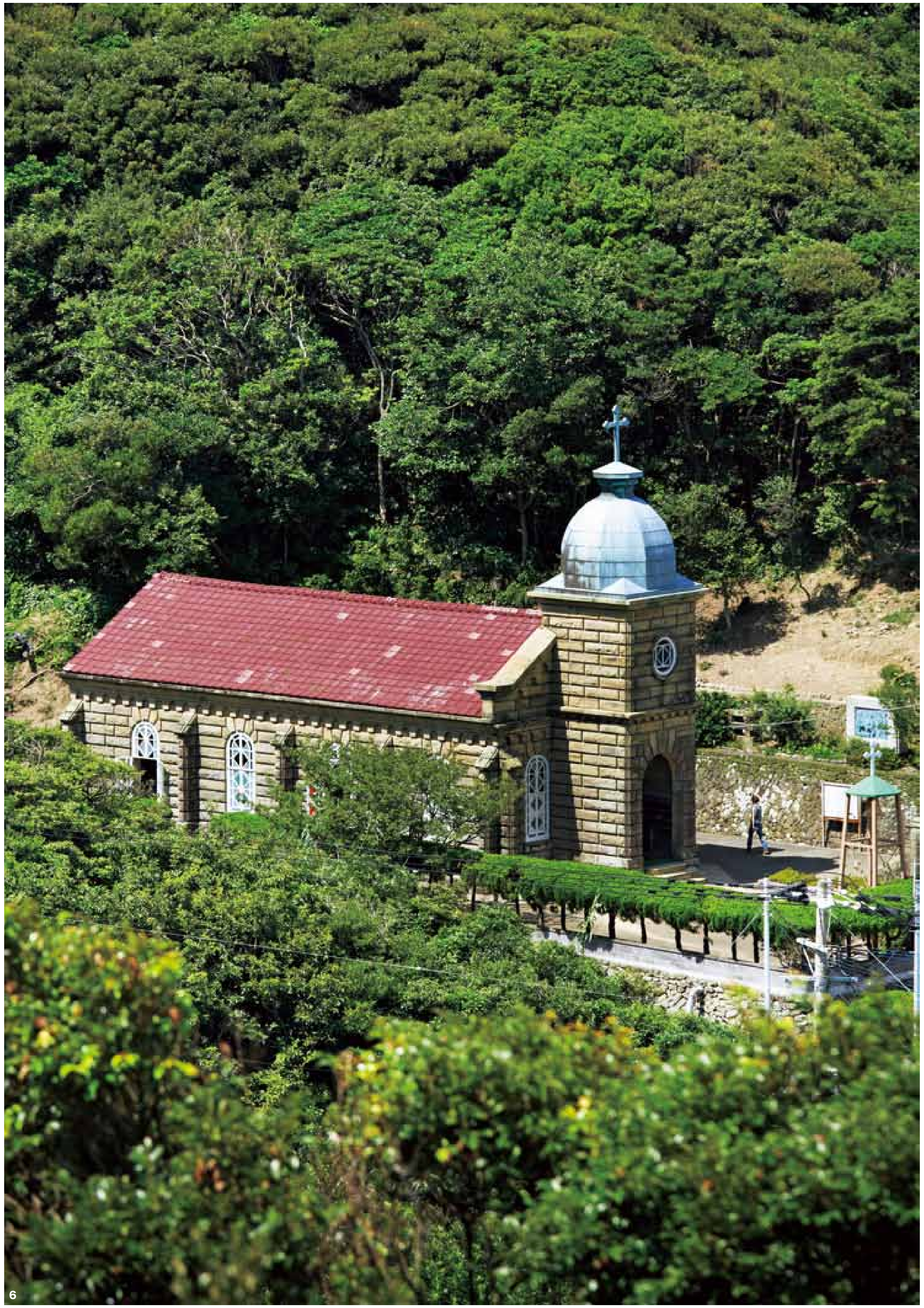
2　背後（東）から見る
半八角形の主祭壇部が大きく立ち上がり、煉瓦造壁面に3個の尖頭アーチ縦長窓が嵌め込まれる。側面の窓はアルミサッシュに取り替えられたが、ここだけは建設当時のままである。遠景の奈摩湾の対岸には冷水教会堂がある

3　会堂内部
会堂内部に2列に並ぶ列柱は、石造の柱礎と植物様柱頭飾りを備える。柱頭上の3本の付柱は上方に伸びてリブ・ヴォールト天井を支持する。アーケードの頂点には水平の装飾帯が主廊部の壁面を巡る。壁付きアーチは垂直性が強いため、会堂内には一種の厳しさが感じられる

頭ヶ島（かしらがしま）天主堂

竣工年：1919年
所在地：長崎県南松浦郡新上五島町友住郷頭ヶ島638
構造・規模：石造平屋建
【重要文化財】





1　会堂内部
擬似的なハンマー・ビーム架構を採用した小規模な単廊式教会堂である。持送りや天井折上げ部分には花柄を基調とした装飾が施され、会堂内は華やいだ明るい雰囲気に満ちている

2　背後の山から教会とロクロ島を望む
東西の斜面から下って海（北）へ開けた狭い敷地に教会堂がある。向かいのロクロ島や周辺地域（崎浦地区）には砂岩（五島石）の露頭が多く見られ、かつては長崎方面にも広く流通した

3　正面（北面）全景
門柱、石垣、石柵、司祭館（右方に隠れて存在する）にも、この地一帯で産出する砂岩が用いられ、周辺環境と一体となって優れた景観を創出している

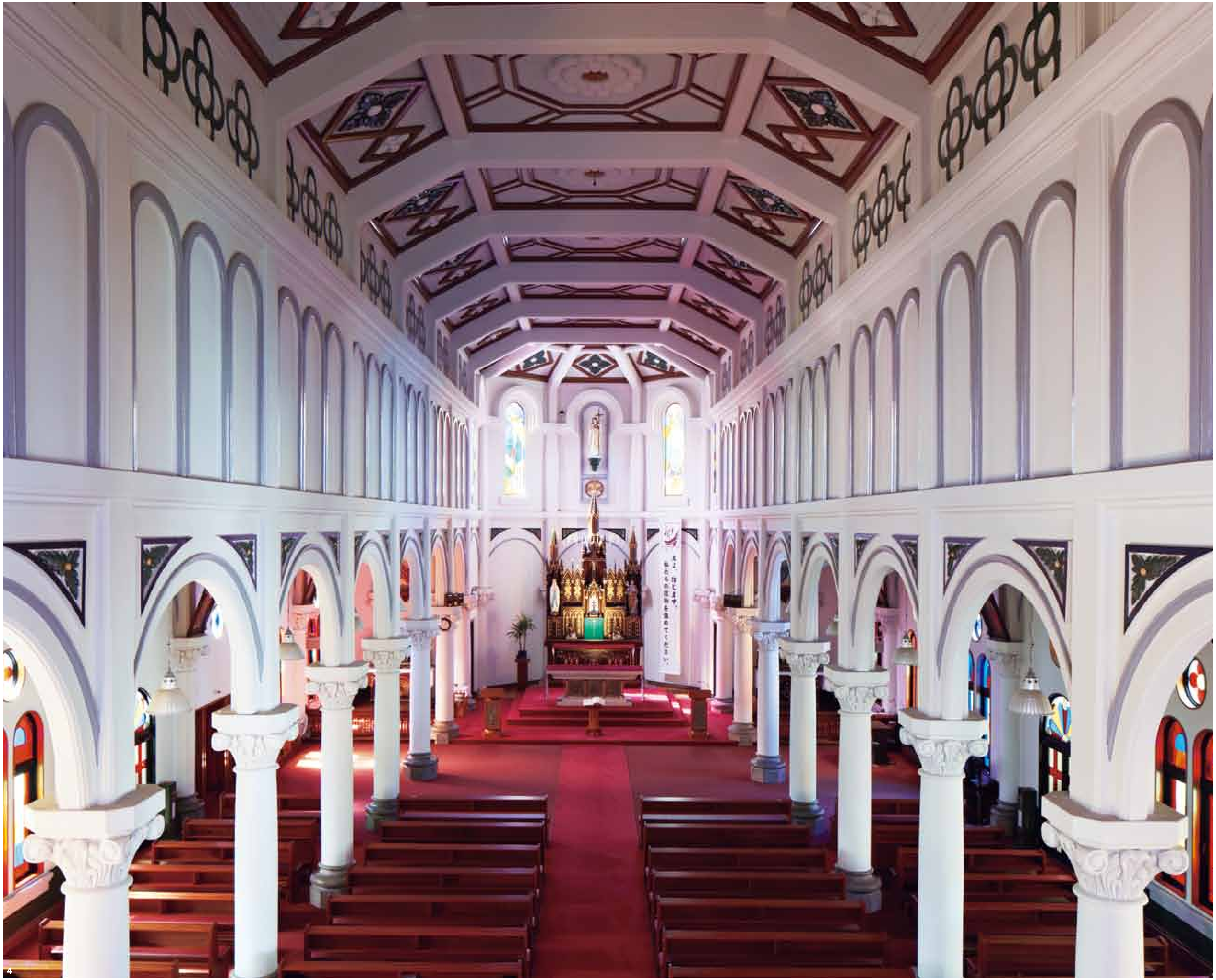
4　正面左隅の軒先飾り
壁体は砂岩の地色を活かし、目地部分を深く彫り込んだ粗石積み（ルスティカ）である。パラペットの下方と側面軒下には半円を連続させたロンバルド帯風の装飾を巡らす

5　側面窓と持送り
側壁の途中に柱頭飾りを模した台座を設け、そこから円弧状の持送りを二重に持ち出して小梁を支持する

6　北東から見る
正面中央に八角形のドームを架した塔屋を設ける構成方法は、大曾教会堂から大江教会堂まで継承されており、与助が目指したもう一つの教会堂の在り方を示している

紐差（ひもさし）教会堂

竣工年：1929年
所在地：長崎県平戸市紐差町1039
構造・規模：RC造平屋建て、一部2階建



1　南西面全景
正面には八角形のドームを戴く鐘塔がそびえ、重層屋根構成や大階段と相まって堂々たる勇姿を誇る。東洋一であった旧浦上天主堂（煉瓦造）が原爆で倒壊した後は、日本最大の教会堂と言われた。与助のRC造教会堂の代表作と言える

2　主廊部の折上天井
RC造の骨組みで格縁をつくり、各格間には与助の装飾の特徴である花柄や木の葉模様が彩色を施されて描かれる。これらの植物様装飾が空間の緊張を和らげている

3　柱頭飾りと側廊部の天井
植物様の柱頭飾りは上方に伸びる柱とアーケードを支持する。奥に見えるのは側廊部の平天井で、中央には4弁の花の四隅に木の葉をあしらった装飾がある

4　２階楽廊から祭壇方向を見る
俗に舟底天井と呼ばれる折上天井を採用し、構造材である柱や梁を内部空間に顕わにする。折上天井は祭壇に向かう水平指向性が強調されて都合が良い、とかつて山口大司教は語っている

＊「主な作品」は教会建築に限定し、その他の建物は適宜選出して「略歴」に記載しています

略歴 Biography

慶応3年［1867］	浦上四番崩れ
明治6年［1873］	切支丹禁制の高札撤去
明治8年［1875］	羅典神学校（設計：ド・ロ神父）創立
明治12年［1879］	1月13日、建築業を家業とする鉄川与四郎の長男として生まれる
明治14年［1881］	浦上天主堂（設計：フレノー神父）起工
明治15年［1882］	出津教会堂（設計：ド・ロ神父）設立
明治19年［1886］	造家学会（日本建築学会）設立
明治24年［1891］	榎津尋常小学校卒業。有川小学校高等科、榎津高等科に進学
明治27年［1894］	榎津高等科を卒業（第1回卒業生）。棟梁・野原与吉に弟子入り、元海寺の棟札に「小工与助」の名がある。日清戦争（–28年）
明治32年［1899］	曽根教会堂（設計：ペルー神父）竣工、棟梁・野原与吉、副棟梁・鉄川与助。ペルー神父と出会い、西洋建築を学ぶ
明治37年［1904］	日露戦争（–38年）
明治39年［1906］	父・与四郎から家業を相続し、鉄川組を設立。桐教会堂の増改築工事を行い、煉瓦造建築に初めて携わる
明治41年［1908］	日本建築学会に入会。堂崎天主堂（設計：ペルー神父）献堂式、棟梁・野原与吉、副棟梁・鉄川与助。渡辺トサと結婚
明治42年［1909］	鉄川家設計施工
明治43年［1910］	青砂ヶ浦教会司祭館設計施工
明治44年［1911］	長崎県庁舎（設計：山田七五郎）落成、ド・ロ神父に連れられて工事現場に行き、多くのことを学ぶ
大正2年［1913］	鉄川組事務所を長崎市に移す
大正3年［1914］	次男・与八郎が生まれる。ド・ロ神父帰天。浦上天主堂（設計変更：ラゲ神父）完成
大正4年［1915］	大浦司祭館（旧長崎大司教館、設計：ド・ロ神父）竣工、設計図はすべて与助が描く
大正6年［1917］	五島原修道院設計施工。堂崎天主堂改築工事
大正7年［1918］	獅子修道院設計施工。田平教会司祭館設計施工
大正8年［1919］	頭ヶ島教会司祭館設計施工。鉄川家設計施工
大正11年［1922］	元海寺山門設計施工
大正12年［1923］	長崎神学校設計施工。関東大震災
大正13年［1924］	浦上天主堂の正面双塔を増築する
大正14年［1925］	常清修道院設計施工。浦上神学校設計施工
昭和4年［1929］	呼子教会堂を馬渡島から移築
昭和5年［1930］	八幡教会司祭館設計施工
昭和6年［1931］	魚目尋常高等小学校設計施工、五島で最初のRC造建築と言われる。三浦町教会修道院設計施工
昭和7年［1932］	上海事変
昭和8年［1933］	新田原教会司祭館設計施工
昭和9年［1934］	小倉教会司祭館設計施工。久留米修道院設計施工
昭和10年［1935］	崎津教会司祭館設計施工
昭和12年［1937］	日華事変
昭和14年［1939］	父・与四郎逝去
昭和16年［1941］	第二次世界大戦
昭和17年［1942］	企業整備令施行。鉄川組は他の数組と第一土建株式会社を設立し、与助は専務取締役や社長を歴任
昭和20年［1945］	広島・長崎に原爆投下。第二次世界大戦終結
昭和21年［1946］	鯛ノ浦教会堂の正面部分を増築、鐘塔に倒壊した浦上天主堂の煉瓦を使用
昭和24年［1949］	第一土建株式会社から独立して名称を鉄川工務店と改称し、代表者を与八郎とする。青谷山得雄寺本堂設計施工
昭和32年［1957］	与助・与八郎の連名で日本建築学会で研究発表を行う
昭和33年［1958］	鉄川工務店を株式会社として社長を与八郎に譲り、与助は会長となる。建設功労者として長崎県知事から表彰
昭和34年［1959］	建設大臣から表彰される
昭和36年［1961］	県政90周年記念式典で長崎県知事から表彰。黄綬褒章受章
昭和37年［1962］	馬込教会堂改修工事
昭和40年［1965］	船隠教会堂増築工事
昭和42年［1967］	勲五等瑞宝章受章
昭和49年［1974］	トサ夫人逝去
昭和51年［1976］	7月5日、横浜（五男・鉄川喜一郎、美也子宅）で逝去（97歳）。戒名「献真院与楽居士」

主な作品 Works

●印は現存せず

明治40年［1907］	冷水教会堂（長崎）
明治41年［1908］	旧野首教会堂（長崎）【重要文化財】
明治43年［1910］	青砂ヶ浦天主堂（長崎）【重要文化財】
明治44年［1911］	●佐賀教会堂（佐賀）
明治45年［1912］	楠原教会堂（長崎）
	山田教会堂（長崎）
大正2年［1913］	今村教会堂（福岡）【県指定文化財】
大正3年［1914］	●宮崎教会堂（宮崎）
大正5年［1916］	大曾教会堂（長崎）【県指定文化財】
	●大水教会堂（長崎）
大正7年［1918］	江上天主堂（長崎）【重要文化財】
	田平天主堂（長崎）【重要文化財】
大正8年［1919］	頭ヶ島天主堂（長崎）【重要文化財】
大正9年［1920］	●細石流教会堂（長崎）
大正10年［1921］	●平蔵（旧浦頭）教会堂（長崎）
大正11年［1922］	人吉教会堂（熊本）
昭和3年［1928］	手取教会堂（熊本）
昭和4年［1929］	●大牟田教会堂（福岡）
	紐差教会堂（長崎）
昭和5年［1930］	●八幡教会堂（福岡）
	●戸畑教会堂（福岡）
昭和8年［1933］	大江教会堂（熊本）
	●新田原教会堂（福岡）
	●水俣教会堂（熊本）
昭和10年［1935］	崎津教会堂（熊本）
	●小倉教会堂（福岡）
昭和13年［1938］	水の浦教会堂（長崎）
昭和26年［1951］	愛野教会堂（長崎）
昭和28年［1953］	●諫早教会堂（長崎）
昭和33年［1958］	桐ノ浦教会堂（長崎）
昭和34年［1959］	浦上天主堂（長崎）
昭和40年［1965］	諫早教会堂（長崎）
昭和47年［1972］	丸尾教会堂（長崎）

鉄川与助
与助は現場を訪れる際には、いつも三つ揃いを着用していたというが、この写真はおそらく田平天主堂の竣工記念に撮影したものであろう［所蔵：鉄川進一級建築士事務所］

取材協力：青砂ヶ浦教会／頭ヶ島教会／カトリック長崎大司教区／新上五島町世界遺産推進室／鉄川進一級建築士事務所／紐差教会／平戸市役所観光商工部観光課
おことわり：文化財指定名称にのみ“天主堂”を使用し、他は“教会・教会堂”に統一しています
その他：特記のない写真は、フォワードストローク

特集２
建築ソリューション―３

都城市民会館

都城市民会館は人口10万人の地方都市・宮崎県都城市に誕生した。当時の市長の強い要請で３年がかりの建設工事がスタートし、1966年３月に完成を見た。菊竹清訓は1960年の世界デザイン会議に向けて、若手建築家グループが構想したメタボリズムの中心的メンバーだったが、都城市民会館をもって“メタボリズム”の建築理論を具現化し、“代謝する建築”を世に提示した。柱が放射状に突き出た独創性あふれる建築は、変わるものと変わらないものを明確に分け、可視化してデザインした。その試みは空調や照明など設備面にも及び、空間を構成するすべての要素を視覚化するという斬新な試みに挑戦した。後に、ひとつの時代の考え方が具体的な形をとった建築として、日本のモダニズム建築を代表する文化遺産としてDOCOMOMO100選にも選ばれている。

３年計画の広大な構想は１期をもってやむなく中断されたが、その後、そのままの状態で半世紀近く市民に愛され続けた。しかし、同市に新しく建設された「都城総合文化ホール」の完成を機に2007年２月、市は取り壊しを発表した。折しも、同市にキャンパス移転を予定していた南九州大学が同年10月、“都城市民会館の20年間、無償貸与”を要請し、市は一転してこれを受け入れ、解体の危機は回避された。今後もメタボリズム理論の良き実践例として有効な活用に期待が寄せられている。

竣工時の概要

設計	建築：菊竹清訓建築設計事務所
	構造：早稲田大学松井源吾研究室
	設備：早稲田大学井上宇市研究室
監理	菊竹清訓建築設計事務所：遠藤勝勧
	都城市役所建築課：内村春二
施工	鹿島建設株式会社：櫛田鎮太郎・遠藤繁・大久保晃・大神清
	鉄骨工事：川岸工業株式会社
	空調設備工事：昭和設備工業株式会社
	電気工事：九州電気工事株式会社
構造	RC造、一部S造
	地上2階（中2階を含む）
工期	1965.3–1966.4
所在	宮崎県都城市八幡町
敷地面積	4,604.30m^2
建築面積	2,261.40m^2
延床面積	3,065.64m^2

15頁—北東から見る：都城市民会館は市の強い要請で本来は3期に分けて計画されていたが、現実には1期の竣工をもって計画は中断され、現在に至っている。外観を特長づけている門型の架構は、最終的には当時の最先端素材・アルミで仕上げる予定だった｜16–17頁—遠景：近郊山並み中腹から見る。竣工後、約50年を経て、周辺には低層、中層建物が立ちはだかってきたが、市民会館のインパクトのある外観は、今なお際立っている｜18–19頁—東面外観：放射状の柱は1階コンクリート柱の中央1点に集中させ、この建物の特長をより強固にしている｜19頁上—北面全景：屋根の下には水平梁を兼ねた横樋が仕込まれ、それを受ける中央2本の竪樋は、柱と合体したコンクリート打放し。竪樋は流れる雨量によって詩的な響きを奏でる｜20頁上—ピロティ：かなり広く取られ、豊かな外部空間を印象づけていた。後年、ロビー拡張のためサッシュ位置を1スパン、ピロティ側に移動している｜20頁下—ロビー：竣工時は写真中央の柱位置にサッシュが入っていた。天井仕上げはリブ付きコンクリート打放し｜21頁上—食堂のドアまわり：日の出をイメージしたと言われる放射線状にデザインされた木製サッシュ。竣工時は外周部はすべて同デザインで統一されていた。現在はここだけに残る｜21頁下—全景俯瞰：市役所展望室から見る。左の低層部分は野外舞台の上に増築された楽屋

特集2［序論］

鈴木博之
Hiroyuki Suzuki

菊竹清訓が秘めていた創造性

1960年代の菊竹清訓が秘めていた創造性の驚くべき大きさは、ときが過ぎれば過ぎるほど、却って印象に残る度合いを高めてくる。

わが国の近代建築が世界に知られる端緒となったメタボリズム・グループの結成、そしてメタボリズムに呼応するかのようなかたちで存在感を強めていったイギリスのアーキグラム・グループ。それらのなかにあって、菊竹は独特の個性を示しつづけた。

早稲田大学在学中の菊竹が、どれほど設計の才能に恵まれていたか、時折耳にすることがあった。彼よりわずかに後輩で、坂倉準三の事務所に勤めることになる阪田誠造は、デザインの鬼才であり、同時にコンペなどでチームリーダーとしてアイデアをまとめていく菊竹のすがたに大きな影響を受け、そこからデザインの何たるかを学んだと語ってくれた。

菊竹自身、在学中にどのようにして実践的に建築の組み立て方を学んだか、語ってくれたことがある。彼は久留米の大地主の家に生まれたものの、敗戦と農地解放によって自らの手で稼がなければならない生活におちいり、そこで建築を職業として選んだ。久留米には石橋正二郎が興したブリヂストンという大企業があったが、菊竹が得ることのできた仕事は、既存の小屋組のトラスを再利用しながら新しい建物をつくる設計であるとか、製図工といってよいような図面作成の作業であったという。けれども、そうした地味な設計作業を通じて、建築の部材がどのような汎用性をもち、寿命をもつかを、身を以て体験したという。建築の各部分のライフサイクルごとに異なる寿命を設定して、生きつづけていく都市と建築をイメージするメタボリズム建築の考え方は、このような身を粉にするような建築修行のなかから獲得していったのである。

そこに現われるのが都城市民会館である。強烈な形態をもつこの建物は、日本の近代建築史上、ほかに例を見ない特異な位置を占める。このかたちが、何をイメージするところに生じたのか、さまざまな解釈が繰りひろげられた。鉄製の風車、トリケラトプス、アンギラス、やまあらし、三半規管、巨大カタツムリなどなど。しかしながら都城を、何か特定の形態から生まれた建築であると決めつけたところで、ほとんど何の意味もないであろう。注目すべきは、この建物が、過去の様式に則ってつくられたわけでなく、機能の分析によって生み出されたわけでもなく、特定の形態からの連想によって生じたわけでもないという、まさにその事実である。

近代建築は機能主義建築であるという定義を立てるなら、この建物は近代建築ではないということになるだろうし、無論これは様式主義建築ではない。それではこれは表現主義建築ということになるのであろうか。表現主義建築をエーリッヒ・メンデルゾーンのアインシュタイン塔、あるいはそれとはまるっきり異なるけれど、アントニオ・ガウディの作品に求めるとするなら、そうした建築の系譜に都城市民会館を置くことは、あまりに場違いだ。それでは都城はメカニカルな構造が生み出した工作物、エッフェル塔や初期の鉄骨橋などに近いものと考えるべきか。これも、どう考えても据わりが悪い。とすれば都城は、何と定義すればよいのか。

この建物は構造技術が未来の建築を切り開くであろうと考えた、未来派建築とハイテク建築の周辺に位置づく、孤独な幻視的建築ということになるのではないか。それほどまでにこの建物のインパクトは強い。

菊竹は、1958年に自邸スカイハウスを完成させ、1963年には出雲大社庁の舎を、1964年にはホテル東光園をつくり、その2年後の1966年にこの都城市民会館を生むのである。都城以外は、基本的に鉄筋コンクリート構造の建築である。都城の鉄骨構造は、突如として出現したように見えるのであるが、背後に何かがあるのかもしれない。スカイハウス以後の作品群が、シェル構造、プレストレスト・コンクリートなど、さまざまなバリエーションで鉄筋コンクリートを用いているので、その手法の開拓が都城で鉄骨に至ったのだと見ることもできる。しかしながら都城以後、菊竹が鉄骨構造をこれほど大胆に用いる例は現われない。どうしても都城は孤独な幻視的建築として孤立するのである。

それではこの特異な作品は、失敗作として孤立しているのであろうか。そう位置づけてしまうには、あまりに強烈なインパクトをこの建物は放ちつづけている。ある意味でこれほど菊竹の個性を感じさせる作品は、前にも後にもほかに無い。

ここで、ひとつの仮説を提示してみよう。菊竹が都城にこの市民会館を設計しているとき、都城に隣り合う飫肥（おび）に、丹下健三が日南市文化センターを完成させていた。この建物の竣工は1962年である。飫肥は飫肥杉や飫肥石の産地として知られる文化性豊かな小都市であり、日露戦争の終結交渉をポーツマス条約のかたちにまとめた外交官、小村寿太郎の出身地としても知られる。

日南市文化センターは、傾斜するコンクリートの壁体がダイナミックに交錯する建物で、篠田桃紅が墨で描いた抽象的な構成が図柄に用いられている緞帳をもつ。一説によれば、篠田の墨象作品が、この建物の鋭角的構成を生み出す源となったともいう。鉄筋コンクリートの構造を極めて彫塑的に組み上げた、丹下の鮮烈な作品である。ホール建築という点で、日南市文化センターは都城市民会館と共通する機能をもつ、ほぼ同規模の建築である。都城からもっとも近い場所に建ち、できたばかりの作品であるから、菊竹がこの建物に注目したことは間違いないだろう。

そうした視点でこのふたつの建物を改めて比較してみると、両者が驚くほどに似ているとともに、驚くほどに対照的であることに気づかされる。

規模といい、形態の強烈さといい、両者はほとんど同じである。丹下の作品のなかでは、造形的構成の迫力が際立っており、ほとんどこれは表現主義建築といってよいほどである。この強烈な存在感に対して、菊竹は強い対抗意識を抱いたのではないか。都城市民会館の強烈な表現意欲は、近くに建てられたばかりの丹下作品に対する、菊竹によるレスポンスだったのではないか。

そう考えると、都城市民会館が鉄骨構造によってホールの屋根を覆っているのは、日南市文化センターのコンクリート表現に対して、独自の表現を意識的に採用した結果ということになろう。丹下の路線に対して、自らの個性を極限まで明確に表出することによって、彼は自らを主張したのである。

丹下の作品に対して、当時の建築家たちは一作、一作、固唾をのんで注視しつづけていたという。それがメタボリズム形成期の建築家たちの切磋琢磨であった。

都城市民会館の内部で、空調設備のダクトが巨大な大砲のようにホールに口を開けている様子や、透明なダクトが目に見えるかたちで廊下を横切っているのを見ると、これもまた、丹下が1964年の東京オリンピックのために代々木の国立屋内総合競技場で採用した空調ダクトの表現に対する、菊竹の応答であると思われるのである。

菊竹は、都城近くに日南市文化センターをつくり、東京オリンピックの施設をつくっていった丹下に対して、渾身の力を振り絞って応答した力作であると考えられるのである。

菊竹は鉄骨構造の可能性を海上都市計画のなかで展開し、1970年の大阪万博のためのエキスポタワーに結実させていく。そこに、丹下を軸としながら、メタボリズム・グループの建築家たちが日本の近代建築を形成しつづけた時代の、作品同士の交感の軌跡が感じられる。

日南市文化センター［写真：村井修］

竣工時の北西面外観［写真：小山孝］

すずき・ひろゆき――建築史家／1945年生まれ。1968年、東京大学工学部建築学科卒業。1974年、同大学工学系大学院博士課程満期退学。同年、同大学工学部専任講師。1978年、東京大学助教授。1984年、工学博士。1990年、同大学大学院教授（工学系研究科建築学専攻）。2009年、東京大学定年退職。2009年–、青山学院大学教授。2010年–、博物館明治村館長併任。
主な著書：『建築の世紀末』［晶文社／1977］、『ヴィクトリアン・ゴシックの崩壊』［中央公論美術出版／1996］、『建築の遺伝子』［王国社／2007］、『東京の地霊』［筑摩書房（ちくま学芸文庫）／2009］など。

特集［鼎談］

新時代に挑戦した先駆者

●ゲスト●
遠藤勝勧
Shokan Endo
建築家（左）
長谷川逸子
Itsuko Hasegawa
建築家（右）

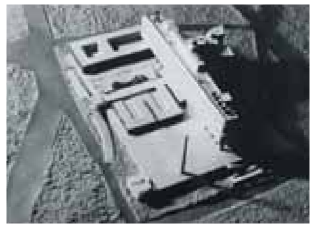
●聞き手●
古谷誠章
Nobuaki Furuya
建築家

“メタボリズム”の建築理論を具現化した、アヴァンギャルドな都城市民会館。

25歳で独立…、菊竹事務所誕生まで

古谷｜『LIXIL eye』の「建築ソリューション」という企画は、日本の近代、戦後の中で時代を画した建築を取り上げまして、その建築がどういう社会背景、どういう経緯を経て世に生み出されたか…という辺りのお話を、当時をよくご存じの方に伺って、もう一度、現在から先の世に伝えるという意味もあって、今日は詳しくお話をお聞かせいただきたいと思っています。
第1回は東京タワーで内藤（多仲）先生、第2回は香川県庁舎で丹下（健三）先生、そして3回目は都城市民会館で菊竹清訓先生の話になりますので、ある意味で戦後日本が国をつくり上げていった時代に即したものだと思います。また、前の2つは、一種の国家的なプロジェクトだったのに対して、都城市民会館は1つの地方都市が中核となる施設を立ち上げるという、新しい時代の非常に若々しい意気込みのあふれる仕事だと思っています。
そこで今日は、当時、共に菊竹先生の事務所に在籍されていた遠藤勝勧さんと長谷川逸子さんをゲストにお迎えいたしました。まず最初に、おふたりがどうして菊竹先生の事務所にお入りになったのかという辺りからお伺いします。まず遠藤さんから…。
遠藤｜僕は早稲田大学工業高等学校の夜間学校の建築学科に入ったんです。柔道をやっていまして強かったものですから、柔道で早稲田大学への推薦がありまして、建築学科でも推薦されていた。ところが、柔道部の部長が「早稲田大学に柔道ひとつで無試験というのはけしからん。試験を受けろ」と言われて、正規に受験したら見事に落ちました（笑）。それで次の年の試験に備えて、穂積（信夫）先生の口添えで、吉阪（隆正）先生の研究室に入れていただいて勉強をしていたんです。そのうち国立国会図書館のコンペがありまして、安東勝男先生とか穂積先生、柳（眞也）さん[1]、滝沢（健児）さん[2]たちがやっていらっしゃった。「手伝いをさせてください」とお願いしたら、お許しが出て、そのうち「模型をつくれ」と言われました。結局コンペに出した吉阪先生の模型は、全部、僕がケント紙でつくったものです。地面は、きなこでしたよ。
古谷｜きなこ？
遠藤｜きなこを土の代わりにして、トップライトは仁丹を半分に切って屋根に並べた。それが吉阪先生に気に入られて、徹夜をしても平気だったものですから、スーパーマンと呼ばれて可愛いがっていただいた。しばらくして、11月頃から12月にかけて、皇居の前に建っていたAIUの保険会社のコンペを、今度は武基雄先生を中心にして、吉阪先生、安東先生、穂積先生がやられた。それも手伝わせてもらおうと思って武先生に直接交渉したんですが、「今回は出る幕じゃないよ」って断られたんです。その時、大竹十一さん[3]が研究室にいらして「誰か手伝ってくれ」と大声で言ったんです。誰も返事しないので「僕やります」と言ったら、大竹さんは顔も見ないで「1/200で描いて、真ん中のコアを検討してほしい」と言われた。コアですから、小さい。15分ぐらいで持って行きましたら、机がひっくり返るくらい怒られた。「もう一回やらせてください」と言って、それから結構いっぱい案をつくった…。
古谷｜その話は全部、まだ大学に入る前の浪人中の話ですか？
遠藤｜そうです。なかなか設計は手伝えないんですけど、僕は高校の時には早稲田大学の4年生の卒業設計を手伝ったりして、学校ではちょっと有名だったんです。それでAIUのコンペの時に、パースが上手いと評判の宮入保さん[4]が、建築は徹夜で描いてほぼ完成したけど、石垣だけが残っていて、「君も石垣くらいは描けるだろう」と描かせてくれました。ところが宮入さんは僕の描いた石垣を見て、「こんなの石垣じゃない、すぐそばだから見て来い」と言われまして、12月30日、朝の6時頃ですよ、自転車を借りて早稲田から皇居に行って、石垣を全部スケッチしてから描いた。そしたら「これならいい」と言われた。ちょうどそんな頃に、今井（兼次）先生が他の先生方を連れて陣中見舞いに来たんです。僕は石垣しか描いてないんだけど、パースを見て、「君、パースうまいね」って褒められちゃった（笑）。同じ頃に菊竹さんも来たんです。
古谷｜一緒に？
遠藤｜いやいや、別の日です。菊竹さんは早稲田では有名でした。僕らの時は教科書もなくて、先輩が描いた図面が教科書だったんです。ですから菊竹さんの図面は神様みたいな図面だった。それまでは柱なんかは角が全部出ている図面でしたけど、菊竹さんの図面は、くっ付いているかいないか…なんですよ。
古谷｜線の角がちょっと離れて見えるんですよね。
遠藤｜そう。見る人によって、角が丸に見えたりして、すごく柔らかいんです。その菊竹さんが来て、「仕事を頂いたので、5人ぐらい早稲田の学生さんを僕の事務所に回してください」と言ったんです。だけど、誰も行かなかったんです。なぜかというと、菊竹さんは難しい人というイメージが強かった。竹中工務店に1年ほどいて、日活国際会館の設計が終わってから今井先生の紹介で村野（藤吾）さんの大阪事務所に行ったんです。ところがやっぱりなかなか意見が合わなくて…。
古谷｜1年ぐらいですよね。
遠藤｜そう。それで出て来ちゃったんです。今井先生はカンカンに怒って、「菊竹清訓は早稲田の人間じゃない」って…。
古谷｜勘当しちゃったわけですか。
遠藤｜そこで菊竹さんは丹下研究室に通い出したわけです。そうしたら武先生が慌てて「菊竹を丹下研究室から呼び戻す」と言って、今井先生に許可をもらって、自分の私設助手にしたんです。
古谷｜個人助手ですか？
遠藤｜そう、それで菊竹さんは研究室に戻るんですね。武先生は菊竹さんの結婚の仲人もしているんです。そしていろんなものによく書いてもいるんです

菊竹清訓［写真：石黒唯嗣］
1928年、福岡県に生まれる。1950年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。同年、竹中工務店入社。1952年、村野・森建築事務所入社。1953年、菊竹建築研究所設立。1962年、菊竹清訓建築設計事務所に改称。1995年、「軸力ドームの理論とデザイン」で工学博士（早稲田大学）。2011年、逝去（83歳）



国立国会図書館競技設計吉阪隆正研究室案［1954］［提供：遠藤勝勧］

[1]　柳 眞也［1933–2007］
早稲田大学卒業後、1984年まで村野・森建築事務所。志摩観光ホテルなどを担当。その後、柳眞也設計事務所設立
[2]　滝沢健児［1927–2013］
早稲田大学大学院修了後、吉阪隆正主宰のU研究室の創設メンバーとして1954年から1964年まで在籍。浦邸、ヴィラ・クゥクゥ、大学セミナー・ハウスなどを担当。1965年、独立。国士舘大学教授も務めた
[3]　大竹十一［1921–2005］
早稲田大学卒業後、佐藤武夫設計事務所を経て、梓建築事務所を共同設立。1952年、早稲田大学へ戻り、武基雄研究室で活躍。1954年、吉阪隆正の要請でU研究室創設に参加。主力メンバーとして、吉阪亡き後もU研究室で設計活動を続けた
[4]　宮入 保［1931–］
早稲田大学卒業後、佐藤武夫設計事務所。後に代表取締役専務。新潟県民会館、北海道開拓記念館、岩手県民会館などを担当

が、実家は地主さんで、菊竹さんは16代目で600年くらい続いた家柄と聞いていました。ところが農地改革で没落しちゃったものですから大変だったみたいで、武先生が自分の着ていたオーバーを下さってすごくうれしかった話なんかも聞きました。それで武先生のもとで設計をしていたんですが、仙台のコンペの時に菊竹さんがパースを描いたんです。それを武先生に渡したら、その絵に"武"ってサインをした。菊竹さんは「私が描いたんだから、私のサインで出したい」と言ったんですが、聞いてもらえなかった。それで飛び出しちゃったんです。

古谷｜また怒った！

遠藤｜そう。飛び出しちゃって、結局、25歳で独立したんです。当然、仕事がないんですが、菊竹さんの家は久留米で、ブリヂストンも久留米が発祥の地ですから、菊竹さんのお父さまが石橋(正二郎)さんのところへ日参したと思うんですよ。「うちの息子が建築家なんで…」と。

古谷｜「仕事をさせてほしい」。

遠藤｜そう。最初は木造施設の改築ばかりだったそうですが、そのうちブリヂストンが創立25周年を迎えるわけです。それで久留米市に何か寄贈する話になって、石橋文化センターの設計が菊竹さんのところに来たんです。で、菊竹さんは人手が足りなくなって早稲田に頼みに来たわけですが、誰も行かない。そうしたら吉阪先生や安東先生がみんなで相談して、「手ぶらで帰すわけにはいかない」ということになって、僕がお土産になっちゃった(笑)。

古谷｜お土産に出されちゃったわけですか(笑)。

菊竹さんが展覧会で着目、「コンペの模型を手伝ってほしい」と…

古谷｜今度は長谷川さんのお話を伺います。長谷川さんには、以前、詳しく伺ったことがあるんですが[5]、もう一度、菊竹先生のところへ行くことになったいきさつをお聞かせください。

長谷川｜私は大学に行く時に、数学者だった叔父と京大か東大に行くと決めて勉強していたはずなのに、女学校だったから学校の先生が調べて「国立大学の工学部建築科には女性はいませんから、行ってはいけません」って言うんです(笑)。何度も何度も職員室に呼ばれたり廊下で言われたりして、もう行けない感じだった。当時、母親が日本画を描いていましたので、自分も油絵を描いて、大学には行かないことにしよう…と決めたんです。そうしたら、横浜国立大学の男子学生から「関東学院で女性のヨットの選手を育てたいらしい。高校の時に乗っていたみたいだから来ないか」というような話があったんです。

古谷｜長谷川さんはすごく有能なヨットウーマンだったんですよね。

長谷川｜高校の時からやっていたんですが、東京で大学生活を送っていた姉貴にヨットをやっている友達がいて、そういう話になったらしいんです。私は、東京に行っても絵は描けるし、ヨットをやろうかな。家で描いているより面白いかなと思ったんです(笑)。ですから関東学院にはヨットに乗るために行ったようなもので、ほとんど横浜の本牧にあったヨットハーバーでヨット三昧でした。格好良いヨットをつくろうと思って、いつもヨットハーバーでバルサで船の模型をつくっていたんです。本牧でディンギーの帆を木綿からテトロンに代えたのは私だと思うんですよ。風を受けるにはどのぐらいの勾配がいいか…とか、造船所で縫ってもらって、自分で設計していたんです。船もつくりたいなと思って、IHIに行って鉄板のことをいろいろと聞きながら模型をつくっていた。そしてちょうど2年生の終わり頃ですが、住宅の模型をつくる課題が出たんですね。それで、私は住宅の模型もバルサでつくったんです。みんなはボール紙でつくっていましたから、先生はちょっとびっくりしたんですね。そんな時に、磯崎(新)さんや黒川(紀章)さんが早稲田大学で学生会議の展覧会をやっていて、各大学から作品を集めたらしくて、私の知らない間に製図の先生が出したんですよ。

古谷｜バルサの模型を？

長谷川｜そう。その展覧会を菊竹さんと内井(昭蔵)さんが見られたんです、早稲田で。そして大学の事務局に内井さんから電話があったそうで、「菊竹さんが京都の国際会議場の模型をつくってほしいと言っているから、打ち合わせに来ませんか」って言われてびっくりしたんです。毎日ヨットに乗っていて真っ黒い顔をしていましたし、設計事務所でアルバイトをしたこともなかったんですが、四谷の事務所に出かけて行きました。「1ヵ月か2ヵ月は学校に行けませんからよろしく」って菊竹さんが言うんです。「どうしてですか？」って聞いたら、「案がもれるといけませんから…」って(笑)。「うちの学校ではキリスト教概論と英会話を欠席すると単位が取れなくなるんです」と言ったら、「休みなさい」っておっしゃった。すごい人だと思ったら、内井さんが帰りがけに「時々お腹が痛くなればいいよ」って。「1週間に1度、痛くなってもいいんですか？」って聞いたら「いいよ」って言われたので行きました。植野模型屋さんの場所でした。

遠藤｜菊竹事務所は時期が違うんですが、四谷に2度、設計室を設けました。長谷川さんがみえたのは最初の方。

長谷川｜そう、古い方でしたね。

遠藤｜古い方は、新宿通りの日米英語学校の隣の4階建ての小さいビルの3階と4階だったんですが、国際会議場のコンペをやるには狭すぎたんです。同じ新宿区の余丁町に、ちょうど植野模型のビルが建設中で、1階にシャッターだけ入っていました。ある日、「遠藤君、明日の夜、植野さんのところに引っ越すから用意してほしい」と言われたんです。ちょうど八重洲口に菊竹清訓事務所が設計したビルが建設中で、そこに行って馬を60台つくってもらってトラックに積んで、無断で侵入したんです。30人分の製図台を用意したわけです。それで、コンペ案がもれないように、スタッフは出入り禁止だったんです。食事は全部お弁当が届く…。

長谷川｜監禁されている感じでしたが、そこで土井(鷹雄)さんと一緒に模型をつくった。国際会議場のコンペの発表の時は、菊竹さんは雑誌にアルバイトの私の名前も載せて下さったんですよ。当時、大学3年生でした。みんなには、その頃からの所員だと思われて「へぇ、そんなに年をとっているんですか」って言われた(笑)。その後、今度は菊竹さんからお電話をいただいて「浅川のアパートの設計を手伝ってほしい。春休みに来れないか」と言われて、4年生になってすぐ、とてもスマートな浅川のアパートの設計を手伝わせていただいた。そして、それが終わった頃には、菊竹さんや内井さん、遠藤さんと会ったことで、だんだん建築が面白くなってきていまして、もっと建築の勉強がしたいと大学の先生に話したら「芸大に行きなさい」と言われましてね…。芸大はその年に大学院が開校する時で、ディプロマで1番か2番を取れば入れるという話だったので、何としても1番を取ろうと思ったんだけど、2番だった。で、手続きをしたんです。それで、菊竹事務所に「大学院に行くことにしました」ってあいさつに行ったら、菊竹さんが「うちに来ればいいでしょ」って突然言うんですよ。学費がもったいないなと思いながら、でも、こっちの方が絶対にいいと思って、菊竹事務所に4月1日から正式に入れていただくことにしたんです。

古谷｜菊竹事務所にとっては最初の女性の設計スタッフですか？

長谷川｜すでに、早稲田出身の方が1人いました。

古谷｜でも、その当時、女性が設計スタッフとして事務所にいるのは珍しかったでしょう？

遠藤｜菊竹さんの亡くなられた奥さんは建築家でしたから、女性を尊重していました(笑)。奥さんは旧姓、佐々木紀枝さんというんですが、昭和27、8年頃、住宅のコンペが結構ありまして、僕らも出しましたけど佐々木紀枝さんのお名前は入選とか佳作、2等なんかにずいぶん出ていました。もともとは岸田日出刀さんの研究室にいらして、郭茂林さんのもとでデザインを勉強していたんです。

長谷川｜桂離宮の実測もしたらしくて、私にすごい図面をプレゼントしてくれました。それから、菊竹事務所でアルバイトしている時ですが、前川(國男)さんが来ると菊竹さんをけなして、すごく奥さんのことを褒めるんですよ。「紀枝さんがいるからできるんだ、君は」みたいな話をするんです。前川さんを見て、この女性はすごいんだ…と思ったことを覚えています。気遣いのある、とても良い人でした。

三段階論法のレクチュアを武谷三男先生から…

古谷｜ちょうど1960年代に菊竹先生は『代謝建築論』[6]として「か・かた・かたち」という方法論を研究されて、発表し始めるわけですね。一般的には、設計は3つの段階で生まれるという考え方で、"か"は構想的段階、"かた"は技術的段階、"かたち"は形態的段階…となるんですよね。

遠藤｜おっしゃるとおりです。それを僕独自の遠藤流で解釈しますと、"か"は菊竹さん、"かた"は内井さん、"かたち"は久慈(惇)さんと考えまして、菊竹さんと内井さんの間に土井さんがいて構想を考え、菊竹さんと久慈さんの間に武者(英二)さんがいてデザインを考え、内井さんと久慈さんの間に遠藤がいてディテールを考える。「か・かた・かたち」を実践として使う場合は、僕はこう考えて設計していました。

古谷｜なるほど…。(出雲大社)庁の舎はその三段階論法のモデルのひとつというか、具現化する大事な仕事だったんでしょうね。

遠藤｜これ[7]に書いてあるんです。最初は三角になっていないんです。

古谷｜「か・かた・かたち」がですか？

遠藤｜ええ。グルグル回っているような感じでした。ちょうどスカイハウスが出来た時、庁の舎の設計もしていたんです。それで出雲に行くと、社務所だったり宝物殿だったり、行くたびに機能が変わるものですから、機能主義じゃ設計ができない…。それで困って考え出したのが「か・かた・かたち」だったと思うんですよ。

古谷｜三角形ですか？

遠藤｜そうです。庁の舎で三角形の構図が、ほぼ出来上がるんですよ。

古谷｜当時、その代謝建築論を巡っては、事務所の中ではどういう議論をしていたんですか。所員の皆さんは、「おー、来た！」という感じですか？

遠藤｜いやぁ、実は僕らは何しろ図面を描く方が大変で、そういうお付き合いをしているのは川添(登)さんと内井さんでした。

長谷川｜よく川添さんがいらっしゃっていた。

遠藤｜菊竹さんはすごい人で、川添さんに三段階論法の元祖、武谷三男先生を紹介してもらって、まだ所員は10人くらいでしたけど、武谷さんに来ていただいて、菊竹事務所で講義をしていただいた。そういうことが、ずいぶん僕らの勉強になったんです。だから直接、菊竹さんから三段階論法…と説明されるよりも、武谷さんの講義の方が耳に残っちゃったわけですよ。それに僕らも20歳くらいですから、話してもどうしようもない。それより良いディテールを考えろという感じでしたね(笑)。

古谷｜なるほど、ディテールを考えろと…。

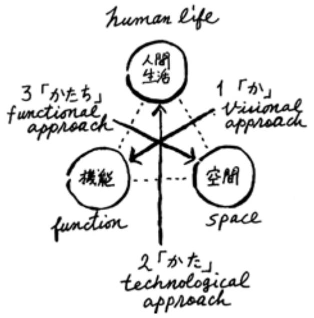
「どうしても菊竹さんに設計してもらいたいんだ」

古谷｜そろそろ、都城市民会館の話に入っていきましょう。そもそもメタボリズムは1960年の世界デザ

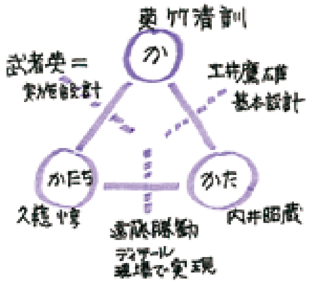
国立国際会館設計競技応募案[1963][写真:小山孝]

浅川テラスハウス[1964][出典:『INAX REPORT』No.134,1998.3]

[5] 対談:続いてきたものから新しい考えをつくる(長谷川逸子×古谷誠章)『INAX REPORT』No.182,2010.4



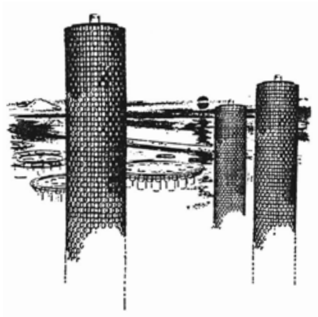
設計の三段階構造[提供:菊竹清訓建築設計事務所]



「か・かた・かたち」の遠藤流解釈[提供:遠藤勝勧]

上—菊竹清訓自邸(スカイハウス)[1958][提供:菊竹清訓建築設計事務所]｜下—出雲大社庁の舎[1963][出典:『INAX REPORT』No.134,1998.3]

[6] 『代謝建築論—か・かた・かたち』菊竹清訓著[彰国社/1969]
[7] 菊竹清訓「設計仮説」『建築』1961.11



上—塔状都市1958 スケッチ[1958]｜中—海上都市1958 スケッチ[1958][出典2点とも:『建築のこころ』菊竹清訓著[井上書院／1973]]｜下—ホテル東光園[1964][出典:『INAX REPORT』No.134,1998.3]

パシフィックホテル茅ヶ崎[1966][写真:小山孝]

[8] 遠藤勝勧「都城市民会館の思い」『DOCOMOMO Japan News Letter』No.15,2012夏
[9] 菊竹清訓「目に見えないものの秩序—空気・光・音の統一」『建築』1965.10
[10] 内井昭蔵「都城市民会館の設計過程」『建築』1965.10

イン会議を目指して、当時の日本の若手建築家たちが"新陳代謝する巨大都市"の構想を練ったところに端を発するわけですが、その中で菊竹先生は、塔状都市、海上都市などの構想を発表された。同じ頃に完成したスカイハウス、その後の出雲大社庁の舎を経て、東光園と共に、その論の展開を知る上で重要な作品だと僕は思っています。ところで遠藤さんがDOCOMOMOの記事[8]に、蒲生(昌作)市長が突然、仕事の依頼に来られた時のことを、とても感動的に書かれていましたね。そのお話をちょっと聞かせていただけますか。

遠藤｜都城には、国鉄の機関庫があったんですね。僕もあまり詳しくはないんですが、都城で労働組合の大会が年に2回あるそうなんです。その大会で1,500人を収容できる場所が都城にはない。それで「屋根が架かった、濡れない場所をつくりたい」ということで、蒲生さんが当時、建設大臣の瀬戸山(三男)さんに相談に行ったら、「都城はこれから発展する都市だから、若い建築家に頼みなさい」と言われて、候補者を何人か出して下さったらしいんです。菊竹さんが九州出身という理由もあったとは思うんですが、市長さんは菊竹さんの代謝建築論的なこと、つまり、順々につくっていくような考え方に共感されて設計の依頼に来られたんです。限られた予算でいったん竣工するけれど、その後、3年間、毎年、少しずつ追加してつくっていく…、「年間1,500万円の予算を組んで、本当の完成を目指して努力します。それを踏まえてお引き受けください。予算は少ないんだけど、どうしても菊竹さんに設計してもらいたい。決めたんだ」と言われてね。そして、「屋根だけをつくるのではなくて、私は市民会館を中心にして、ここから若い人を育てていきたいんだ」とおっしゃった。「例えば、結婚式場とかいろいろつくって、何しろ都城発展のために…」と朗々と語ったんです。菊竹さんの周りには久慈さん、内井さん、武者さん、土井さん、仙田(満)さんと私がいて、話を聞いていました。

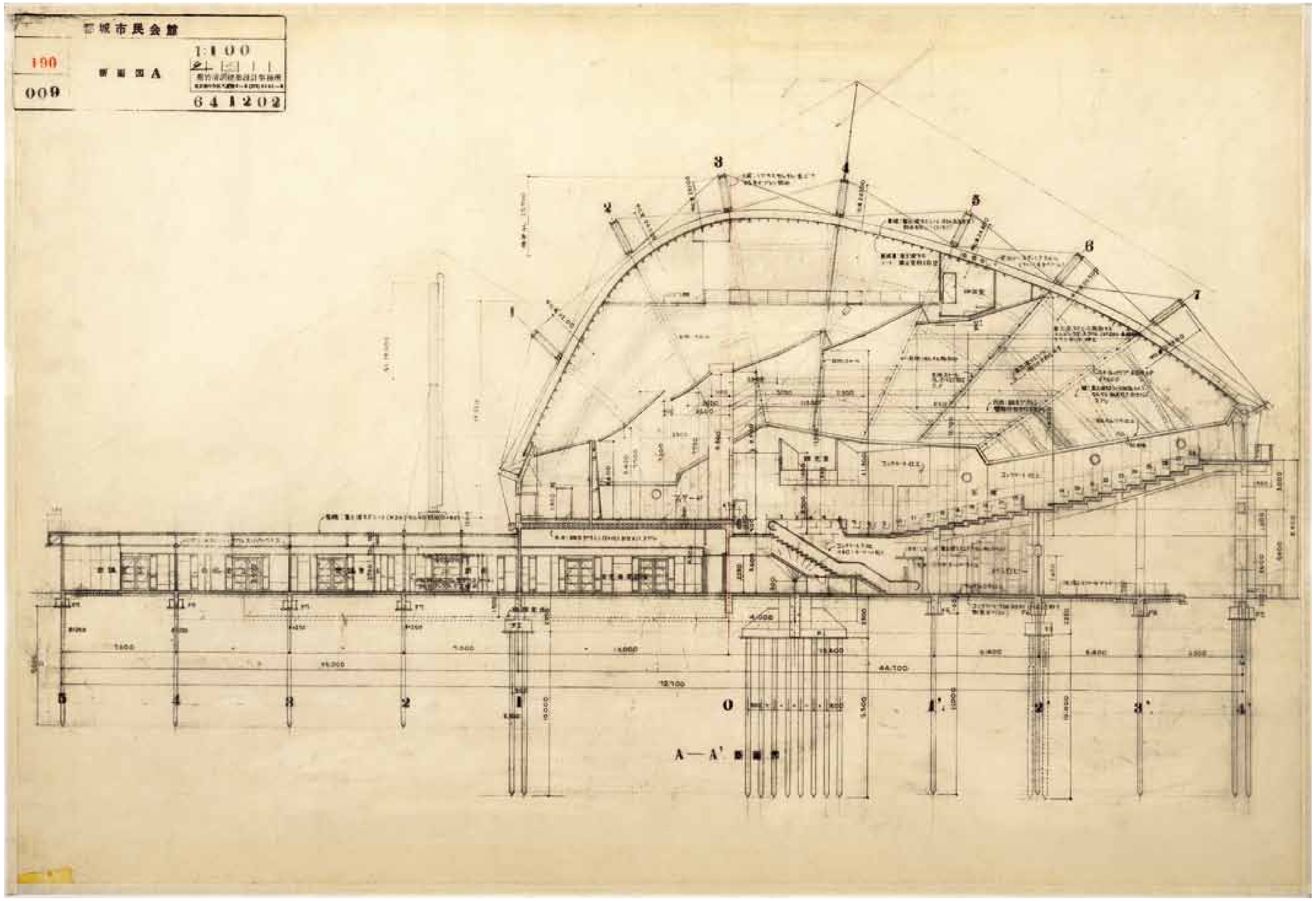
古谷｜長谷川さんも?

長谷川｜私はいなかった…。その時の話は内井さんから聞きました。

遠藤｜それで市長の話を聞いて感動したんです。「返事を待ちます」と言って帰られたけど、帰られた途端に、もうみんな「やる!」って。

古谷｜やる気満々だった。「一遍にドンとつくるんじゃない、まず大きな骨格をつくる」という話を聞くと、何かピンとこられたのかなという感じがしますね。まさにメタボリズムの新陳代謝の理論が、段階を追って成長・完成する建築の姿となって、実現する。そこまで言われると、さぞや菊竹先生も含めて皆さん、これはピッタリの施主が来てくれたという感じがしたんじゃないかと想像するんですけど…。

遠藤｜まさに、そうでした。それに加えて、「ここは台風の通路だから、雨漏りだけは絶対しないように…」と言って帰られたんです(笑)。



古谷｜それが唯一の条件だった(笑)。

遠藤｜みんなで「屋根だけじゃダメだよね…。壁をつくらないと、雨水が入っちゃうよね」って。

古谷｜それは何年頃の話ですか。

遠藤｜1964年です。

古谷｜蒲生市長が設計依頼に来られてから2年間で市民会館をつくり上げたことになるんですね。すごいですね。ところで『建築』という雑誌に掲載されたプロジェクト段階の記事がここにあります。菊竹先生も書かれているし[9]、内井先生もその後にプロセスを克明に書かれています[10]けど、計画段階なのに、つくろうとする情熱みたいなものがみなぎっていますよね。

遠藤｜そうです。特に1965年頃は、菊竹さんは"目に見えないものの秩序"を設計に組み込もうと情熱的でした。光のあるところに風があり、そこに音が混じるという考え方です。これは、都城市民会館の前にパシフィックホテルでやり出しているんです。天井に"光"と"空気"をバラバラに設計するのはおかしい。やっぱり光があるところに新鮮な空気もあるはずだというわけです。

古谷｜窓からも入ってこなくてはいけない。

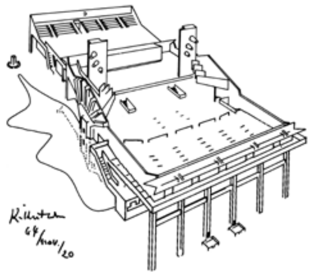
遠藤｜そうです。それで、「今の設備計画が、光・音・空気は何の関連もなく独自の体系が組まれていることが不合理じゃないか」と言うんです。「光・音・空気は調和のとれた秩序を持っている。建築の空間においても何らかの統一が考えられるはずだ」…と。結局、都城でも光・空気・音の器具を、個々ばらばらな系統で配置するのではなく、ひとつの光線・音源・吹出口からの放射という処理の方法をとったわけです。そしてそれぞれが天井の反射板に当たって機能を発揮する…と。それで、結構、いろんなことを実験しているんです。

長谷川｜そういうように、設備も構造も1つの強いテーマでつくりたいと菊竹さんが大主張している時期に、私は菊竹事務所に入所したんです。

古谷｜その頃なんですか。

長谷川｜私は入ったらすぐ、遠藤さんが現場にいる東光園の天皇陛下のベッドとかイージーチェアを担当するように言われて、ビックリしたんです。都城は内井さんを中心にして、同期の仙田さんたちがいろいろやっていて、平土間だったはずのところにイスが並んだりするスケッチを横から見ていた。そして内井さんは都城ではいつも、変化するもの、つまり機能的変化の周期の短いもの、あるいは、機能的耐久性が少ないものを生活装置。変化しないもの、つまり変化の周期が長

都城市民会館 断面図：柱芯1から5までは公民館のエリアで、この部分は起工式まで鉄骨造だったが、式の直後、鉄筋コンクリート造に設計変更した。この図は変更前のもの[出典：『INAX REPORT』No.134,1998.3]



変わらないものとする基壇部のスケッチ[提供：菊竹清訓建築設計事務所]
「…台座ともいうべき下部構造の主要部分が、鉄筋コンクリートで構築してあるのは、この意味である。“残る部分”に対して、“変る部分”がある。時代とともに、技術の進歩、社会の変化によって利用のされかたの違いができて、新らしいものに交換され、補足され、修正が予測される。たとえば舞台機構、フライ、サッシュ間仕切りなど新陳代謝する部分である。…」[出典：菊竹清訓「都城市民会館」『新建築』1966.7]

く、耐久性の大きいものを空間装置として分けて、生活装置と空間装置の対立的関係で捉えようとしていました。言ってみれば、空間の成り立ちが視覚的に把握できることをデザインの基本方針としたわけです。そしてその2つの装置のうち、鉄骨の屋根を生活装置、コンクリートの床を空間装置として、これが都城市民会館の建築的空間を性格づけている…、というような話を、事務所に入りたての私にしてくれるわけです。そういう話を聞きながら、東光園の家具をやっていたんです。それで、ある時、突然、菊竹さんがやって来て「今、みんながやっている都城の案はダメだ」って言うんです(笑)。そして、「屋根は生活装置として大切だから、屋根のスケッチをしてくれないか…」と言われたんです。「構造を一極的に集中させて、そこに光や設備の装置と構造が一体になったものをつくりたい。地盤が悪いから、そういうものにしたいんだ」と言われるわけです。私は新米でしたから、菊竹さんの目の前で、平気で乳母車の幌みたいな絵を描いて「上の方が開いて、外のようなところで音楽会をやって、労働者が集まる時は閉じるというのはどうですか」というような話をしたのをすごく鮮明に覚えています。なぜ乳母車の幌だったのか。それは力を一点に集約したものを描くと、自然に乳母車のようになった。

古谷｜内井さんが書かれた記事では、みんなが個々にいろんな案を練っていたんだけど、それらの案を決定的にひっくり返した、菊竹先生が示した案というのが、「別個に立っていた柱を1ヶ所に集中したもので丁度乳母車のホロのような形であった」[10]と書いてありましたけど、その原案は、ひそかに長谷川さんがつくっていたわけですね(笑)。

長谷川｜菊竹さんと2人でやっていたんですが、私が乳母車の案を出した時に、菊竹さんがすごく驚いたのを覚えているんです。そうして自分と菊竹さんでやったファーストイメージが佐渡(グランドホテル)や萩(市民館)まで通ってしまうと、実はだんだん怖くなってきましてね…。

古谷｜かえってね。

長谷川｜ええ。私が住宅の方向にいくのは、そういうことかな。でも、面白いとは思っていたんです。

古谷｜都城市民会館でいう生活装置というのは、この屋根全体をいうぐらいのものだから、ちまちました装置の話じゃないんですよね。

長谷川｜そうです。内井さんが私に屋根をいつも「変化する生活装置だ」と説明してくれたから、私は頑とした屋根じゃなくて、動いたりしてもいいんじゃないかと主張できた。でもですね、菊竹さんは最初に市長から頼まれた時は、「いろいろな集会ができる屋根をつくってくれ」って言われたわけですから、全体を空間装置と考えたのかな…とも思うんです。

古谷｜あの後、久留米市民会館になると、本当に仕切りの板が動いたりするようになっていくわけですよね。

遠藤｜僕はにですね、菊竹さんは「放射状の門型架構1本1本を、全部同じ長さで同じ材料で設計してほしい」って言われたんですよ。

古谷｜規格化する?

遠藤｜ええ、規格化ですね。鉄骨柱を受けるコンクリートの柱がガタガタになったのは、そういうこともあるんですよね。でも中の機能とうまくいかなくて、結果的には大梁に当たる部分だけ同じにして、柱の長さはちょっと変えちゃったんです。

古谷｜菊竹先生はジャン・プルーヴェとか、そういう人もお好きでしたからね。ある種の近代建築の規格化ですね。

遠藤｜それから、低層部の公民館は入札した時は軽量鉄骨だったんですよ。つまり、オーディトリアムが入る市民会館と公民館のお金は出所が違うために、つなげさせてくれなかったんです。建設省でもどこでも…。だけど粘りに粘ってそれをつないで、市民会館の方にレストランや結婚式場が入ることになりました。

長谷川｜最終的には、公民館の部分もコンクリートでしょ?

遠藤｜コンクリートです。始まってすぐにコンクリートに直した。現場で変更したんです。

古谷｜松井(源吾)先生は、菊竹先生とよくパートナーを組んで設計されたわけですけど、この頃にはもう光弾性実験はされていたんですか?

遠藤｜やっていました。東光園の時も、それからさっき話に出た浅川テラスハウスも。

古谷｜光弾性[11]の特性の発見はずっと古いことだと思うんですが、それを構造力学、構造設計に初めて応用されたのが松井先生で、そこからずっと今につながっているんですね。授業の時は“見える力学”とおっしゃっていました。

長谷川｜関東学院の時に私、手伝いました。早稲田大学でもやっていたんですね。

古谷｜やっていました。教科書[12]もあって、それを学生として聞いた覚えがあるんです。ただ、僕は都城の光弾性のモデルを見た記憶がないんだけど。

遠藤｜都城はないですよ。

古谷｜都城は光弾性実験はやってないんですか?これをやっていたら、さぞや、きれいだろうと思いましたけど…。

長谷川｜すごく設計期間が短かったからだと思います。遠藤さんは東光園から帰ってすぐ都城市民会館という感じで、すごいスピードでやっているのを、そばで見ていました。

古谷｜内井さんのプロセスをよく読むと、最初、松井先生は、門型の架構から鉄板の屋根を吊るという案に対して、構造的に不合理ではないかという意見でしたね。しかし討議を重ねるうちに、“屋根部分で鉄筋をブレースのように組んで全体を締め上げる”という解決案を考えて下さった。本当は遠藤さんは、屋根は架構からリブ鉄板を吊ろうとしたけど、残念ながらそれはできなかった…。

遠藤｜いやいや実際、吊っているんですが、それだけでは雨仕舞いが解決できませんから、下地にモルタルを塗ったんです。最終的には3年後にアルミで全部覆うはずだったんです。ところが、1期の時は予算は仕上げをしない金額しかなかった。

古谷｜外装を?

遠藤｜外装も内装も。ただ緞帳だけは仕上げレベルでした。布じゃなくて、伊藤(隆道)さんにアルミピースで立体的につくっていただいたんです。

長谷川｜そうでしたね。伊藤さんのところまで私、打ち合わせに行った覚えがある。あの緞帳はきれいでしたよね。

遠藤｜客席のイスも取り替えるはずだったんです。全部外してストリートファニチュアにする、そのためにプラスチックでつくったんですよ。

長谷川｜あのイスは菊竹さんと私のお尻の型を取って、結果、大きい方の私のお尻を選んで、デザインしたものです。

古谷｜そうですか。

遠藤｜ホールの壁ですが、柱をつないでいるのが三角形の水平梁なんですけど、これも下地にして桟を入れてアルミパネルを貼るはずだったんです。ホールの天井には一切照明はないんです。客席の照明は両側の調光室から緞帳に向けて投光して、キラキラ反射して光る効果をねらったんです。

古谷｜とにかく本当はまだ完成だと思っていなかったのに、突然そこで断ち切られちゃったわけですよね。

遠藤｜ええ。つまり3期計画で仕上げていく、そういうディテールにしていたんです。

古谷｜構造の方は何とかなった。音響もこの形でうまくいきそうだったわけですか?　音響はどなたが?

遠藤｜永田(穂)さんです。菊竹さんは、反射板がそのまま外部の形態を決めるように、屋根と一体に考えようとしていたんです。ベルリン・フィルハーモニーでも、構造が音響板を兼ねているんですが、結局うまくいかなくて透明の反射板を追加しているんです。都城も全く同じです。音響は永田さんにずっと指導していただいたんですが、どうしても空間ボリュームが大きすぎるために、何でもいいから1枚入れてほしいと言われまして、天井はコンクリートで固めた木毛セメントを木のリブに付けて貼ったんです。永田さんは、当時はNHKの総合技術研究所にいらっしゃったと思いますが…。

古谷｜結果としては、割合むき出しの状態で、追加した反射板で出来ている。一方、アルミの内外装は先ほどのお話のように、選挙で落選したから蒲生市長さんの3年計画がうまくいかなかった…。選挙はこの市民会館と何か関係があったんですか?

遠藤｜選挙演説で「道路をつくらないでこんなものをつくった」という、相手方の攻撃にあいまして、それで落選した。しかも、たった16票だったそうです。

古谷｜16票差ですか。そのおかげで、市長さんが最初に力説された“3年間にわたって順々にやっていきましょう”という計画が全部なくなってしまったんですね。

遠藤｜そうです、全くなくなってしまった。

オーディトリアム内部：プラスチックのイスと、伊藤隆道作のアルミピースでつくられた緞帳。このインテリアも3年後には、イスは木製に、壁・天井はアルミ材に変わり、アルミの緞帳とハーモニーを生み出す計画だった。壁面の装飾に見える材は、アルミパネルを貼るための水平梁で、下地材だけが今も残っている。吹出しノズルはヒューム管で、先端切り口のみアルミ材[写真：村井修]

目に見えないものの秩序
空気・光・音を統一する

古谷｜構造がまず解けた。そして音響も何とかなった。最後の難物が空調だったと思うんですが、井上(宇市)先生が、「左右2ヵ所から、こんな大きなノズルを出すのは合理的ではない」と言って、ずいぶん反対されたというお話ですが…。

遠藤｜反対されたんですが、菊竹さんは当時、代々木体育館の空調はノズルでやっていたことを知っていましたので、そういう方法もあるんじゃないかというわけですよ。菊竹さんは“ノズル好き”だったんです。パシフィックホテルもノズルなんですよ。まだ、誰もやっていない時に「風が当たれば体感温度が下がる。部屋全体を冷やさなくてもいいはずだ」と言って、都城には大砲みたいなノズルを付けたんです。代々木体育館はアルミでつくっているんですけど、都城市民会館はヒューム管です。コンクリートを切ってそのまま…。

古谷｜ちょっと荒っぽいというか…。

遠藤｜そうです。コンクリートですからね。

古谷｜菊竹先生が1つの原則を全体に徹底しようとお考えだった感じはよく分かります。でも、最終的に、よく井上先生が引き受けて下さいましたね。

遠藤｜やっぱり、やっているうちに面白くなったんじゃないでしょうか。それと、井上先生の研究室に水野(宏道)さんがいらして、水野さんがこのホールに、とても強い関心を示されたんです。

古谷｜例えば、ノズルから風の音がするとか、そういう問題はなかったんですか?

遠藤｜なかったです。竣工後もずっと、音を始め、いろいろな実験をしまして、水野さんが論文を書いて雑誌に発表していました。

古谷｜そうすると菊竹先生の言う“見えないものの秩序”が1つの原則の中に出来上がって、その完成を見

上―佐渡グランドホテル[1967][提供：佐渡グランドホテル]｜中―萩市民館[1968][出典：『INAX REPORT』No.171,2007.7]｜下―久留米市民会館[1969][出典：同No.134,1998.3]

[10]　光弾性
外力を受けて歪んだ弾性体が、光に対して複屈折を起こす性質。偏光を当てると光の干渉によって縞模様が現れ、物体内の応力分布を推定できる
[11]　『見える力学―力と縞』松井源吾著[鹿島出版会／1986]

たわけですね。その中には、空調にしても全館均質になる必要はないと…。むしろ逆にムラのある状態で、必要なところに必要な風が吹く…、そういう考え方ですよね。当時としてはやっぱり、相当、異端でしたでしょう？

遠藤｜そうですね、ちょうどこの頃はアームストロング方式といって、天井の中、全部に空気を入れて、どこからでも空気が出るように…。アメリカでは、今、考えるとメチャクチャに無駄な空調をやっていて、それが全盛といいますか、新しい考えとして採用されていた時ですからね。菊竹さんは"最小の空気できちんとできる"という考え方を進めていました。

古谷｜先ほどの計画案の時の菊竹先生の論文を読むと、"目に見えないものをどう可視化して、しかもそれに秩序を与えて建築のデザインにするか"ということが書かれているんですが、設備については先ほど伺いましたし、構造に関しては光弾性の写真でそういうことが可能になってきた。それから菊竹先生は電気工学の回路設計とか電気通信もお好きでしたね。

遠藤｜そうです、好きでした。

古谷｜そういうものも目に見えないものだけど、特に設備こそが、まさに目に見えない秩序を建築に要求しているといって、本当に空気や光や音を対象にすることを言われていた。ただ、これは実に50年前の話ですから、相当、先進的だったんですよね。今、やっとそういうことが現実になりつつありますけどね。

遠藤｜そうなんですよ。

石橋美術館［1956］［提供（絵はがき）：遠藤勝勧］

菊竹さんの根底には、日本的な感覚が潜んでいる

長谷川｜今日、『代謝建築論』を持って来たんですが、これを読むと、私は菊竹さんや内井さんの発言に相当な影響を受けて仕事をしてきたことが分かって、驚いています。例えば空調についても、エンジニアリングの在り方のバックには自然というものがあって、"ムラになる"とか"均一にする"というよりは、もっと身体的な領域を考えている…、例えばイスをつくる時でも、人間の身体に合うものをつくろうと、いろんな人が何回も座って試したりした。そうした時の言葉を聞いていると、自然観というか、菊竹さんの根底に、日本人の振る舞いや日本的な生活感覚が潜んでいるから、自然に理解できるんですよね。

遠藤｜そうそう、もともと遺伝子としてそういうものが伝わっていたと思うんです。菊竹さんは25歳ですから、比較的早く独立したことになりますが、先ほど話した石橋文化センターの石橋美術館を設計しまして、そこは全部、自然採光と自然通風だったんですね。石橋さんはブリヂストンの創立者で合理主義者ですから、自然採光とか自然通風を重視した考え方を理解してくれて、そういう美術館をつくることができたわけです。それを島根県の田部長右衛門さんが、まだ知事になる前に見に来られて、自然を上手に使っていることに感心されたんです。そして「自分がいつか知事になったら、この方に建築を頼む」と言われたんです。で、しばらくして知事になられて、早々に松江に島根県立博物館をつくる。その時に「自然採光、自然通風で設計してください」と言われたんです。

上—島根県立博物館［1959］｜中—島根県立図書館［1968］｜下—島根県立武道館［1970］［出典3点とも：『INAX REPORT』No.134,1998.3］

［13］ 平良敬一「都城市民会館」『SD』1966.7

古谷｜図書館じゃなくて、その前の？

遠藤｜博物館です。妻側に連続した3枚羽根のサッシがあって、羽根の角度を変えることで、通風・採光の調整ができるんです。そしてこの博物館の誠実な仕事ぶりが田部知事さんの心を打って、出雲大社に連れて行かれたんです。そうしましたら菊竹さんが出雲大社を見て、たいそう感動した。その感動ぶりを見て田部さんは、庁の舎の設計を頼まれたんです。田部さんは出雲大社の奉賛会の会長もされていて、力のある方なんですね。それから、島根県の県庁の周りの図書館とか武道館もずっとやらせてもらうようになりました。

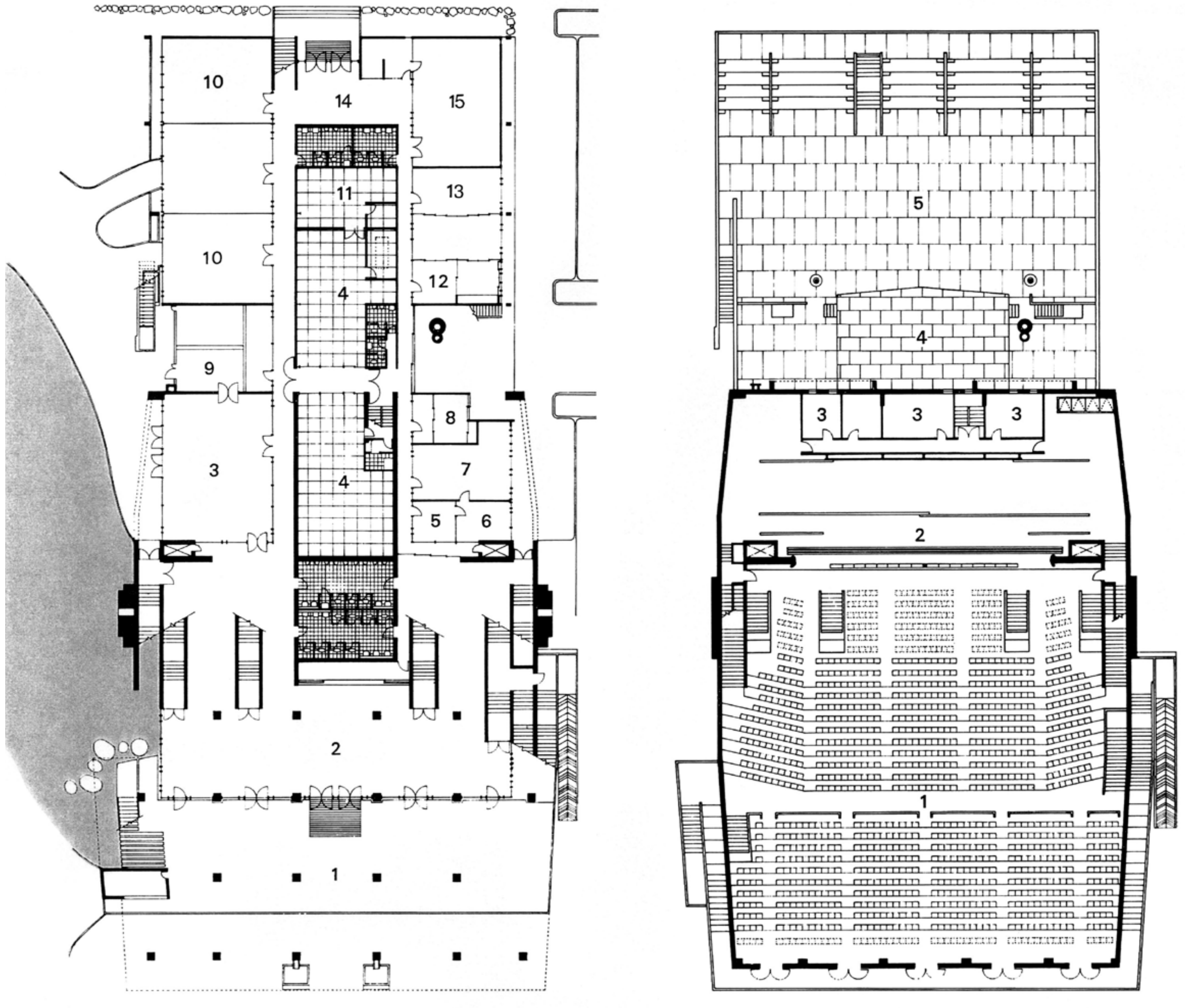
長谷川｜ところで、丹下さんの自宅の数寄屋造的な伝統建築と、菊竹さんのスカイハウスを比較してみると、スカイハウスは民家を基盤にした生活から出てきた建築で、この2つはものすごく違うと、私は思っていた。菊竹さんのスカイハウスの原点にあるのは、民家なんですね。私は篠原（一男）先生が言った「民家はキノコ」という言葉がすごく気に入って、篠原先生のところに行くんです。そして1年間、東北から沖縄まで民家を見て回って、民家のありようは、篠原先生より菊竹さんの精神に近いことを確認した気がしました。菊竹さんの原点は数寄屋ではなく民家であることを、私はすでに感じ取っていました。そして菊竹さんは「伝統というものは、先に進めないと活きない」と。機能からつくるのではなく、空間に新しい機能を発見するという考えを持っていた。民家の精神みたいなものがあるんです。遠藤さんが言うように素質かもしれないし、生まれ育った環境から考えたものかもしれない。

遠藤｜スカイハウスは、菊竹さんと奥さんが設計したんですけど、僕らもお手伝いしたんです。その時、菊竹さんは「西日の美しい建築にしてくれればいい」とおっしゃった。それがすごい。今は西日は当たりませんけど、昔は護国寺の門前通りの向こうの目白の方に、なだらかに山が連なっていて、西日がいっぱい入って来たんですよ。西日の美しい建築ということは、今でも頭に入れているんです。東光園もそうなんです。南北に長い。ですから客室にまともに西日が当たったり、東の光が当たったり、それで美しいんです。

長谷川｜東光園は朝日も夕日も見えるんですよね、泊まってびっくりしました。

代謝するはずだった都城市民会館が…

古谷｜設計から完成まで極めて短い期間だったと思うんですが、いざ都城市民会館が竣工して、そして雑誌『SD』で、平良（敬一）さんがかなり厳しい檄を飛ばしていますね［13］。



長谷川｜いろんな人が厳しいことを言っていました。

古谷｜菊竹先生は、「構造では、力の流れを、はっきりそれと判るように視覚化することで、デザインのプロセスのなかに構造の問題を組み入れて考えることができた」と書いていましたが、まだそうはなっていない、「観覚化してみせることが、デザインであるという立場をあくまで貫ぬくことこそ、菊竹清訓にふさわしい態度というべきである」、次の時はもうちょっと上手につくれって、平良さんは書いているんですよ（笑）。施主が読んだら大変な文章だなと思いました。でも事務所としては、これが完成した時の散々の議論の中でも、新しいものをつくるぞという高揚感があって、良い施主にも恵まれて、事実これが竣工したわけですよね。その時の皆さんの感慨といいますか、そういうのはどうだったんですか？

遠藤｜いやぁ、僕らはまだ途中だと思っていたんですから…。もう大変だった。

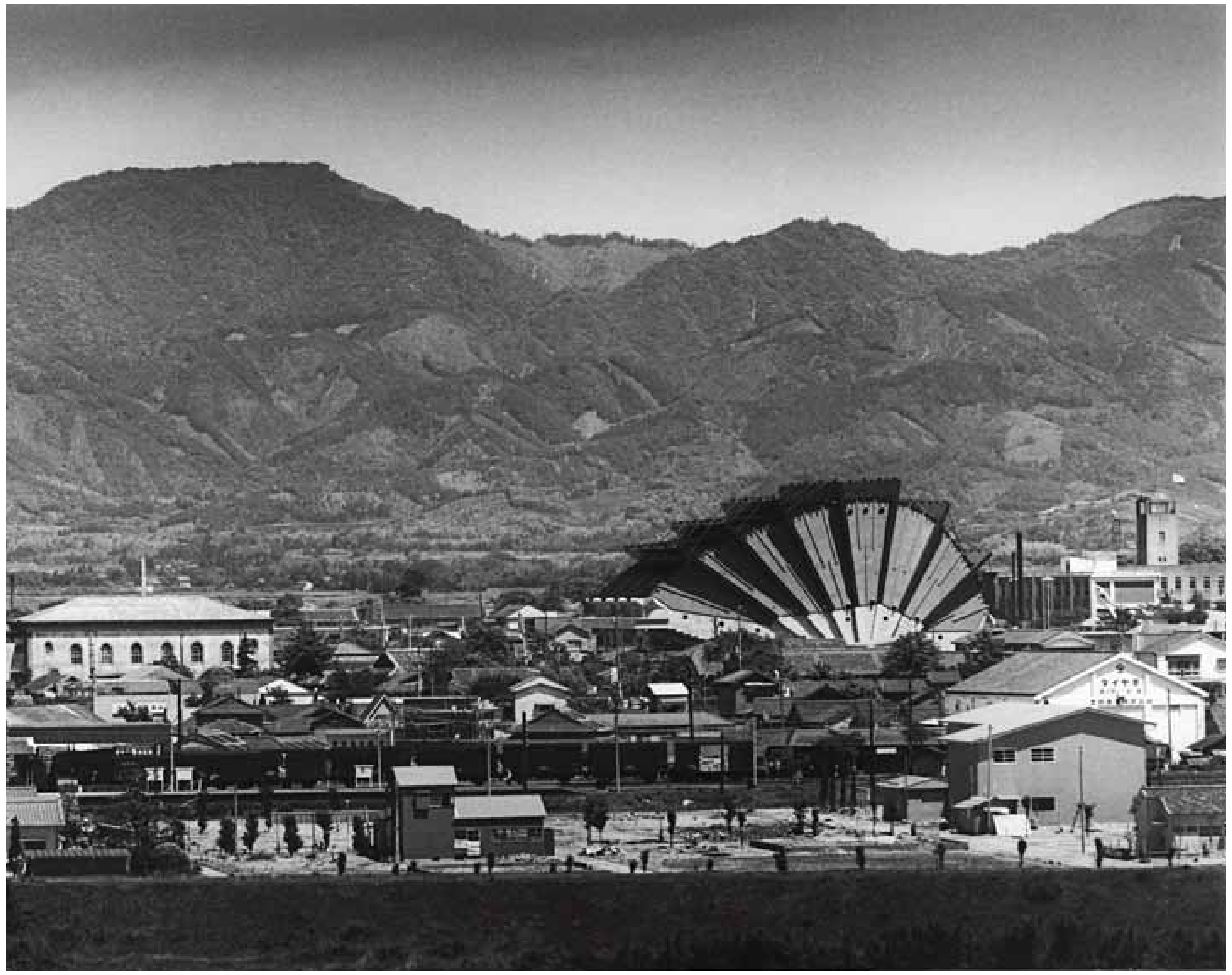
古谷｜代謝するはずだったものが、竣工した途端に固定されちゃって、それ以来、何十年も結局、固定されたまま…ということですね。

長谷川｜そうです。当時は竣工して雑誌に発表されたことよりも、建築が中断されることにびっくりしている方が大きかったですね（笑）。

古谷｜とにかく、いろんな経緯があったんですね。

遠藤｜蒲生市長の後、1代おいて市長になった堀之内（久男）さんは、その後、国会議員になられたんですよ。それで世界を回った時にですね、1979年頃、たしかパリだったと思いますが、そこで「国会議員の堀之内です」と自己紹介した。そして故郷の話をした時に"都城"と言いましたら、誰かが「九州の都城ですか？」と言って、都城市民会館の写真を持って来た。「ここだ、ここだ」となりまして、「都城は大変なまちで、この市民会館は本当にすごい建築です」と言われた。この時、市民会館は使われてはいたんですけど、市長が何度も変わったこともあって市は補修のお金を出していないし、ほうりっぱなしだった。ところが、帰国

都城市民会館 平面図：1階、4の機械室の床は2m下にあり、中央を通る廊下からガラス越しに運転の仕組みが見えるようになっていた。各室に向かう空調ダクトは透明アクリルパイプだった
左—1階平面図：1.ピロティ、2.メインロビー、3.食堂兼宴会場、4.機械室、5.応接室、6.館長室、7.事務室、8.管理人室、9.厨房、10.会議室、11.電気室、12.理容室、13.控え室、14.玄関ホール、15.結婚式場｜右—2階平面図：1.観客席、2.ステージ、3.楽屋、4.野外舞台、5.野外観客席［提供：菊竹清訓建築設計事務所］



竣工時の西都城駅からの遠景：都城市は周囲を岳や峰に囲まれた盆地。市民会館の屋根の曲線は鰐塚山地の稜線をイメージしている［写真：小山孝］

してから「これは大変な建物だから…」という話になって、慌てて補修費を少し付けてくれたんです。それで小梁のカバーを外してみたら、中が錆びていたので部分補修をしたり、塗装工事などもできたんです。

古谷｜15年くらいの間は、ほとんど手を付けられずにそのままになっていて、その後、今のような話が出て少しは修繕できて、そして今に至る。今度は保存問題の話が起こるんですが、新しいホールをつくる話になるまでは、ほとんど変わらない形で使われていたわけですよね。

遠藤｜そうです。ただ、2階の屋外舞台に楽屋を増築しました。

長谷川｜そうそう、増築がありましたね。

遠藤｜この市民会館には、舞台の衣裳部屋も楽屋も何もなかったんです。それで増築してほしいと言われまして、野外劇場に軽量鉄骨でプレハブみたいな箱をつくって載せたんです。それで、舞台後ろの大梁に穴をあけてつないだ。ただ、それだけの簡単なものです。今、行っても分かります。

古谷｜もとはと言えば、「平土間のところに屋根を架けるぐらいでいい」という話から始まってのゴールですからね。そう言えば、この矩計図を描いた時の苦労話を聞き損なっていました。矩計図を描かれた時の話をぜひともお聞かせください。

遠藤｜一番困ったのはやっぱり「この柱の長さを全部同じにしてください」って言われたことですね。

古谷｜この矩計図はオリジナルの図面ですね？

遠藤｜はい。そういえば、この大梁の上の水平ブレースの納まり部も見直しているんです。金物がゴツすぎて、美しく見えない。それで、その部分をパイプをクロスさせて軽やかにしたんです。

古谷｜屋根のカーブを決めるのは、どうやって決めたんですか？

遠藤｜これは最初、土井さんが描いていました。あんまり菊竹さんが難しいことを言うものですから、土井さんが「もう遠藤さんに任せるよ」と言われて、それで僕が描き出したんです。結構、図面を描いちゃ模型をつくる…、それを繰り返しながら決めていったんです。

古谷｜屋根はオーディトリウムの内部空間ですからね。客席から舞台への可視線や音の反射など、いろんなことが決め手になると思いますが、このカーブの決め方は難しいですね。

遠藤｜これは都城市を囲む山の稜線です。それに合わせたんです。

古谷｜山？　後ろの山の形に合わせたんですか。それは知らなかった。

遠藤｜そう、稜線です。

長谷川｜図面を描く時から知っていたんですか？

遠藤｜知っていました。

古谷｜確かに、このカーブは山の稜線ですね。初めて聞きました。でもこういうことは大事ですよね。周囲のそういうものがトレースされていると、やっぱりどこか調和するところがある。

遠藤｜菊竹さんの設計したいエレベーションとか断面は、僕はだいたい想像がつきますから…。必然性があると、菊竹さんは“どこから決めたか”とか、“芯の出し方”とか、あんまり文句を言わないんです。

長谷川｜オリジンは稜線にあったんだ、全然気が付かなかった。初めて知った。

古谷｜当時の写真を見ると、一目瞭然ですね。今日お伺いできて良かった。

都城市民会館がこのまちにあったことを後世に伝えたい

古谷｜1960年代ぐらいに全国に文化ホールとか文化会館が建てられて、それが今40年、50年たって、音響性能とか遮音性能、耐震性など、いろんな事情から建て替えになる話が起きていると思うんです。しかし都城に限って言えば、これをただ壊しちゃうのではなく保存したいという方が現れて、そして現在は“近代建築の保存”ということがものすごく大きなテーマになっていると思うんですが、それが功を奏して残ることになった。たいがい、“気が付いた時にはすでに遅い”ということが多いのですが、都城の場合には幸いというか、間一髪で、とりあえず保留された状態になりました。この間の経緯はどうだったんですか。遠藤さんのところにも、そういうお話があったんですか？

遠藤｜最初に壊されるという問題が起こりまして、それで僕が呼ばれて、アートでまちを楽しくしたい企画集団M・A・P主催のイベント「都城ストリート2005」に呼ばれて「エネルギーを秘めた都城市民会館」というテーマで講演したんです。その講演の時に、蒲生元市長が「市民会館に結婚式場をつくって、ここから若い人を育てていきたい…」とおっしゃっていたという話をしたんです。それと工事中に、蒲生さんが「都城は高速道路もないし、他の地域に行くのも大変だし、遊びに行くところがない。ちょうど工事をやっているから、都城工業高校の生徒に夏休みに見学させてほしい」と言われました。その時、鹿島建設の現場所長と副所長さんに相談したら、「見学だけじゃ何にもならないから工事を手伝ってもらおう」ということになったという話もしたんです。

古谷｜高校生たちに実習ですね。

遠藤｜ええ、実習です。当時は安全みたいなものも、今ほど厳しくなかったですし、工業高校ですから電気科も建築科もありますし、いろんな生徒がいた。それでまず建築科の生徒何人かに来てもらって屋根を葺かせたんです。それから緞帳を手伝った人もいるし、音響を手伝った人もいる。最後は学校に行かないで、みんな現場に来て何かしら手伝っていたらしいんです（笑）。講演の時に「若い工業高校の生徒さんたちが手伝って下さった」という話をしたところ、講演が終わって懇親会になったら、「私は屋根を…」って。

古谷｜手伝いましたって…？

遠藤｜そう、「1回大阪に出て仕事をして、今は都城に帰って来ています」と。1人が出たら、私も、私も…って、そういう話が盛り上がって、その時、「都城市民会館を考える会」が生まれたんです。

古谷｜当時のかかわりがあって、やっぱり愛着があるというか、文字どおり一緒につくったんだっていう…。

遠藤｜その会が出来て2回目の会合の時は、まだ残るか残らないか分からない時でしたが、鈴木博之先生に都城に行って講演していただいたんです。その日は大嵐で、崖崩れで鹿児島方面からも宮崎方面からも来られない孤立状態になっていたのに、都城市民会館の中へ入ったんですね。そしたら、高校生がシンフォニーの練習をしていたんです。それに大嵐だったんですが、雨漏りもしていなかった。

古谷｜漏っていると思って行ったのに…（笑）。

遠藤｜そう。それで鈴木先生はその練習をしている姿を見て、良いなと思ったそうです。ホールは決して豪華ではないけれども、「ひとつの時代の考えがこれほど濃密に具体的なかたちをとった例は少ないのではないか。これがこのまちにある意味は大きい。残した方がいい」と、講演会ではそういうことを話してくれたんですね。

古谷｜僕もたしか初めて行った時、客席の傾斜のなだらかな感じと独特の空間性があって、広場みたいな感じがしたことを覚えています。

長谷川｜そうですよね。その後、『日経アーキテクチュア』に南九州学園大学の施設になったと出ていました[14]。

古谷｜そうそう。とりあえず20年間無償で借りるというかたちで一応存続した。市が計上していた解体予算が通って、それをアスベストの除去工事に回したとか…。その後、学校が新たにもう一度それに手を加えて改修するというふうに記事には書いてありましたけど、遠藤さんはそれに何か、かかわりはあったんですか。

遠藤｜ないんですけど、直す時は…といって菊竹事務所にちょっと話があったらしいです。

古谷｜菊竹先生も、保存の顛末はお聞きになったんでしょう？　残すことに決まった時に、先生は何かおっしゃっていましたか？

遠藤｜喜んではいましたけど、自分から…というのは。

古谷｜幸運なことに、取り壊しは免れているのですが、実際に使われてはいないようですね。ここから先、どういうふうになっていってほしいと考えますか。

長谷川｜ずいぶん前ですが、私が行った時は使っていたのに…。基本的に、使わないと建築ってダメなんですよね。私が設計した湘南台文化センターは、初めは実験劇ばかりでしたが劇団の人に開放していました。あおいう感じで地方にある劇団の本拠地にしてもらう

［14］「都城市民会館を守った市民の800日」『日経アーキテクチュア』2008.5.26

資料を見ながら談笑する遠藤氏(中)、長谷川氏(右)と古谷氏(左)

ようなことが、ふさわしいように思いますね。

古谷｜アスベスト除去工事まで終わっているとすれば、さっきの工業高校の生徒じゃないですけど、見学実習のようなかたちででも、現場を見て、あるいは部分的にはセルフビルドのようなかたちで活用するなんてこともできますよね。

長谷川｜そうそう。ベルリンの壁崩壊の後、東側のバウハウスとか数ヵ所の大きい大学にレクチャーに行ったら、いろんな学校が壊されていて、生徒たちがみんなで手づくりで補修している学校がありました。ディテールのモックアップをつくりながら進めていた。ああいうのいいですね。若い人たちは元気だから、校舎1個くらいつくれるんですよ。サッシュを入れられないので、白いカーテンを下げているのがまた格好良くてね。そういう学校を見ました。手づくりが入ると、建築って手触りが優しくなりますね。そういう学習の場所にしてもらうのもいいですね。

古谷｜九州の高校生とか、もちろん大学生も小学生も含めてね。

長谷川｜いいですよね。コンクリートを洗うだけでもいいですよ(笑)。

古谷｜それを使えるように考えて工夫する…、そのことをワークショップのようにしてみんなでやれば、それこそ昔の都城の工業高校の学生たちが、今こうして保存に力を出したように、これで育った人が、何十年か先の将来につながる。そうすると最初に蒲生市長が「ここで若い人を育てるようにしたい」と言われたことが繰り返されていく。そういう感じがしますね。

遠藤｜今、新しく建ったホールはやっぱり使用料が高いんです。お母さん方が反対したのも、新しいホールよりも古い市民会館の方が良いって言われたのも、小学生はタダ同然で使えるということもあるんです。子どもたちも発表会などでスポットライトを浴びたり、音響の効果を体感できたり、そういうことができる場を残してほしいというのが、ひとつの大きい理由だったんですね。

古谷｜市民会館をずっと使い続けてもらうために、「タダでもいいから使ってくれ」というようなことをやった方がいいかもしれませんね。

遠藤｜安全だけ気を付けてもらえば、大丈夫だと思います。

長谷川｜遠藤さんと学生のワークショップもいいかな(笑)。

古谷｜子どもたちに使ってもらいたいですね。そういうことなら私も手伝いたいです。

遠藤｜日本中どこを見ても、すごい情熱家が1人でもいると、結構まとまっていくんですけどね。今、都城の中でも地元の方たちが、残そう、残そうって運動して下さっている。市の人でも誰でも、ちょっと核になってくれるといいですね。そうなると都城市内だけじゃなくて、宮崎市とか他都市からも人が来るんじゃないですか？　バスの旅行も含めて社会勉強になりますね。そういうことを子どもたちにやってもらいたい。コンクリートもまだしっかりしているんです。上手に使っていただけば、まだまだ使えると思う。

古谷｜これを何とか使い続ける方法を考えましょうよ。

長谷川｜大学生や高校生、中学生、小学生を総動員して(笑)。

遠藤｜去年の暮れに元九州大学の湯本(長伯)先生に誘われて市民会館を見に行ったんですが、僕はこのような建築は2度と出来ないと思いました。1960年代に菊竹さんが設計したとか、そういうことは別として、やはり"こういうものがあった"ということが、後世に伝わればすごく良いと思いました。

古谷｜そうですね。今日、長谷川さんにお持ちいただいた『代謝建築論』は今、現代の日本に限らず世界の建築に対して、改めて示唆しているものがあるという気がするんです。それを今、たまたま読み返されたというので、改めて、この機会に『代謝建築論』のお話を少しお聞かせください。

長谷川｜私はこの本を昭和44年1月30日に買ったらしくて(笑)、そして去年、菊竹さんが亡くなられたので、このお正月に、久しぶりに丁寧に読んでみたんです。菊竹さんはすごくいろんなことについて、膨大な興味を持っている人間なんですね。私は菊竹事務所では色彩計画の仕事からやったんですが、「色というのは光と一緒にあって、1日の間に次々変化するような色を選ばないとダメだよ」って、ホテルをやる時にそういう話をしてくれたんですが、それがちゃんと文章になっていた(笑)。エンジニアのこともそうです。コンクリートに対する考え方にしても、この素材は自然に近い第二の自然としての条件を備えていることが必要であるとか、もちろん三段階論法のような大きな問題についても書いてありますけど、とにかくたくさん言葉として収録されていて、それが自分が建築をやっていく上で糧になってきた。私は菊竹さんからじかに言葉で聞きましたから、すごい財産をもらっていたんだと、この本を45年ぶりくらいに読んで思ったんです。菊竹さんは先見の明があって、いろんなことについて積極的に物事を捉えていた。特に、私が公共建築を設計するようになってから自分の頭の中にある言葉が、この本の中にたくさん書いてあったことに気付いたんです。この本は、本箱から机に移動してきているこの頃です。

古谷｜なるほど(笑)。ありがとうございました。最後に遠藤さん、菊竹先生に40年以上、最も長く接し続けた方だと思うんですが、とにかく時代に対していつも早すぎる…と、どこかで書かれていましたね。最後に菊竹先生の先見性というか、そういうものに関してお伺いします。

遠藤｜僕が菊竹さんをすごいなと思ったのは、スプートニクが飛んだ時ですね。朝、他の所員と一緒に事務所に行ったら、菊竹さんは6畳ぐらいの畳の部屋の真ん中に座っていまして、スプートニクにすごく感動して「これからは国境がなくなるんだよ」って。それで菊竹さんが考えていたのは海上都市の話なんですね。「住居でも何でもいいんだけど、そういうものが日本のいろいろなものを乗せて世界の港をまわり歩いたらいいんだけどな」って。僕らは海上都市なんて考えていない時にそういうことを言われました。ですから今、会えば、何かすごい良いことを話してくれるんじゃないかと思っているんです。ただ、2年ほど前に「メタボリズムの未来都市展」がありましたでしょう。あの展示会は、1960年代に若い建築家が理想の都市像を夢見て生み出した「メタボリズム」運動を半世紀を経て、振り返るという大掛かりなものだったんです。シンポジウムも何回もありまして、当時、大変注目されたんです。そのシンポジウムの時に、菊竹さんは途中で帰られましてね…。

長谷川｜森ビルのシンポジウムの時ですね。

遠藤｜そうです。帰る時、立ち上がって直立不動でおっしゃったんです。当日の記録によりますと、「皆さんにぜひとも言っておきたいことは、いろいろなことを"分かったこと"にしないことです。本当は"分かっていない"んです。分かっていないことを分かったつもりでいる。特に今の時代、建築家としてそれは許されません。分からないことを分かるように最大限努力する。それでも分かったつもりにならないこと、それが大切です。頑張ってください」、そう言って帰られたんです。

長谷川｜叫びでしたね。

遠藤｜そう、それが菊竹さんの最後の言葉でした。あれからお会いすることができなかった。ですから、自分も何も分かっていなかった、もっと分かるようにしたいと、やっぱり悩んでたんじゃないかと思いますね。

古谷｜うーん、そうなんですね。

今日は長い時間、本当にありがとうございました。

［収録：2013年4月9日］

『代謝建築論 か・かた・かたち』

［取材協力］新居隆志／金丸行雄／菊竹清訓建築設計事務所／丹下都市建築設計／塚本二朗／長倉重久／南九州大学都城キャンパス／都城市役所／湯本長伯
［その他］特記のない写真は、フォワードストローク

えんどう・しょうかん——建築家／1934年生まれ。1954年、早稲田大学工業高等学校卒業。1955年、菊竹清訓建築設計事務所入所。1996年、遠藤勝勧建築設計室設立。2002–04年、桑沢デザイン研究所顧問。2003–04年、法政大学工学部建築学科兼任講師。
主な作品：石橋美術館［1956］※、島根県立博物館［1959］※、出雲大社庁の舎［1963］※、ホテル東光園［1964］※、パシフィックホテル茅ヶ崎［1966］※、田部美術館［1979］※、福岡市庁舎［1988］※、I・T・DESIGN STUDIO ［1999］、横浜港大桟橋国際客船ターミナル(設計監理技術指導)など(※印は菊竹清訓建築設計事務所時代の作品)。
主な著書：『見る測る建築』［TOTO出版／2000］、『建築製図』［共著、朝倉書店／2008］、『スケッチで学ぶ名ディテール』［日経BP社／2009］、『建築設計のための行く／見る／測る／考える』［共著、鹿島出版会／2011］など。

はせがわ・いつこ——建築家／1963年、関東学院大学建築学科卒業。1963–68年、菊竹清訓建築設計事務所勤務。1968–70年、東京工業大学建築学科研究生。1970–79年、同大学建築学科勤務。1979年、長谷川逸子・建築計画工房設立。1988–90年、早稲田大学非常勤講師。1990–92年、東京工業大学非常勤講師。1992–93年、ハーバード大学客員教授。1997年、王立英国建築家協会(Royal Institute of British Architects)名誉会員。2001年、ロンドン大学名誉学位授与。2006年、アメリカ建築家協会(American Institute of Architects)名誉会員。
主な作品：湘南台文化センター［1990］、大島町絵本館［1994］、新潟市民芸術文化会館［1998］、静岡富士山空港展望デッキ［2013］など。

ふるや・のぶあき——建築家・早稲田大学教授／1955年生まれ。1978年、早稲田大学卒業。1980年、同大学大学院博士前期課程修了。1986年から1年間、文化庁芸術家在外研修員としてマリオ・ボッタ事務所(スイス)に在籍。近畿大学助教授を経て、1994年、早稲田大学助教授、NASCA設立。1997年より現職。
主な作品：アンパンマンミュージアム［1996］、詩とメルヘン絵本館［1998］、早稲田大学會津八一記念博物館［1998］、ZIG HOUSE／ZAG HOUSE ［2001］、近藤内科病院［2002］、神流町中里合同庁舎［2003］、茅野市民館［2005］、高崎市立桜山小学校［2009］、小布施町立図書館「まちとしょテラソ」［2009］、早稲田大学理工カフェ［2009］、鶯庵［2009］、T博士の家［2010］など。

鼎談後記——古谷誠章

時代を先駆ける思想と、それを噴出させる弟子たち、メタボリズムはこれから

菊竹先生には、僕が早稲田に戻って理工学研究所での「メガストラクチャー研究」をご一緒させていただいて以来、何度となく身近にその情熱的なお話を伺った。なかでも印象に残るのが、月に1度の定例研究会で、研究担当者の発表に熱心に耳を傾け、赤と青のペンを使って克明にそのメモを書き取られている姿である。

何が先生をそれに駆り立てるのか、最初はとても不思議だった。でも次第にそれは後進の研究者の未熟な一言一句からでも、そこに開かれる新たな真理の可能性を聞き漏らすまいとする根源的な好奇心のなせる業だと理解した。さらに今回の鼎談を終えて、もう一つ得心がいったのは、その克明に書き取る姿勢は、しばしば菊竹先生に実測をして来い、実物を見て来いと厳しく指導され、しかし同時に大事な右腕でもあった遠藤勝勧さんの「そんなこと言うんなら菊竹さんも一緒にやってくださいよ」という純真さにも、大いに喚起されたのではないかということだ。入所したての長谷川逸子さんの"乳母車"を面白がって、そこに可能性を見い出す眼力にも菊竹先生の無邪気な直観力を感じる。このおふたりは、論理的でいわばだいぶ"大人"だった内井昭蔵さんを、ずいぶんと困惑させたのではないかなと思うと、何だか妙に愉快だ。菊竹事務所の活力の源泉を見る思いがする。

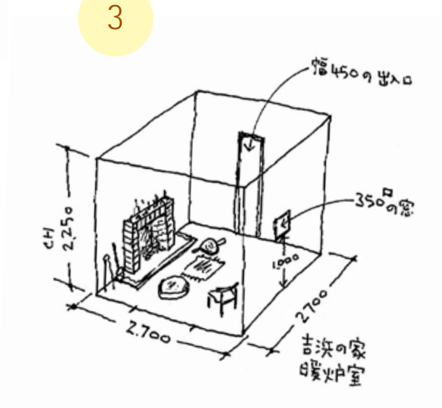
建築家・菊竹清訓の名を後世に伝える作品は幾つもあるが、この都城市民会館が語り伝えるものは、他のものとは少し趣きが異なっている。それは紛れもなく菊竹先生が独特のメタボリズムの理念を、まさしく実践しようとして構想されたものだからである。当時の都城市長が3年がかりで徐々に実現しようと言ったもくろみは、残念ながら当てが外れてしまうのだが、その意義たるや誠に深長なものがある。今日においても、なお一層、示唆的な内容だ。

遠藤さんは、菊竹先生がいつも時代より40年ぐらい早すぎるという。でもそういう人がいないと世の中は前へ進まない。折しも2013年9月、台北で「メタボリズム展」が開催されている。世界が本当に注目するのはこれからだ。

ARTIST at HOME 3

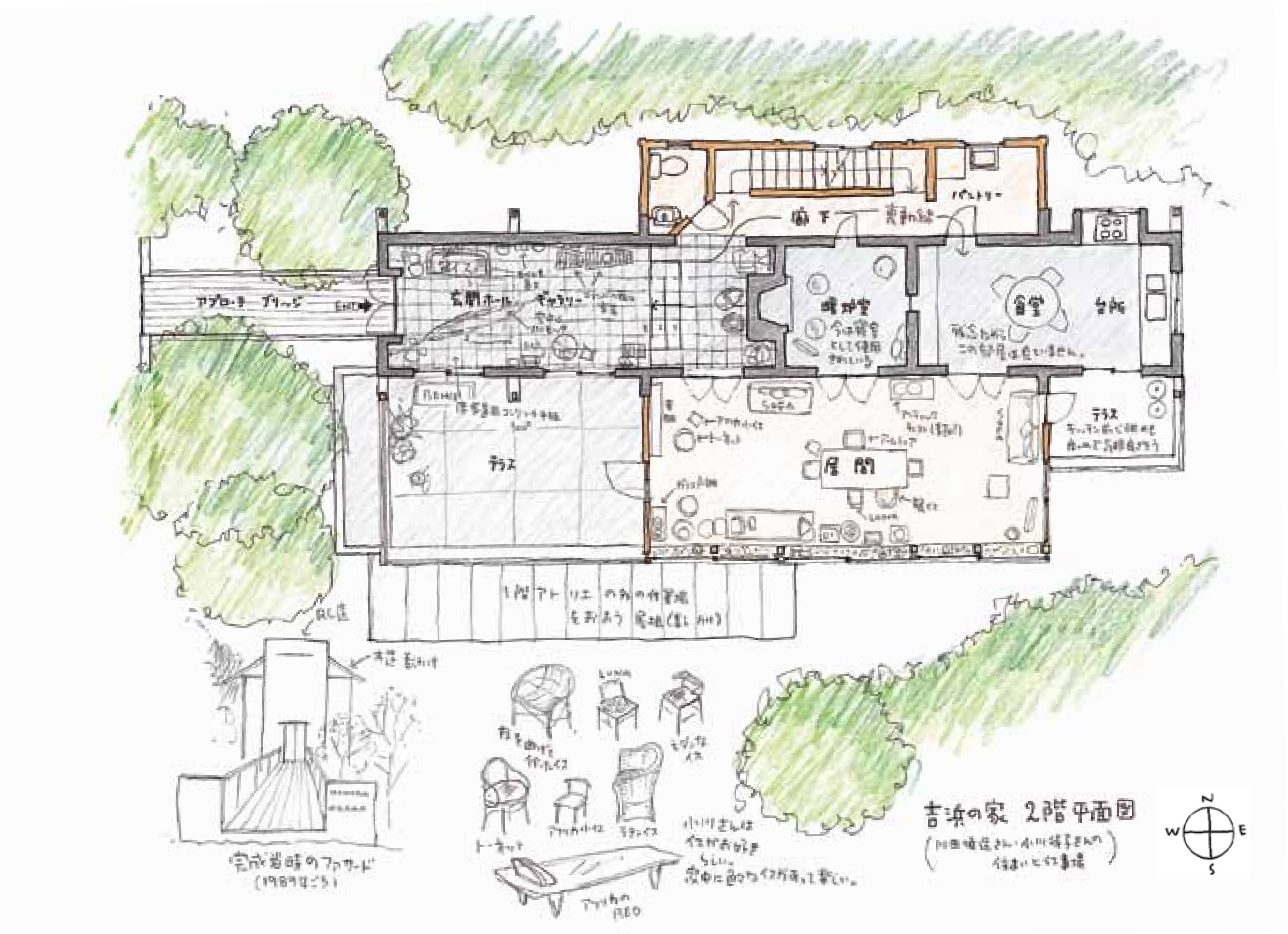
陶芸家・小川待子さんの巻
Machiko Ogawa

中村好文：文とイラスト
Yoshifumi Nakamura



親密で、隠れ家的な場所

15年ほど前、友人たちと南伊豆に住んでいる陶芸家、武田武人さんの家に泊まりがけで遊びに行ったことがありました。翌日の東京への帰り道には、湯河原にある陶芸家の小川待子さんと文化人類学者、川田順造さんの住まいと仕事場に押しかけて見学させてもらうという素晴らしい「おみやげ」が付いていました。
友人一行の中に、「吉浜の家」というタイトルで知られるこの建物を設計した阿部勤さんがいて、その阿部さんの運転する車の中で雑談しているうちに、突然、そういう成り行きになったのでした。
このときの突然の訪問で一番印象に残り、その後も繰り返し頭の中で反芻するように思い出すのは、建物の中央部にある暖炉室と呼ばれる小部屋でした。阿部さんには『中心のある家』［インデックス・コミュニケーションズ／2005］という眺めるだけでも楽しめる著書がありますが、「吉浜の家」の中心はこの暖炉室であることを、私はその部屋に一歩踏み込んだとたんに直覚しました。四畳半サイズのこの暖炉室は建物の内部にあって外気に面していないことと、コンクリートの壁に囲まれているので、いくらか密閉感や閉塞感があるのですが、それが逆に動物の巣穴のような居心地を醸し出していると感じたのでした。この部屋は「吉浜の家」の「中心」であると同時に「重心」でもある…そのとき私はそう思いました。
この暖炉室には南と北に出入口がありますが、北側の廊下側にある出入口の幅は、なんと45センチ（しかも、廊下側には鏡が張ってあ



左—玄関の扉を開けると目の前に拡がる玄関ホール兼ギャラリー。川田さんがアフリカなどから持ち帰った民俗楽器、仮面、その他民俗学の資料展示室でもある｜右—ギャラリーを直進し階段を2段降りたところから、玄関を見返す。床は歩道舗装用の30センチ角のコンクリート平板。左手の引き違いサッシから広々としたテラスに出られる

居間からテラスの方向を見る。無造作に置かれている大小様々な椅子も、よく見ると由緒のあるモノばかり。この部屋はモノ好きだけでなく、椅子好きの匂いもします

り、ドアに見えない趣向が凝らしてあります）。この開口部を通り抜けるには、肩をすぼめて入る作法が必要です。そして、部屋に入った私たちは誰からともなく、この部屋の暗黙のルールに従って、とぐろを巻くように床に座り込み、「ここ、いいねぇ」とか「ちょっとひと眠りしたくなるねぇ」などと、口々に感想を述べ合いました。
阿部さんの住宅設計の極意のひとつが、じつは、こうした親密で、いくぶん隠れ家的な居心地をつくり出すことにあるのではないかと睨んだのもこのときです。

「第１章」

久しぶりに訪れた「吉浜の家」は、すっかり様変わりしていました。車から降り立った私は「あれ？、ここだったっけ？」と、思わずあたりを見まわしました。よく見れば、建物の周囲の樹木が驚くほど大きく育って建物を覆い隠さんばかりになっています。ブリッジの正面に見えるはずのコンクリート打放しの縦長のシンボリックな壁面も半分ぐらい生い茂った枝葉に遮られていました。
ブリッジを静々と渡り、「阿部勤好み」の観音開きの入口扉を開けると玄関ホール兼ギャラリーの吹抜け空間が静かに待ちかまえていました。外部の様変わりとは対照的に、ここには以前と変わらない濃密な空気が漂っていました。西アフリカ各地から持ち帰られたという川田さんのコレクションも、その展示も、以前とは違っているはずですが、室内にたたずんでじっと耳を澄ませば、民俗音楽や土俗的な祈りの声が地鳴りのように聞こえてくるような気がするところまで、以前とまったく同じでした。
敷き詰められたコンクリート平板の上で靴を脱ぎ、コレクションの数々に無言の挨拶をしたのち、奥へと進み、２段ほど階段を降りたあたりで上を見上げると四角く切り取られた青空が見えました。こういうちょっとした建築的な仕掛けや工夫は、訪れる人はもちろん、そこに住む人も愉しませてくれるに違いありません。いわば、建築家の「センス」と「腕の見せどころ」ですが、この家では、阿部さんはサービス精神たっぷりにその腕前を披露してくれています。
「吉浜の家」を本にたとえると、門を入り、ブリッジを渡りはじめるところから、観音扉をくぐり、ギャラリーを通り抜けて、青空を見上げるところまでのひとつながりの空間体験が「第１章」ということになりそうです。そして、その「第１章」は、暖炉の裏側が室内に露出しているコンクリート壁に突き当たるところで終わります。ここで左に曲がれば、裏動線の廊下を辿って食堂・台所に行けますし、右に曲がれば「第２章」の居間に入ることになります。

アフリカのベッドに腰掛けて鉱物の魅力について小川さんからレクチュアを受ける

住人たちを語るコレクションの数々

この建物は、長方形のRC造の箱に木造の下屋を幾重にも差し掛けた構成に特徴があります。そのことで、コンクリート壁に囲まれた密実な空間、木造の柱梁や板材に包まれた大らかな空間、庇に覆われた半戸外の空間など、趣きも空気感も異なった空間が生まれ、住まいと暮らしに変化と可能性をもたらしているのです。
さて、「第２章」の居間ですが、ここは大きく差し掛けられた木造空間の内部で、露出している柱や梁はもちろん、床も天井も木地のままなので、優しく包まれているような感じがあります。南側に間口一杯に横長窓が設けられ、この窓からは蜜柑畑越しに雄大な太平洋を眺めることができます。言うまでもなく、この眺望がこの居間のとっておきのご馳走です。そしてこの部屋にも川田さんと小川さんのコレクションがところ狭しと飾られています。横長窓の窓台はそのコレクションを飾るための格好のスペースのようで、貝殻、鉱物、石ころ、木彫の人形、鉄製の動物、陶器の皿…などなど、珍しいモノたちが並んでいました。その二人の「お宝」を眺めていると、飾られたモノたちは無言でその家の住人たちの好みや歴史を雄弁に語るものだということに思い至ります。珍しさも手伝って、私がその鉱物のひとつを手に取ると、小川さんは、その昔、パリに住んでいたころ「鉱物博物館」でおびただしい数の鉱物を見て感動したことを独特の温かい含み声で語ってくれました。

白いキャンバス

私の悪い癖で、眺めの良い場所で気の置けない人とお喋りしていると、つい本題（取材）を忘れてくつろいでしまいます。カメラマンのＡさんが、ここと思えばまたあちらという具合に忙しげに立ち働いている様子を見て、我に返った私は、やや唐突ではありましたが…、「ところで、どうして住まいと仕事場の設計を阿部さんに頼んだんですか？」と訊ねてみました。すると、小川さんは、持ち前の静かな口調で「私ね、建築家って嫌いだったの。だって、建築家って、住む人のことなんか考えないで、自分の好みだけで建てちゃう人が多いでしょ？」という、建築家の私には少々耳の痛い返事が返ってきました。そして「建築家に頼むよりプレファブ住宅のほうがまだマシかも…」と、考えた小川さんは（ああ、ますます耳が痛くて、鼓膜に穴があきそうです）、いくつか見て回ったそうですが、さすがに気に入る家はなく（良かったぁ！）、途方に暮れているとき、建築評論家の植田実さんから阿部勤さんを紹介されたのだそうです（やれやれ、一件落着です）。それでも、ある雑誌のインタビュー（自然と共棲できる家（阿部勤・川田順造・小川待子）「トランヴェール」（東日本旅客鉄道）1990.6）によれば、阿部さんへの注文は「建築家の好みで建てないこと」、「素材感のある家」だったといいます。
さてさて、このエピソードを建築家の皆さんは、どんな気持で読まれますか？
私には、このように建築家への不信感を抱くのは、決して小川さんだけではなく、「物言わぬ多数派（サイレント・マジョリティ）」の偽らざる心情だと思えてならないのですが…。
でも、その小川さんと建築家、阿部さんの組合わせは大正解だったようです。というのは、先ほどと同じインタビューの中で阿部さんは「私は住まいは住み手が造るもので、建築家は住まい手がそこに生活を描くための白いキャンバスを作る立場だと考えています」と話しているからです。

イマジネーションの入る余地

小川さんは自分の仕事は「うつわが原点」だといいます。そしてその理由を「他者を受け入れることができるから…」と説明しています。
小川さんが自分の住まいと仕事場に求めたのは、まさにその「うつわ」だったに違いありません。小川さんは自作を語る中で、失敗作は「ちゃんとできたもの」と、笑いながら言い切ったあと「余白のないもの。イマジネーションの入る余地のないもの」と続けています。この言葉は小川さんが陶芸に向かうときの一種の自戒の念なのでしょうが、見方を変えて読むと「住み手にとって住宅の望ましいあり方」を語っているようにも受け取れます。
そういう小川さんが、自己完結的（ときとしては自己満足的）で、住み手の「イマジネーションの入る余地のない住宅」を設計する建築家に依頼したくなかったことは、よくよく理解できます。ですから阿部勤という「うつわ」をつくる建築家に出会えたことは本当にラッキーだったのです。私は、混構造で造られた大らかな「うつわ」の中で、小川さんが、部屋名にも、あらかじめ計画された部屋の用途にもまるでとらわれずに、そのときどきの気分や状況に応じて融通無碍（ゆうずうむげ）に住みこなしている様子を、もの珍しさと頼もしさの入り交じった眼差しで眺め回していました。
さて、せっかくの機会なので、もう一度、あの暖炉室にとぐろを巻いて座り込んでみたいと思った私が「暖炉室を見せて…」と、言いかけますと、小川さんは「あ、だめ！、あの部屋はいま寝室になっているの」と微笑みながら応えました。私にはその目が「ほら、ね！、うつわの使い方はイマジネーション次第でしょ？」と言っているように思えました。

なかむら・よしふみ——建築家／1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972–74年、宍道設計事務所。1976–80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
主な作品：三谷さんの家［1986］、REI HUT ［2001］、伊丹十三記念館［2007］など。
主な著書：『住宅巡礼』［新潮社／2000］、『住宅読本』［新潮社／2004］、『意中の建築 上・下』［新潮社／2005］、『Come on-a my house』［ラトルズ／2009］、『小屋から家へ』［TOTO出版／2013］、『建築家のすまいぶり』［エクスナレッジ／2013］など。

［撮影：相原功］

左—敷地が斜面だったため、玄関にはブリッジを渡ってアプローチする。完成後24年を経て樹木が大きく育ち、特徴的な外観が半分しか見えなくなってしまった｜右—蜜柑畑に囲まれた切妻屋根の仕事場（窯場）。この建物も母屋と同時に建てられた

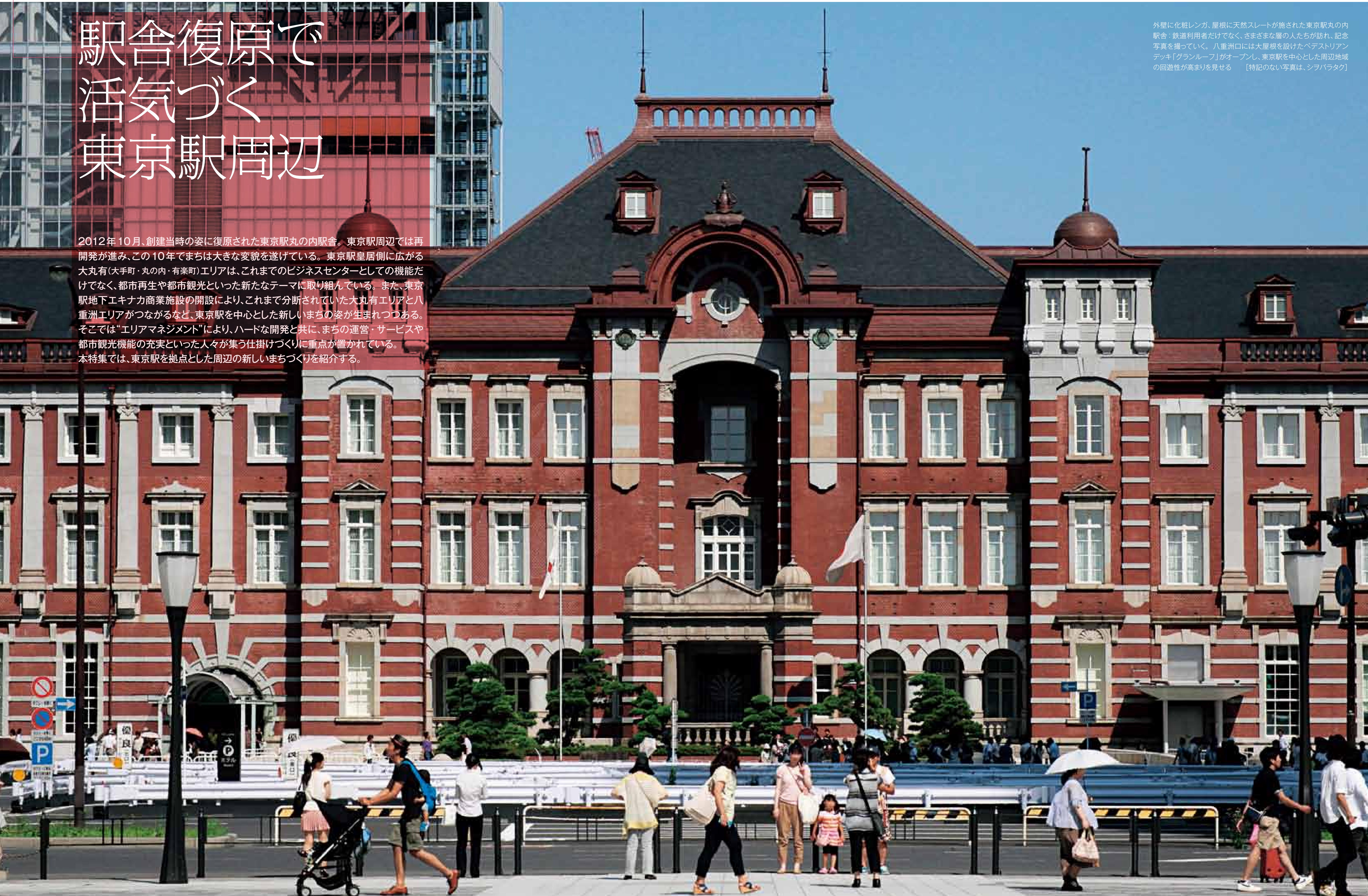
横長窓の窓台はコレクションを飾るための格好の棚。窓台の高さが45センチと低いのがいい。窓の外には蜜柑畑が拡がり、その向こうに雄大な太平洋が望める素晴らしいロケーション

小川さんの仕事場は母屋とは別棟になっている。外観は一見、木造に見えるが、この建物もじつはRC造と木造の混構造

左—「土に内在する力をかたちにして見せたい」という、小川さんの鉱石を思わせる作品｜右—小川さんの最近の作品。この〈うつわ〉は、まるで海を抱きかかえているような詩情をたたえています

駅舎復原で活気づく東京駅周辺

2012年10月、創建当時の姿に復原された東京駅丸の内駅舎。東京駅周辺では再開発が進み、この10年でまちは大きな変貌を遂げている。東京駅皇居側に広がる大丸有（大手町・丸の内・有楽町）エリアは、これまでのビジネスセンターとしての機能だけでなく、都市再生や都市観光といった新たなテーマに取り組んでいる。また、東京駅地下エキナカ商業施設の開設により、これまで分断されていた大丸有エリアと八重洲エリアがつながるなど、東京駅を中心とした新しいまちの姿が生まれつつある。そこでは“エリアマネジメント”により、ハードな開発と共に、まちの運営・サービスや都市観光機能の充実といった人々が集う仕掛けづくりに重点が置かれている。
本特集では、東京駅を拠点とした周辺の新しいまちづくりを紹介する。



外壁に化粧レンガ、屋根に天然スレートが施された東京駅丸の内駅舎：鉄道利用者だけでなく、さまざまな層の人たちが訪れ、記念写真を撮っていく。八重洲口には大屋根を設けたペデストリアンデッキ「グランルーフ」がオープンし、東京駅を中心とした周辺地域の回遊性が高まりを見せる　［特記のない写真は、シヲバラタク］

まちの個性を引き出す エリアマネジメントに期待

西村幸夫
Yukio Nishimura
東京大学先端科学技術研究センター所長・千代田区景観まちづくり審議会会長

都市間競争で問われる地域の価値

大丸有（大手町・丸の内・有楽町）地区のまちづくりでは、地域全体の価値を高めようとする意図を明確に持って進めていることが分かります。企業の本社ビルが集積している地区では、通常、自社の建物には気を配りますが、地域全体の価値を高めるという発想はなかなか出てきません。しかし、地域に単体の建物以上の価値があるとすれば、それを高めるメリットは大きいということです。

ここ十数年、国内外で都市間競争の時代になったと言われています。都市部でも地域ごとにフロアを埋めるテナントや人の取り合いが起こっています。東京駅周辺と同じようにオフィスビルが集積する品川、新宿、銀座、六本木、横浜のような都市部の場合、ビルの性能だけでテナント誘致ができるかと言えばそうではありません。大きなビルが持つ機能的な良さは世界共通です。問題はその器にどれだけ文化的に豊かなものが感じられるか。今年オープンしたうめきた（大阪駅北地区）・グランフロント大阪の中核施設「ナレッジキャピタル」は知的創造拠点を意味し、“行くとためになる何かがある”ことを目指しています。いずれにしても、文化的なプラスアルファが求められており、地域の持つ歴史やまちのイメージを積極的につくり出す“エリアマネジメント”が重要になってくるのです。

具体的には、敷地の所有者は別々でも、同じように建物をセットバックさせ、広げた歩道に同じ植栽をすることで並木のようにするなど、ルールやプランを持ち、それを共有して実現させる。ゴミ掃除やバナー広告の出し方、全体で行うイベントなど、さまざまなところで協力してまちを良くしていく。大丸有地区は、このエリアマネジメントが大きな規模で機能した最初の例だと思います。

また今年出来たJPタワー内にある「インターメディアテク」は、東京大学総合研究博物館と日本郵便との協働によるミュージアムで、東京大学が蓄積してきた学術標本をとても面白く展示しています。このような公共公益施設は、もちろん容積がプラスされるなどのボーナスが付きますが、何より他のショッピングセンターと差別化する重要な施設になっているのではないでしょうか。

歴史的価値を守り、まちの個性にする

1914年の創建当時の姿に復原［1］された東京駅丸の内駅舎がお披露目されたのが2012年10月です。すでに1年が過ぎましたが、駅舎の前で写真を撮っている人が今でも絶えませんし、定期券以外で来訪する人の数は増え続けているようです。こうした光景を見ると、建築が持っている力をつくづく感じます。特に駅は多くの人が利用しているもので、思い出や記憶があり、愛着の持てる建物です。

これまでにも、門司港駅や大社駅の重要文化財指定や日光駅の復元的な改修など、文化財的な駅の保全の他、首都圏でも原宿駅や高尾駅のようにレトロ調が人気の駅もあります。かつての駅の風格がまちのシンボルとなっているような駅は、今も人々に愛されています。

また、国立駅や鎌倉駅、奈良駅、軽井沢駅などのように歴史的建築物としての保存運動が地元の人々によって盛り上がった例も少なくありません。

東京駅丸の内駅舎の復原については「特例容積率適用区域制度」［2］という仕組みを使い、容積率を他のビルに移して費用を捻出しました。周辺の高いビルがあの東京駅を出現させたとも言えるわけです。

こうした手法は案外古く、1968年にニューヨークのグランド・セントラル・ステーションの保全のために使われた「開発権移転プログラム」が最初です。開発権移転とは、農地・森林・環境保護区域・歴史的保全区域を開発から守るため、保全区域の開発権を開発誘導区域に販売することで、開発保護区域の保全と開発誘導区域の開発を一挙に行う制度です。

しかし、容積のニーズがなければこの制度は効かないため、本当に保全したいものがある場合、特に開発圧力の少ない地方においては、別の方法を考えないといけないでしょう。面的にいろいろなものがある面白さ、例えば、魅力的な路地があり、老舗が点在し、回遊性があり、文化があることを評価して売りにしていくのも新しいかたちのエリアマネジメントです。エリアマネジメントで地域性を出していく。それが地方都市の大きな流れになると思います。

左─復原された東京駅丸の内駅舎：2012年10月に創建当時の姿に復原し、完成披露された。以来、平日でも観光客の姿が絶えず、オフィス街から楽しむまちへと変貌している｜右─皇居東御苑の天守台跡：江戸時代の石垣越しに近代的な丸の内のオフィス街が望める

地域の合意形成が重要

大丸有地区がエリアマネジメントによるまちづくりに特化していくきっかけは、1988年に三菱地所から発表された、後に“丸の内マンハッタン計画”と呼ばれる「丸の内再開発計画」が、世論の賛同を得られなかったことにあると思います。例えばこの地区の容積率を2,000％に引き上げ、高さ100m、200mの超高層ビルをたくさん建設するという計画内容は、景観的なイメージも悪く、何より周囲の合意なしに突然出された計画だったため、疑問の声が上がりました。

しかし、計画の中には丸の内仲通りをファッションストリートにするというアイデアがすでに盛り込まれており、東京駅丸の内駅舎を復原するために容積率を2,000％近くまで認めた現状を見ると、結果的には似たものになっていると言えるかもしれません。ただ、それを実現させるためには、地域、行政、世論、マスコミに受け入れてもらう必要があった。そこで、地域のみんなでマネジメントしていくという方向に転換したのだと思います。

その後は、地域だけでなく東京都や千代田区を含めた大丸有まちづくり懇談会を組織し、共通認識を持ちながら緩やかに規制する「大手町・丸の内・有楽町地区まちづくりガイドライン」で、全体のスカイラインから足元の風景、店舗のイメージまで提案しています。

現在、大手町の再開発が進んでいますが、丸の内仲通りの雰囲気を延伸させるようなデザインの工夫や、通りの角地に広場を設け、地下歩行者通路から上がれるようにするなど、官民協働でなければ実現できない試みが検討されています。大規模に地域をレベルアップしている横浜みなとみらい21地区や福岡市の天神地区、大阪のうめきたなどは、大丸有のエリアマネジメントの実績を参考にしています。このことからも分かるように、これからのまちづくりには地域の合意形成が欠かせないのです。

東京駅周辺の整備で広がる回遊性

これまではタクシースペースが狭かったためさまざまな不便があった八重洲口ですが、2013年9月にオープンした「グランルーフ」などのオープンスペースが整備されたことで、交通システムが整理されただけでなく、人の流れも丸の内や日本橋方面、また日比谷方面へとコースが広がっていくでしょう。

さらには、皇居とつながっていくといいと思います。大手門から入る皇居東御苑は普通に行けますが、訪れる人は少ないようです。江戸城の本丸は言ってみれば東京のヘソのような場所で、天守台跡に上ると、“東京がここから出発した”ことが分かります。モダンなオフィス街と江戸時代の見事な石垣が接している景色は世界でも珍しく、皇居を取り込んだ回遊を視野に入れてもいいのではないでしょうか。

日本橋エリアのまちづくりが進めば、この辺りの様子もずいぶん変わってくると思います。日本橋を覆っている首都高速道路は誰が見てもこのままでいいとは思わないでしょう。そこは大手町も含めてみんなで考えていかなければいけない課題です。

地域全体の価値を高めるエリアマネジマントのまちづくり手法が、地方も含めてどのように展開していくのか、これからが楽しみです。（談）

［1］ 本特集では、失われて消えてしまったのもを旧に復することを“復元”とし、初めの姿が改造・変化してしまった現状を、もとの姿に戻すことを“復原”として使い分けている。東京駅については“復原”を用いた

［2］ 「特例容積率適用区域制度」の最初の適用は、2002年に指定された東京都千代田区の「大手町・丸の内・有楽町地区特例容積率適用区域」である。東京都は東京駅周辺地区の都市開発・整備・保全を誘導し制御するために、大手町・丸の内・有楽町地区（116.7ha）に「特例容積率適用区域」および「地区計画地区」を都市計画として定めて、この区域内では一定の制限（容積率や高さの上限など）のもとに東京都の許認可により、各建築敷地間で容積率の移転ができることとした

にしむら・ゆきお──東京大学先端科学技術センター所長・千代田区景観まちづくり審議会会長／1952年生まれ。東京大学卒業、同大学大学院修了。明治大学助手、東京大学助教授を経て、1996年–、東京大学教授。2013年4月より現職。MIT客員研究員、フランス国立社会科学高等研究院客員教授などを歴任。専門は都市計画。
主な著書：『都市を保全する（都市工学講座）』［共編著、鹿島出版会／2003］、『西村幸夫風景論ノート─景観法・町並み・再生』［鹿島出版会／2008］、『風景の思想』［共著、学芸出版社／2012］など。

ソフトでまちを育てる

持続的に人々を惹き付ける賑わいの創出

小林重敬
Shigenori Kobayashi
NPO法人大丸有エリアマネジメント協会理事長

まちをハードとソフトで発展させる

現在、日本を代表する国際ビジネスセンターとして国内外の有力企業が集積する大丸有地区だが、1970–80年代には、企業活動のグローバル化により慢性的なオフィス不足、情報化進展に伴う既存オフィスの機能的老朽化、就業者の執務環境改善などが課題に挙がった。90年代には“黄昏のまち”と言われるほど、夜や土日は人通りがなく閑散とした活気の乏しいまちとなっていた。これらの課題解決に取り組み、地権者が自ら一体的な再開発に向けた具体的なまちづくりを考えるため、1988年に大丸有地区再開発計画推進協議会（2012年、大丸有まちづくり協議会に組織変更）が発足。1996年には公民協調によるまちづくりの実践に向けて、大丸有まちづくり協議会、東京都、千代田区、JR東日本からなる大丸有まちづくり懇談会が組織された。

大丸有地区のまちづくりの特徴は、“まちづくり”と“まち育て（エリアマネジメント）”を全体計画の当初から考えていたことである。

大丸有まちづくり懇談会によって、2000年にまとめられた「大手町・丸の内・有楽町地区まちづくりガイドライン」（以下、まちづくりガイドライン）では、“幅広いまちづくり活動（エリアマネジメント）へのかかわり”が提唱されている。大丸有地区の持続的発展を実現するための“まち育て”には、公的空間の整備や個々の開発の誘導・調整というハードなまちづくり、すなわち“まちづくり”だけではなく、これに施設の運用管理や文化活動、広報活動などを含めたソフトなまちづくりの面、すなわち“まち育て”も欠かせないとしている。

さらに2008年に改訂された「まちづくりガイドライン」では、総合的なまちづくり活動の推進として発展的に記述されている。実際、大丸有地区で展開した公開空地のオープンカフェとしての活用、ボランティアによるまちのガイドツアーの開催、シャトルバスの運行、通りを活用したカウパレード、ガーデンジュエリー、フラワーウィークスの開催、大道芸や打ち水の開催などの多様な活動が進められてきた。

エリアマネジメント活動を支える幾つかの組織

そのような活動を持続的なものとするためにハードな“まちづくり”を担う大丸有まちづくり協議会の他に、右頁左図に示した新たな組織が幾つも生まれてきたのも、大丸有地区のまちづくり活動の特徴と考える。

①NPO法人大丸有エリアマネジメント協会（2002年設立）は、上記の公開空地のオープンカフェとしての活用を始め、広範なソフト活動の中心となっている。

②エコッツェリア協会（2007年設立）は、環境共生にかかわる環境ビジョンの実現と世界への情報発信を目的として活動している。

③丸の内パブリックスペースマネジメント（2007年設立）は、東京駅丸の内地下歩行者専用道と行幸地下通路の良質な維持管理と賑わいの創出を目的として活動している。

上記の組織を拠点とするさまざまな活動は、今日ではいわゆるハードなまちづくり、ソフトなまちづくりとして単純に区別できなくなっているため、「まちづくりガイドライン」では“総合的なまちづくり活動”と表現している。

NPO法人大丸有エリアマネジメント協会（リガーレ）による活動

その中で“まち育て”を主に担っているのがNPO法人大丸有エリアマネジメント協会（以下、リガーレ）である。リガーレによる活動は多岐にわたっている。もちろん実際の活動は大丸有地区の多くの組織と連携して進めているもので、協会単独の活動が多いわけではない。

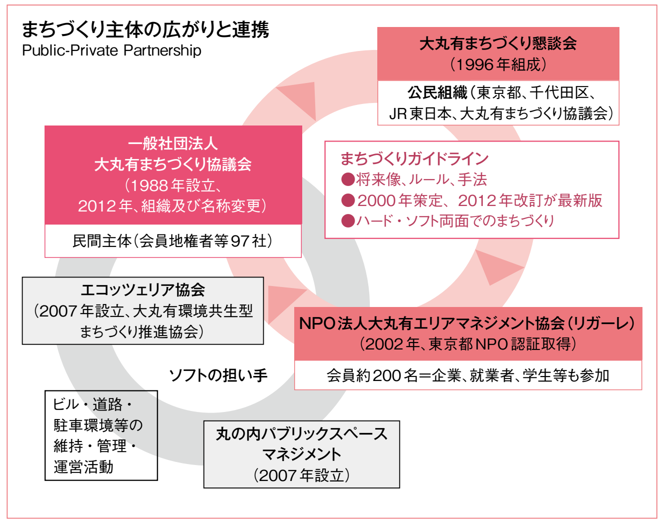
活動をジャンル別にすると、“環境”、“交流”、“活性化”に分かれる。

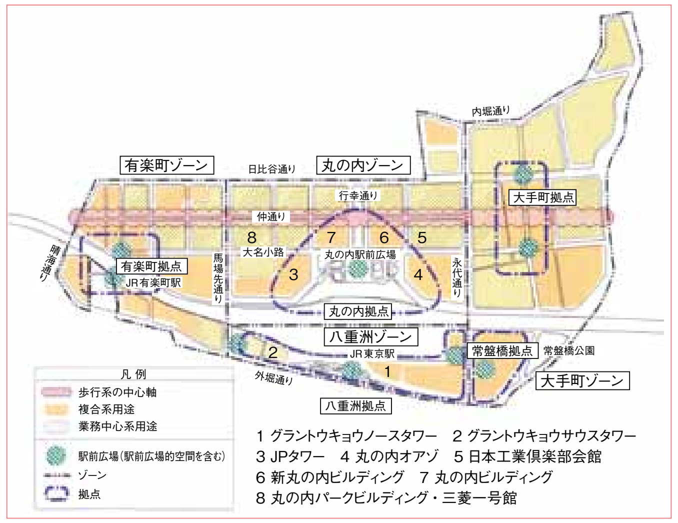
まず“環境”に関する主な活動としては①公開空地等の活用があり、「東京都のしゃれた街並みづくり」条例の公開空地等活動団体に2005年から登録され、丸ビル、丸の内オアゾ、東京ビル、新丸ビル、三菱商事ビルなどの公開空地等を活用して活動を展開してきた。②「丸の内シャトル」の運行支援を行い、ルート延伸、乗降場の新設などを進め、多くの利用客数を数えるようになっている。③大丸有打ち水プロジェクトにも多くの参加者を得ている。

次に“交流”に関する主な活動として、①連続セミナーを主に就業者を対象に開いている。②「ママカフェ」は大丸有地区で働く子育て中のママに参加いただくセミナーである。③丸の内軟式野球大会は大丸有地区にゆかりの企業約60社が参加して明治神宮外苑などのグランドで覇を競ってきた。

また“活性化”の主な活動として、①まちガイドをこの地区に関係するOBの協力を得て実施している。②常盤橋公園活用イベントでは、常盤橋公園を舞台に日本橋地区の活動団体と連携してフォーラムや祭りを開催している。③丸の内検定も毎年実施し200名を超える受験者の参加を得ている。

それ以外に、ピンクリボンフェスティバル、丸の内フラワーウィークス、ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン「熱狂の日」音楽祭、アートアワードトーキョー丸の内など、多くのイベントの実行委員会に参加してきた。





左―大丸有活動組織図（まちづくり主体の広がりと連携）［提供：リガーレ］｜右―メリハリのある機能配置イメージ図：大丸有地区のまちづくりではゾーン・軸・拠点を設定し、メリハリのある機能配置を誘導している［『大丸有まちづくりガイドライン2012』より編集室で作成］

新たなソフト活動と財源

新たな活動には新たな財源獲得が必要であり、大丸有地区では地区の特徴を活かした財源獲得が近年試みられている。そのうちエリアマネジメント広告事業と「エコ結び」について紹介する。

①エリアマネジメント広告事業

具体的には、丸の内仲通りを対象に屋外バナーなどを利用して、企業広告やエリアのプロモーションなどを行い、地域の賑わいと景観向上、さらに自主財源確保を狙った試みである。社会実験では多くの成果を得ており、本格的な実施を考えている。

②「エコ結び」

JR東日本の全面的な協力のもと、交通系電子マネーのSuicaやPASMOを使った仕組みが最大の特徴である。「エコ結び」に加入している店舗で食事や買い物をした際、SuicaかPASMOで決済金額を支払えば、加盟店から、支払い代金の1％をエコ結び基金へ積み立てることができる。基金に積み立てられた資金は、丸の内仲通りを彩る花や緑の設置、地方での植樹、環境貢献のプロジェクトへの支援などに使われる。

共通認識を持って地域をつくる

大丸有地区ではこれまで、エリアマネジメントを我が国で初めて本格的に展開し、ソフトでまちを育て、持続的に人々を惹き付ける賑わいの創出を実現してきた。それらは地域の活性化を目指す、いわば“内向きのエリアマネジメント”であり、そのことの重要性は今後も変わらないと考える。

しかし近年、特に環境という新しい時代のテーマに向けて、多くの企業が共通認識を持って活動するようになっているのも大丸有地区の特徴である。これまでの内向きのエリアマネジメントに加え、地球環境問題に対応する外向きのエリアマネジメント活動を展開している。具体的には、ゼロエミッション（ゴミゼロ）工事、水の循環利用、生ゴミのリサイクル、太陽光発電の実証実験、屋上・壁面緑化、風の道の形成、物流共同化（共同配送システム）、駐車マネジメントと地域ルールの策定による駐車環境対策、無料循環バス、自然エネルギーの活用などである。

特に“風の道”の形成に関しては、東京駅の再生と深くかかわりがある。皇居から行幸通り、東京駅を経て八重洲に至る“風の道”の形成が当初の「まちづくりガイドライン」からあった。それに基づき八重洲側にあった（地区としては丸の内地区）鉄道会館ビルがなくなり、東京駅が高層化することなく3階建ての歴史的建築物として再生されて“風の道”がつくられた。このことも大丸有地区のすべての地権者がエリアマネジメント組織においてまちづくりの共通認識を持ち、いわば社会関係資本ともいうべき関係を結んでいたことによる成果であると考える。

こばやし・しげのり――NPO法人大丸有エリアマネジメント協会理事長・工学博士／1942年生まれ。東京大学大学院工学研究科博士課程都市工学専攻修了。横浜国立大学大学院教授、日本女子大学講師、規制改革委員会参与、参議院国土交通委員会客員研究員などを歴任。2008年–、東京都市大学都市生活学部教授。現在、横浜国立大学名誉教授、全国市街地再開発協会理事長を兼任。
主な著書：『協議型まちづくり』［編著、学芸出版社／1994］、『地方分権時代のまちづくり条例』［編著、学芸出版社／1999］、『条例による総合的まちづくり』［編著、学芸出版社／2002］、『欧米のまちづくり・都市計画制度』［監修、ぎょうせい／2004］、『エリアマネジメント』［編著、学芸出版社／2005］、『コンバージョン、SOHOによる地域再生』［編著、学芸出版社／2005］、『都市計画はどう変わるか』［学芸出版社／2008］など。

進化する東京駅周辺
エキナカからつながるエキソト

野崎哲夫
Tetsuo Nozaki
株式会社鉄道会館代表取締役社長

野崎氏

駅周辺の発展の経緯と駅舎復原まで

東京駅とその周辺地域とは、共に発展してきた歴史があります。丸の内地区は、1890［明治23］年に国から三菱財閥の2代目である岩崎彌之助に払い下げられました。当時は“三菱村の四軒長屋”と呼ばれた三菱一号館、三菱二号館、三菱三号館、東京商工会議所の建物があるくらいで、むしろ賑わいがあふれていたのは、江戸時代から商業機能が集積していた八重洲側の日本橋、銀座です。その後、東京駅の駅舎建設の際、皇居に面している丸の内側に建設することが決まると、それに伴い行幸通りも整備され、丸の内・大手町地区の開発は急速に進みます。四軒長屋を始めとしたイギリス風のオフィスビルが並ぶ馬場先通りの一丁倫敦（ロンドン）に続き、アメリカ式の白亜の高層ビルが立ち並ぶ行幸通り周辺の一丁紐育（ニューヨーク）ができ、東京駅周辺は、金融機関を始め多くの企業が集まる日本を代表するビジネス街へと発展していきました。

そして現在では、東京駅がつなぎ役となって、新しいまちの姿が誕生しています。その鍵となる東京駅丸の内駅舎は、1945［昭和20］年の戦災後、1947年に応急修復した姿のままであったため、多方面から保存や復原を望む意見がありました。途中、高層ビルに建て替える構想もありましたが、東京駅は歴史も伝統もある近代文化遺産だったことから、創建当時の姿に復原することに決まりました。しかし、復原にかかる費用は約500億円にも上ります。一民間企業だけでは担えない。そこで、国や東京都とJR東日本が協議を重ね東京駅丸の内駅舎をまちの文化財として守っていく仕組みを考え出しました。2002年には、「大手町・丸の内・有楽町地区特例容積率適用区域」が定められ、3階建ての駅舎の空中権を周辺のビルに移転して、復原費用を生み出しました。2003年には復原を前提として国の重要文化財に指定され、東京駅がまちの財産として永遠に残ることになりました。現在、「特例容積率適用区域」として適用されているのは東京駅周辺のみで、それだけ歴史的文化財が保存された重要で価値あるまちと捉えられます。東京駅丸の内駅舎の復原が決まり、丸の内・八重洲両駅前広場の整備や駅南側の自由通路整備についても都市計画が決定されるなど、東京駅を中心に八重洲・丸の内エリアのつながりが強まりつつあります。

丸の内と八重洲をつなぐ地下ネットワーク

2006年に東京駅は駅を含む周辺地区を「東京ステーションシティ」と命名し、“通過する駅から、集う駅へ”、“東京駅が街になる”をコンセプトに開発を進めています。東京駅丸の内駅舎復原や丸の内・八重洲両駅前広場の整備など東京駅全体を再開発する計画では、当初は地下エキナカ商業施設「グランスタ」は含まれていませんでした。丸の内地区では1988年に大丸有地区再開発計画推進協議会が発足し、東京駅に先駆けて洗練されたまちづくりがされていました。株式会社鉄道会館は東京駅のディベロッパーとして商業施設の開発を手掛けています。周辺のまちと共に駅の外側は整備が進められ、駅の中だけ時代遅れになってはいけないと、地下エキナカ商業施設の開発を提案しました。「グランスタ」の特徴は、線路の上に新たに人工地盤をつくるのではなく、既存の地下通路を有効に活用している点にあります。もともと1980［昭和55］年に総武・横須賀線地下ホームの開業に伴いつくられた地下中央通路ですが、鉄道乗り換えの流動が少なく、暗く細長い非効率な空間でした。その通路を活かし、先進的な商業施設を始め、総合案内所としての「ステーションコンシェルジュ東京」、30ヵ国以上の通貨を扱う外貨両替所、宅配手配も行うクロークなどを設置しました。“街”の機能を備えたエキナカ空間へと変貌させたことで、当初の予想をはるかに上回る賑わいを生み出しています。

都市機能の視点から言えば、まちの東西を結ぶ地下中央通路が集客力のある商業空間となったことで、丸の内側と八重洲側にネットワークが出来ました。実際、これまで東京駅の利用者は丸の内側または八重洲側のいずれかの移動に限られていましたが、「グランスタ」がつなぎ役となって双方へ行き来する流れができ、回遊性が高まっています。

地下通路が、駅とまちをつなぐネットワークとしての役割は大きく、その始まりは東京駅開業直後の鉄道郵便車と東京中央郵便局を結ぶ地下輸送通路や、ビジネス客の利便性向上のために丸ビルと駅を結んだ地下歩行者通路の開設です。現在、地下歩行者通路の整備は進み、東京中央郵便局があるJPタワーとも地下歩行者通路で東京駅と直結しています。今後出来る駅南側の自由通路や八重洲口の開発などにより、地下歩行ルートはさらに拡充していくでしょう。魅力ある地下空間をつくり出していくことで、まち全体の回遊性は一層高まると考えています。

まちのブランド力を上げて進化する

大丸有まちづくり協議会、東京都、千代田区、JR東日本からなる大丸有まちづくり懇談会による「大手町・丸の内・有楽町地区まちづくりガイドライン2008」では、東京駅、丸の内駅前広場、八重洲駅前広場および周辺街区を含む地域を「東京ゲートエリア」と位置付け、都心部のシンボル空間として整備を進めることが示されています。

東京駅丸の内駅舎の復原により、まちの観光的魅力は高まってきていますが、今後も行幸通りに続く丸の内駅前広場などの整備を進める予定です。2013年9月にはグラントウキョウノースタワーとグラントウキョウサウスタワーを結ぶ大屋根を設けた歩行空間「グランルーフ」が完成し、地域と連携した祭りやイベントを開催するなど、回遊性だけでなく八重洲・日本橋エリアの活性化も高めていくと期待しています。さらに2014年秋には八重洲駅前広場が完成します。この開発によって環境・歴史などに配慮した東京駅にふさわしい緑豊かな環境空間が誕生します。

東京駅が「東京ステーションシティ」として、“通過する駅から、集う駅”へと進化し、レベルアップしていく。それは駅単独では意味をなしません。周辺地域と共に歩むことで、まちのブランド力を高めていくことが大切です。今回のような大規模開発は100年に一度のものかもしれませんが、常に開発は行われています。東京駅周辺のまちが持つ時空を特別なものとして守りながら、これからも進化し続けていくと思います。（談）

東京駅地下エキナカ商業施設「グランスタ」：旬な店が並び、連日、買い物を楽しむ人で賑わっている。「グランスタ」開業により八重洲・丸の内間の移動が増えただけでなく、東京駅地下1階に人の流れが移り、1階の混雑緩和につながった

「グランルーフ」のパース：東京駅八重洲口に完成した約230mの大屋根に覆われた歩行者デッキ。地下1階から3階には株式会社鉄道会館が手掛けた15店舗の商業施設が入る。駅周辺の回遊性を高めるとともに、今後は地域と連携したイベントも開催するなど、賑わい・楽しさを創出する

「ステーションコンシェルジュ東京」と外貨両替所：「グランスタ」に設けられたコンシェルジュには東京駅構内や周辺地域の案内情報を求めてくる人が多い。両替所は、海外からの旅行者や丸の内OLの利用度が高い

のざき・てつお——株式会社鉄道会館代表取締役社長／1948年生まれ。1970年、東京大学工学部卒業。同年、日本国有鉄道入社。1987年–、東日本旅客鉄道株式会社。1994年、上信越高原リゾート開発株式会社（ガーラ湯沢）代表取締役社長（出向）。1998年、東日本旅客鉄道株式会社取締役長野支社長。2005年より現職。2011年–、日本ショッピングセンター協会理事、関東・甲信越支部長。2013年、拓殖大学客員教授（非常勤）。
主な著書：『進化する東京駅—街づくりからエキナカ開発まで』［成山堂／2012］

エリアを つなぐ

東京駅を含め、その周辺地区の整備により地域間に新たな人々の流動が生まれている。八重洲と丸の内の間をつなぐ東京駅地下中央通路の商業空間「グランスタ」や、丸の内オアゾ前からJPタワーの商業施設「KITTE」まで延伸した丸の内地下歩行者通路が、快適な歩行者ネットワークを形成している。また、地上ではビジネス活動、アメニティ環境の基軸となる丸の内仲通りのような都市空間を、再開発が進む大手町地区まで延伸していくという。東京駅を拠点とした地域の回遊性が高まることでエリアがつながり、一体的なまちの広がりを見せている。

（文責：編集室）

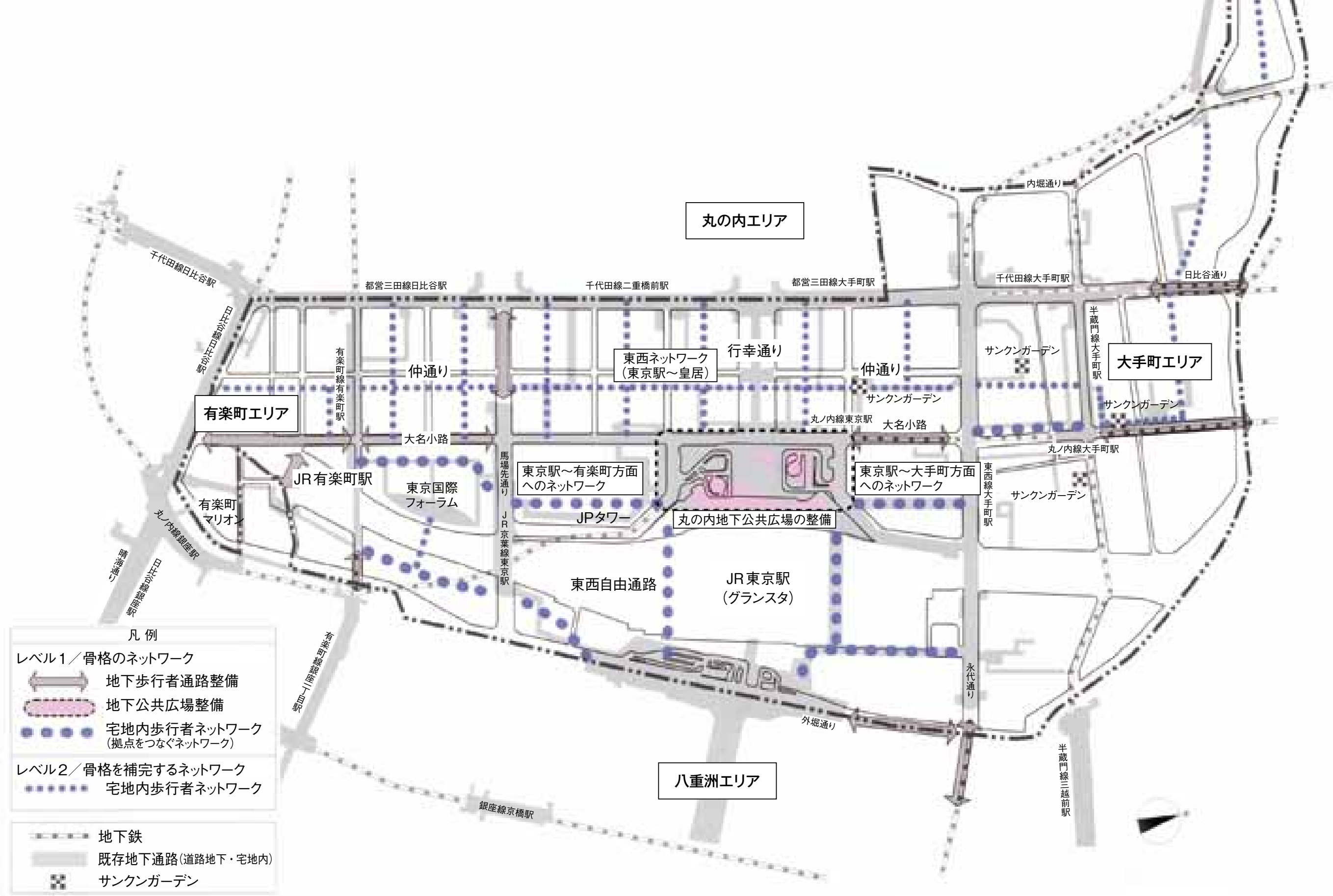
1　大手町側から見た丸の内仲通り：美観だけでなく快適性・利便性・安全性に配慮して整備された。世界有数の国際ビジネスセンターとして再開発を進めている大手町に、仲通り的機能を取り入れて趣ある通りを形成しつつある。今後は日本橋川まで延伸し、通りの雰囲気を途絶えさせることなく連続性のある街並みを目指し、神田側の歩行者動線へとつなげていくという

2　東京シティアイ：JPタワー内に設けられた観光・ビジネス情報センター。主に東京23区の観光地とのパイプ役として交通・食・宿泊・イベントなどの情報やチケット手配などのサービスをワンストップで提供している。日本語、中国語、韓国語、英語に対応できるスタッフやパンフレットを用意。イベントスペースでは地方イベントも開催し、金曜から日曜までの3日間の開催期間に1万人以上が訪れることもある。併設するカフェには、トラベルライブラリーがあり、旅行ガイドブックなどが自由に閲覧できる

3　「KITTE」地下入り口前の地下歩行者通路：東京駅丸の内地下広場と直結し、「KITTE」を通り有楽町や京葉線方面へ行き来できる。一部の時間帯を除き、「KITTE」内の1階、地階の通路は開放されているので、朝は通勤通路として利用されている。以前はコンコースの一部を歩行者が通行していた丸の内の地下だが、地下鉄コンコースや周辺街区との接続を大規模に行い、マルチビジョンやショーケースなどを設置し、地域情報や丸の内地区の歴史を発信するなど、快適な公共空間としての整備を進めた。歩行者通路の枠を超えた"賑わい空間"を創出している

4　屋上庭園「KITTEガーデン」からの眺め：「KITTE」6階の屋上庭園からは東京駅周辺のまちが一望できる。写真左手は新丸ビル、その奥は日本工業倶楽部会館、右手の大屋根は2013年9月に完成した八重洲口のペデストリアンデッキ「グランルーフ」。八重洲駅前広場に続き、丸の内駅前広場、東京駅南側の自由通路も順次整備されていく予定。東京駅がつなぎ役となって、大丸有・八重洲地区に人の流れを生み出している

主要な歩行者ネットワーク将来イメージ（地下）



＊宅地内ネットワークの形成については、その位置や形状について個別計画の中で具体に検討する

［『大丸有まちづくりガイドライン2012』より編集室で作成］

人を
つなぐ

かつてはオフィス街としての顔が強く、休日や夜間になると閑散としていた大丸有地区。約10年前からエリアマネジメントを取り入れた再開発を実施し、外から人を呼び込もうと、音楽祭やセミナー、打ち水などの環境プロジェクト、オープンカフェなど、参加型の催しを続けてきた。東京駅丸の内駅舎が復原した今日では、観光地としての顔も生まれ、通勤者だけでなく、ショッピング、食事、まち歩きなど、さまざまな目的で人々が訪れている。大丸有にかかわる人々とその魅力に惹かれる人々がつながり、賑わいのある都市に生まれ変わった。　（文責：編集室）

1

2

3

4

5

6

7

1　大手町・丸の内・有楽町 打ち水プロジェクト2013：大丸有まちづくり協議会、環境省、東京都、千代田区などで組織された大丸有打ち水プロジェクト実行委員が主催するイベントで、2005年から毎年行われている。ヒートアイランド対策のための環境活動“打ち水”を通じて、地域の人々との交流を創出。大丸有地区の就業者や丸の内仲通り周辺店舗など約3,000人、200団体が参加。2013年は、行幸通りや東京国際フォーラムなどの4会場で、ビルから出る“中水”を利用して実施。盆踊り祭りも開催された［提供：リガーレ］

2　東京国際フォーラム地上広場の大江戸骨董市：総面積約8,700m^{2}ある地上広場にはケヤキやカツラが植えられ、平日の昼はランチ販売の屋台が並ぶなど、都会のオアシス的空間となっている。2003年からスタートした「大江戸骨董市」は毎月第1、3日曜日に開催され、1日平均4万人を超える観光客が訪れる休日の人気スポットになっている［出典：『Nelsis』Vol.8,2007–2008］

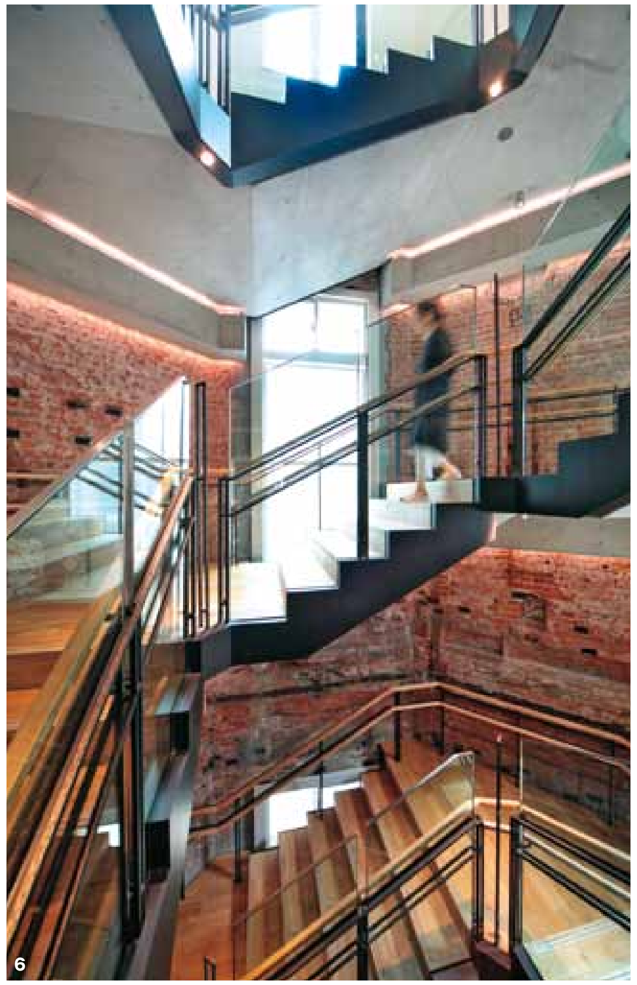
3・4　丸の内ウォークガイド：リガーレが実施するまち歩きツアー。“浪漫”、“歴史”、“アート”をテーマにした3つのコースあり、ボランティアガイドの案内で大丸有・八重洲・日本橋地区を巡る。現在登録している6人のガイドは、大丸有地区に関係するOBや東京観光財団・東京商工会議所共催の東京シティガイド検定合格者など。ツアー参加者は、観光で訪れた人の他、かつて丸の内に勤めていた人や丸の内検定受験希望者などもいる

5　ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン「熱狂の日」音楽祭：毎年5月3–5日のゴールデンウィークに開催される音楽の祭典。メイン会場は東京国際フォーラムで、2005–12年までの来場者数は延べ526万人にも上る。メイン会場の他、丸の内・有楽町の各所でもコンサートが実施され、まち全体が音楽であふれる。2013年の開催時にはオープンしたばかりの「KITTE」1階のアトリウムでも無料コンサートが行われ、大勢の観客で賑わった［提供：日本郵便］

6・7　丸の内行幸マルシェ：東京駅、内堀通り間の行幸地下通路で、毎月第2、第4金曜日に開催されている市場。丸の内界隈の活性化を目的に、生産者販売支援などを手掛ける青空市場と三菱地所が協力して、全国各地の郷土の食材を販売している。農林水産省、千代田区観光協会などが後援。栽培方法などにこだわりを持った生産者約35店舗が出店。昼休みや就業後の夕方には、東京駅周辺に勤める人たちが大勢買い物に訪れる

時を つなぐ

明治維新後、丸の内界隈は日本初の本格的なオフィス街として発展を遂げてきた。現在、100年という歴史と時代の先端性を活かした、他にはない風格あるまちづくりがなされている。行幸通りやJPタワーはいにしえの記憶を伝えながら新たな姿に再生し、東京駅丸の内駅舎を始め三菱一号館、日本工業倶楽部会館といった歴史的建造物には最新技術の手を加え、現役の施設として活用するなど、新旧が融合した丸の内らしさを演出。時をつなぎながら進化し続ける都市として人々を魅了している。　（文責：編集室）



1　東京駅丸の内駅舎とJPタワー：2012年10月に東京駅丸の内駅舎が復原され、2013年3月には写真右手のJPタワーがグランドオープンした。JPタワーは、1931［昭和6］年に竣工した旧東京中央郵便局舎を一部保存し、東京駅前地区の風格ある歴史的景観を継承することに留意しながら、丸の内周辺における賑わいある魅力的な都市空間の形成に取り組んだ。東京駅丸の内駅舎を拠点に新たな人の流れが見られる

2　JPタワーの商業施設「KITTE」1階アトリウム：保存部分と新築部分に囲まれたガラス天井の吹抜け空間。かつて八角形の柱が立っていた位置には、床に吹出し口を設け、天井からはボールチェーンを吊るし装飾している。ボールチェーンは、昼は太陽光、夜は照明により光の柱を表現することで当時の姿を彷彿させる。また、ガラス天井には光を遮らないシースルータイプの太陽光パネルを設置し、トップライトで明るさも確保している

3　行幸通り：皇居外苑と東京駅丸の内駅舎を結ぶ通り。今後、丸の内駅前広場の整備と共に、連続した大きな緑の空間が創出される。統一感のあるスカイラインやアイストップビスタ景の形成により景観を整備するだけでなく、イベントやオープンカフェを開催するなど、歴史性と先端性を兼ね備えた“文化力”を発信している

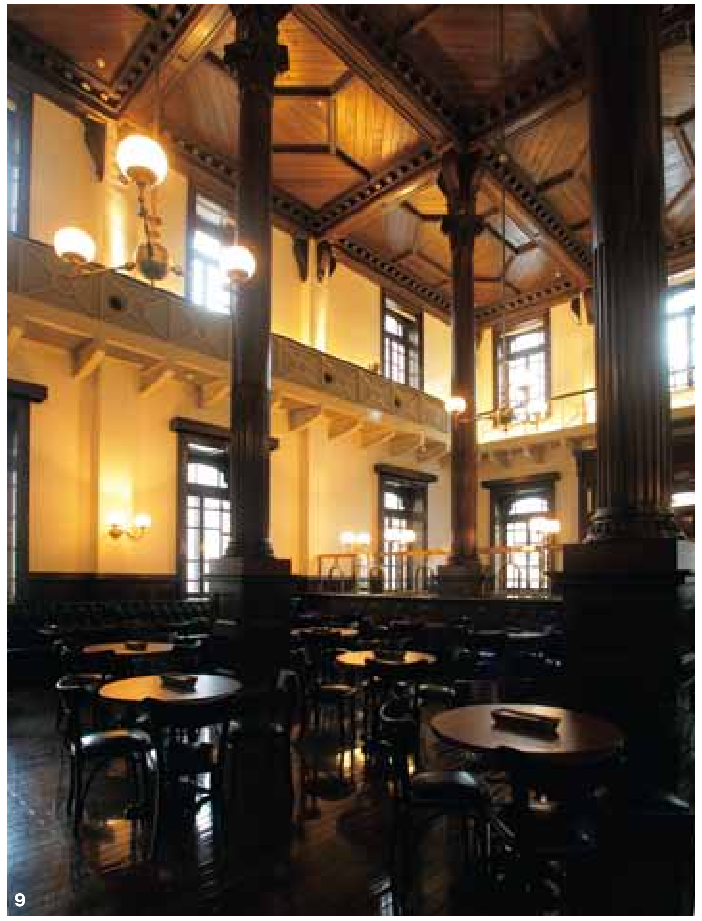
4　「KITTE」4階旧東京中央郵便局長室：旧東京中央郵便局の郵便局長室を当時と同じ状態に復元した。休憩室として一般開放され、誰でも気軽に立ち寄れる。窓の外には丸の内の風景が広がり、東京駅丸の内駅舎が間近に見える

5　「インターメディアテク」2階常設展示風景：JPタワー2、3階のJPタワー学術文化総合ミュージアム「インターメディアテク」は、東京大学総合研究博物館と日本郵便の協働プロジェクトで、「アート&サイエンス」をテーマに、同大学が1877［明治10］年の開学以来蓄積してきた学術標本を展示。入館無料とあって予想を上回る来館者数となっている［空間・展示デザイン：©UMUT works 2013｜提供：インターメディアテク］

6　「東京ステーションギャラリー」の廻り階段：東京駅丸の内駅舎の復原と共に、2012年秋に活動を再開した。辰野金吾の設計によって創建された1914［大正3］年当時の建物を活かしたつくりで、構造の躯体として残っていたレンガ壁が、廻り階段や展示室など館内の所々にそのままの姿で使われており、歴史を実感しながら名画が観賞できる。また、三菱一号館美術館、三井記念美術館など、東京駅周辺の美術館と連携して広報活動を行い、地域の文化発信を担っている

7

8


9

7　三菱一号館美術館外観：1894［明治27］年、英国人建築家ジョサイア・コンドルによって設計された丸の内初のオフィスビルで、1968［昭和43］年に老朽化のため解体されたが、2010年の復元によって美術館として生まれ変わった。当時の設計図、各種文献、写真、保存部材などを元に、意匠や部材だけではなく製造方法や建築技術も忠実に再現。高層の丸の内パークビルディングを背景に、100年の時を感じさせる都市の風景が楽しめる
8　一号館広場：丸の内パークビルディングと三菱一号館美術館に囲まれた中庭。1,500m^{2}の広場は、高木24種、低木・グランドカバー約12,000株の植栽で構成され、密度の高い緑を表現している。また人工地盤上の緑化、保水性舗装、噴水、ドライミストなどの環境対策に取り組み、現代の緑化技術と歴史的景観が調和した魅力ある空間をつくり出している。平日、休日を問わず、美術鑑賞、ショッピング、通勤、まち歩きなど、さまざまな目的で訪れた人々で賑わっている
9　三菱一号館美術館のカフェ「Café1894」：三菱合資会社銀行部の銀行営業室を復元。2層吹抜けの高い天井と重厚感のある柱、壁は漆喰で仕上げている。開放感あふれるクラシックな雰囲気で、昼はカフェ、夜はビストロバーとして営業。美術館来館者だけでなく周辺企業に勤める人たちにも利用されている
［提供：三菱一号館美術館］

「まちづくりガイドライン」による共通価値の表現
歴史的建造物を大切に扱うまちづくり

金城敦彦
Atsuhiko Kinjo
大手町・丸の内・有楽町地区まちづくり協議会事務局長（三菱地所株式会社都市計画事業室副室長）

歴史あるまちの価値を共通認識する

アーバンデザインとして見た場合、今の建築デザインや経済的合理性からはつくりようのない歴史的建造物の歴史の積み重ねは、高い価値を地域に与えてくれます。歴史的建造物をまちの資源として大切にすることは、大人のまちの在り方として当然だという考え方と、しかし、経済合理性から言えば、それを建て替えて、使いやすく高機能な建物をつくるべきだという考え方があり、双方のせめぎ合いが出てきます。ただ、明治期、大正期、昭和初期の近代の建造物をこれ以上潰してしまったら後悔する。個人としても会社としても、根底にはどうにかして残したいという気持を持っています。では、どうすればいいか。残すための負担を経済的価値に置き換えて、インセンティブを得るための行政交渉に入るのが一般的な流れです。その時、一企業と許認可権者の行政という小さい範囲の交渉で進めていくのではなく、“まちの資産を大切にしていく”という共有の合意事項にして地域全体で取り組んでいく。そのためにも、大丸有まちづくり協議会、東京都、千代田区、JR東日本による大丸有まちづくり懇談会では、みんなに共通の価値だと認識できるようなまちづくりの指針、「大手町・丸の内・有楽町地区まちづくりガイドライン」（以下、まちづくりガイドライン）を作成し、2000年から運用しています。

地域を形成する企業、関係行政、社会にまちのあるべき姿を示す

今後のまちづくりにおいて、経済・環境共生・文化・社会を総合的に捉えていかないと都市の継続性は成立しません。「まちづくりガイドライン」では“時代をリードする国際的なビジネスのまち”、“人々が集まり賑わいと文化のあるまち”、“情報化時代に対応した情報交流・発信のまち”、“風格と活力が調和するまち”、“便利で快適に歩けるまち”、“環境と共生するまち”、“安全・安心なまち”、“地域、行政、来街者が協力して育てるまち”の8つの目標を掲げ、その上で具体的な考え方を示しています。
大丸有地区には多くの企業があり、大丸有まちづくり協議会は民間地権者会員だけでも60社以上からなります。企業が所有するビルは大きな財産で、その在り方によっては財務状況を大きく左右します。そのため「まちづくりガイドライン」で開発事業やビル建設について事細かに制限したり、意見するようなことはありません。一番難しいのは、歴史的建造物の扱いで、原則、土地の固定資産税などは新築の高層物件と同様であり、維持管理や災害時の安全面など、コストやリスクは高い。残してほしいと言うことは簡単ですが、企業側にとっては大きな選択となります。「まちづくりガイドライン」があることで、形成されてきた風格ある街並みや、まちの記憶を伝える歴史的建造物などは大切だということを示すことができます。結果、オーナーである企業の賛同や行政の評価、そして歴史的建造物の保存・再生、活用につながっています。

大丸有ならではの取り組み

「まちづくりガイドライン」は杓子定規な規制ではなく、大丸有地区に合ったまちづくりの指針で、これに基づく建て替えではインセンティブを得られる可能性もあります。
明治生命館の保存の際には「重要文化財特別型特定街区制度」、東京駅丸の内駅舎復原では「特例容積率適用区域制度」が適用されました。
また、以前は空地面積をしっかり確保することへの評価はありましたが、街並みをつくることを評価されなければ、大丸有地区の“らしさ”がなくなってしまいます。例えば丸の内仲通りでは、必要以上に建物をセットバックさせずに、街並みや1階店舗の連続性を生み出して、歩行者空間と一体となったストリートの設えを目指し、それを評価すべきだと、大丸有まちづくり懇談会でも話し合いました。今後、丸の内仲通りの歩行者回遊軸としての機能は大手町方面へ延伸していきます。
地域と行政が一緒になってみんなで「まちづくりガイドライン」をつくり、運営しているからこそ、他にはない大丸有地区らしいまちづくりがなされていると思います。（談）

日本工業倶楽部会館：80年の歳月を経た建て替えの際には歴史的景観の保全を図り、南側部分を保存・再現した

丸の内仲通り：1階に店舗を設け、快適な歩道としたことでビジネス以外の人たちも楽しめるようになった

木材の魅力——木材会館の設計を通して

山梨知彦
Tomohiko Yamanashi

木材は魅力的である。
京都や奈良の木造古建築を見ていると、しみじみと日本の良さを感じるにもかかわらず、現代建築が、特に都心の大規模建築が木材でつくられることは皆無であった。「木材会館」の設計を担当した時は、そんな状況であった。

木材の復権

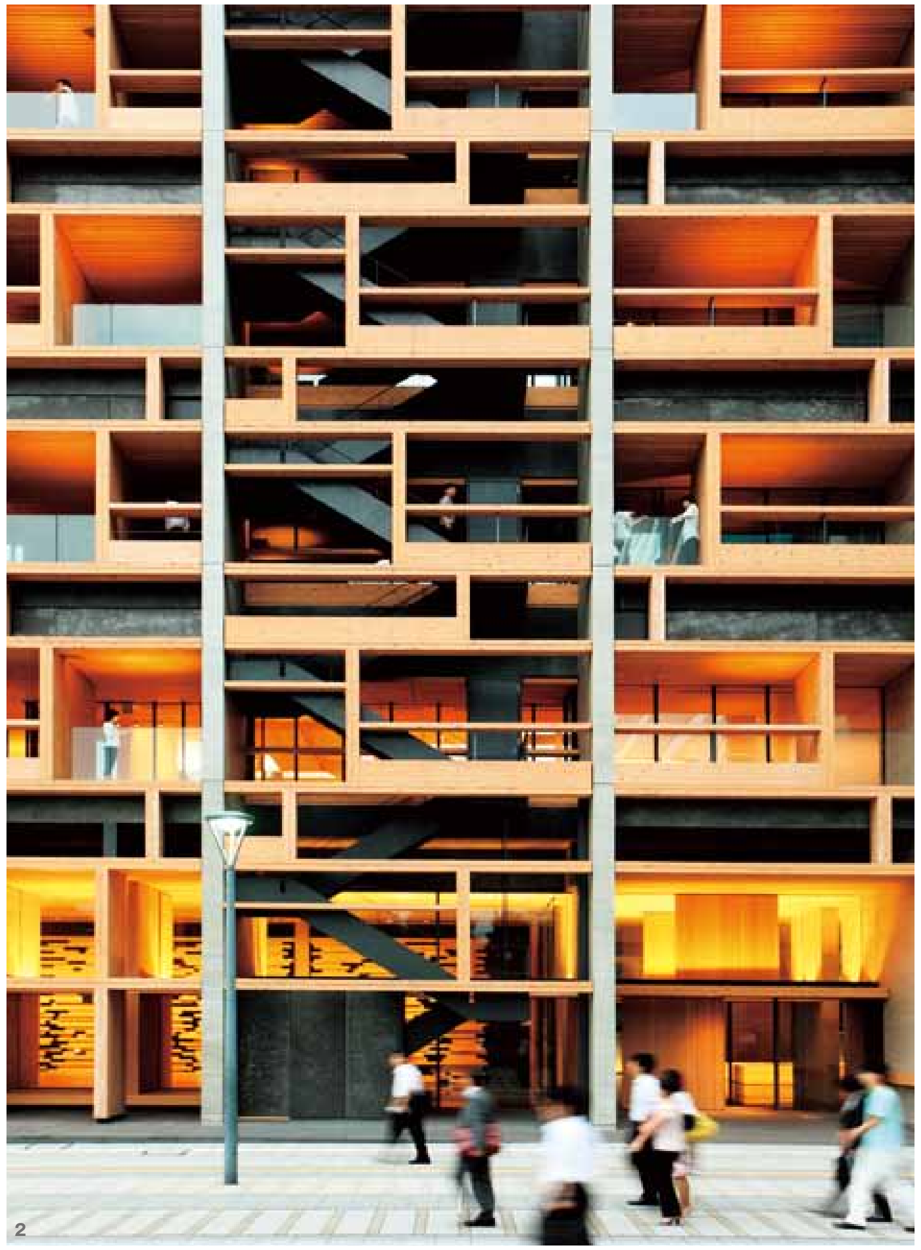
木材の復権を図ろうと考えた。
優しさと温かさ、色合い、そして香りなど、木材には人間の琴線に触れる、さまざまな味わいがある。存在そのものが環境に優しいばかりでなく、木材は成長の過程で大気中のCO_2を自ら固定しているため、それを使うことがそのまま炭素固定につながるというエコな材料でもある。それにもかかわらず、近代化の中で燃えやすく安全に乏しい材料と位置付けられ、いつの間にか都心の大型建築から木材が消えてしまった。
今では大型建築に使われることのなくなった木材をふんだんに用いる手法が提示できれば、木材の利用状況が変わるのではなかろうかと考えた。木材と言えばそもそも高価。さらに、短所である可燃性を補うため不燃化したり、退色を抑えたりと、ますます高価な方向へと進んでしまった。これでは需要が増えるとは思えない。むしろ、短所も含めた木材の持ち味を活かすことで、安価に大量に用いる方法を探ることにより、木材の復権を目指すべきと考えた。

欠点を味にする

欠点を持たない素材はない。
およそ世界に存在する数多（あまた）の素材は、それぞれ特有の味わいを持つものであり、木材だけが特別なわけではない。目指すべきは、木材利用が廃れる原因となった欠点にもう一度目を向け、再評価し、デザインすることであった。
例えば「木材会館」において、“割れ”については、木材を接着せず金物で取り付け、割れても材が動けるようにし、さらには交換できるようにしたのだが、これがむしろ木材を1本1本独立して見せる結果となり、建物全体の特徴を生み出した。
風雨による退色については、積極的に肯定して“エイジング”のデザインを試みた。木材と対をなすコンクリート面を無塗装の木材型枠で打設し、表面には木灰（もくあく）汁を染み込ませたため、コンクリートは年々黄ばむ。木材はグレーに近付き、コンクリートは黄ばみ、両者のコントラストは毎年変わる。やがては木材とコンクリートの見分けがつかなくなり、ひょっとすると逆転するかもしれない。
可燃性については次のように整理してみた。火災の際に危険なのは煙である。煙をうまく天井裏にため込めば、人々は煙にまかれずに避難をすることができる。幸い地震国日本の建築は天井裏に大きな梁を持つ。天井を撤去して天井裏を“現し”にすれば煙をためるスペースが生まれる。加えて、安全な避難ルートを確保するために、各階には大きなバルコニーと専用の階段を設けた。こうした木材の可燃性を補うための工夫が、「木材会館」の特徴である、天井がない広々とした内部空間と、彫りの深い外観を生み出した。

大量生産の次にくるもの

木材は一品生産に向いている。
20世紀以後、建築は大量生産の美学を取り入れ、高性能で高品質なものとなることを目指してきた。しかし実際には、敷地ごとに個別に設計がなされ施工がなされる、一品生産である。
「木材会館」では、実はすべての木材はコンピュータによって制御されたCNC工作機により切り出されている。木材自体は、軟らかく加工がしやすいため、設計に合わせた個別加工が容易な材料でもある。近代になり人間の工賃が上がったことで、木材は高価になってしまったわけだが、「木材会館」ではコンピュータをうまく使い、人間の100倍の速さで木材を個別加工することで、一品生産物ながら経済的な建築を実現した。建築はITと出合うことで、本来あるべき一品生産物としての姿を取り戻しつつあるように思える。そうした状況の中、特に木材は個別生産性が高く、かつ環境に優しい材料として、今後、大きく見直されていくはずである。
木材は素晴らしい材料であるが、一度はその利用が低迷したものであることは確かであり、そこにはそれなりの原因があったはずだ。無批判にノスタルジーだけで木材の利用を唱えるのではなく、現代の最新のテクノロジーとの融合によって、素材を現代に蘇らせる必要があると考えている。



木材会館
1　木材をCNC工作機で加工している様子：デジタルデータを一度用意すれば、人間の100倍のスピードで、文句を言うこともなく正確に木材を切り刻んでいく
2　西面外観ディテール：木材とコンクリートの躯体が深い影をつくり出し、環境に優しいファサードを生み出している
[写真1・2：野田東徳]
3　エントランスロビーに置かれているベンチのディテール：木材を積み上げただけであるが、過度な細工をしていないシンプルさが、木材本来の持ち味を伝えてくれる
4　エントランスロビー：人々はここを訪れた瞬間に、ヒノキが発する芳香に迎えられる。木材でなければ生まれ得ない空間である
[写真3・4：Nacása & Partners Inc.]

やまなし・ともひこ——日建設計執行役員設計部門代表・設計担当兼デジタルデザイン室長／1960年生まれ。1984年、東京藝術大学美術学部建築科卒業。1986年、東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修了。同年、日建設計入社。
主な担当作品：ホキ美術館[2010]、三井住友銀行本店ビル[2010]、ソニーシティ大崎[2011]、ラゾーナ川崎東芝ビル[2013]など。

1

TOPICS

「日本のテラコッタ建築 ―― 大正・昭和初期の装飾の保存と公開」で日本建築学会賞（業績）を受賞

2

ミュージアム活動を通して、日本の建築文化を次代に伝える

後藤泰男
Yasuo Goto
株式会社LIXIL 広報部 文化企画G グループリーダー

株式会社LIXILが運営する文化施設「INAXライブミュージアム」（愛知県常滑市）が2013年日本建築学会賞（業績）を受賞しました（表彰業績名：日本のテラコッタ建築―大正・昭和初期の装飾の保存と公開）。「INAXライブミュージアム」は、「窯のある広場・資料館」（1986年開設）、「世界のタイル博物館」（1997年開設）、「陶楽工房」（1999年開設）、「土・どろんこ館」（2006年開設）、「ものづくり工房」（2006年開設）、「建築陶器のはじまり館」（2012年開設）の6つの施設で構成され、土とやきものの魅力や、ものづくりの心を伝えるミュージアムとして活動してきました。今回の受賞では、次の3点が大きく評価されました。

①日本におけるテラコッタ建築の価値を次代に伝えることの大切さを認識し、近代建築で実際に使用されたテラコッタを長年にわたり継続して収集・保存、公開してきたこと。

②テラコッタやタイルの復原・修復を通じて、技術の継承に努めてきたこと。

③テラコッタ建築の写真や調査資料をまとめ出版し、記録の保存、伝達に取り組んできたこと。

装飾の時代を担ったテラコッタを収集・公開

1923年の関東大震災以降、耐震性に優れた鉄筋コンクリート造建築の普及と共に、外壁装飾材としてテラコッタが数多く使用されたのは、太平洋戦争に至るまでのわずか20年余りのことです。当時、タイルやテラコッタで装飾された建築は、日本の新しい時代を象徴し、関東大震災の復興のシンボルであったとも言われています。ところが、戦後モダニズムの潮流によって装飾性豊かなテラコッタ建築が新しく建てられることはほとんどありませんでした。そして1970年代後半から、老朽化の時期を迎えた多くのテラコッタ建築はスクラップ・アンド・ビルドの名のもとに取り壊されていきました。

そのような状況の中で、一部の建築家が損傷したテラコッタを修復し、再利用する際、伊奈製陶（後のINAX、現・LIXIL）は、これらの修復に積極的に対応しました。その担当者でもあった同社役員OBの故・杉江宗七はテラコッタの魅力に魅せられ、在職中から日本各地のテラコッタ建築を巡り、ライフワークとして調査・研究してきました。その中から貴重な実例を選抜し、117件のテラコッタ建築を『美の彷徨 テラコッタ』［杉江宗七著、伊奈製陶／1983］にまとめ、出版しました。

テラコッタに託す思いは後輩に引き継がれ、以来、営業活動や技術支援の中でテラコッタ建築の修復や解体に立ち

3

1 「建築陶器のはじまり館」屋内エリア：中央は「帝国ホテル旧本館」の食堂の柱
2 「建築陶器のはじまり館」外観
［撮影1・2：相原功］
3 「INAXライブミュージアム」配置図

4

5

6

7

4　「横浜松坂屋本館」のテラコッタ解体の様子
5　常滑に運搬され、一時保管されている様子
6　運搬時に損傷した部分のテラコッタ成形の様子
7　焼成後の補修用テラコッタ
8　「建築陶器のはじまり館」屋外エリア「テラコッタパーク」：今は貴重な建築文化遺産となったテラコッタを、青空のもと間近で鑑賞し、造形の面白さを味わいながら散策できる。手前右から「朝日生命館」のランタン、「横浜松坂屋本館」の露台的なテラコッタ装飾、奥は「大谷仏教会館」の玄関出入り口の飾りアーチなど［撮影：相原功］

8

9

会った担当者が、関係者の理解と協力を得て、テラコッタやタイルを貴重な資料として譲り受け、「窯のある広場・資料館」に収蔵しました。やがて、その一部を展示・公開するようになりました。

「横浜松坂屋本館」の解体

1921年、横浜・伊勢佐木通りに野沢屋呉服店（後の「横浜松坂屋本館」）が建設されます。昭和に入ると大掛かりな増改築が施されることになり、この設計を担当したのが、大正、昭和初期に名古屋を中心に活躍した建築家・鈴木禎次でした。1934年の改装は大掛かりで、外装を白いタイルとテラコッタで覆いました。1937年には、さらに増築され、華やかなテラコッタ建築となりました。その「横浜松坂屋本館」が閉店し、解体される情報を得て、2009年秋、大丸松坂屋百貨店にテラコッタの譲渡を申し出ました。テラコッタは伊奈製陶が製作したもので、製作の地・常滑で保存・公開したいという強い思いがあったからです。

この申し入れが途方もなく大変なことであることを知ったのは、同百貨店から快諾を頂き、解体を担当する竹中工務店との打ち合わせを始めてからのことでした。伊勢佐木通りに面したビル最上階（6、7階）のテラコッタだけを躯体から取り外すことはできないため、テラコッタを躯体壁ごと切り取り、取り外さざるを得なく、その重さは20tを超えるものになりました。これは、最上階から順に解体していく通常の工事工程を一から変更し、テラコッタ搬出時は解体工事をストップさせることを意味していたのです。しかし大丸松坂屋百貨店、竹中工務店、職人たちの多大なご理解とご協力を得て、2010年8、9月の2回に分けて無事解体し、常滑へ運び込むことができました。同時に、このテラコッタを多くの人に見ていただきたいと感じ、ここから私たちの次の課題の検討が始まりました。

「建築陶器のはじまり館」を開設

「横浜松坂屋本館」のテラコッタの収集をきっかけに、テラコッタ展示館プロジェクトチームを立ち上げ、開設に向けた議論がスタートしました。煉瓦造から鉄筋コンクリート造へと変遷した時代に、その躯体の保護と装飾を兼ね備えたタイルやテラコッタの建築は、まさに"建築陶器のはじまり"の象徴であったとも言えます。社内外から多くの協力を得て収集し、展示された装飾性豊かなテラコッタには、製作した職人、設計者、施主の"ものづくりに懸ける思い"が詰まっています。先人たちから受け継いだこの思いを次代に伝えていくことが、メーカーとしての我々の使命であり、建築の専門家だけでなく、一般の方々や子どもたちにも日本の建築の歴史と意義を伝えていきたい。これが「建築陶器のはじまり館」開設の動機でもありました。

計画の途中、東日本大震災が起こり、プロジェクトチームでは、自分たちに今、何ができるかを真剣に討議しました。そしてテラコッタ建築が関東大震災の復興のシンボルとして建てられたことに着眼し、専門家の意見を伺いながら、震災復興にかかわる展示も加えました。

「帝国ホテル旧本館」のテラコッタ

1923年に竣工したフランク・ロイド・ライト設計の「帝国ホテル旧本館」の食堂の柱［所有：博物館明治村］を屋内エリアの中央に据えることは、計画当初から決めていました。1967年、「帝国ホテル旧本館」の解体が決定した時、多くの人たちの尽力によって中央玄関部分が博物館明治村に移築されたことはよく知られています。この時、保管された食堂の柱表面の"スダレ煉瓦（後のスクラッチタイル）"は、「帝国ホテル旧本館」の煉瓦を製作する専用工場、常滑の帝国ホテル煉瓦製作所でつくられました。その製作所に、やきものづくりの技術をかわれ、地元で土管製造工場を営む伊奈初之烝と息子・長三郎が技術顧問として招かれ、1917–21年の4年間で、250万個のスダレ煉瓦と150万個の穴抜け煉瓦、数万個のテラコッタ製作を指導しました。「帝国ホテル旧本館」が無事完成した後、帝国ホテル煉瓦製作所の職人と設備は、伊奈初之烝が譲り受けることになり、これが伊奈製陶の創業の礎となりました。

20世紀の巨匠、建築家F.L.ライトが求める形や色合い・意匠をくみ取り、原料調達から成形、焼成まで試行錯誤した話は、当時の工場長・牧口銀司郎によって『帝国ホテルのスダレ煉瓦』［牧口銀司郎著、INAXライブミュージアム／2008］にまとめられています。

先人の思いを次代に伝える

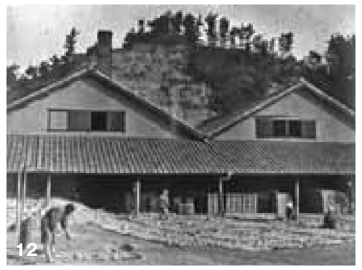
博物館の持つ役割は、過去から学び未来を見つめる場であると考えています。"世界中の人びとの豊かで快適な住生活の未来のために貢献する"と宣言しているLIXILにとって、「建築陶器のはじまり館」は、建築の歴史に学び、未来を考える場でありたいと願っています。

日本建築学会賞（業績）にご推薦いただいた名古屋工業大学の河辺伸二先生を始め、多くの人の協力によって受賞できたこの賞の重みを受け止め、今後もこの活動を真摯に展開してまいります。

最後に、プロジェクト社外メンバーであった日置拓人氏、樋口彩土氏、石川新一氏、坂井基樹氏に深く感謝いたします。

10

11


12

9　「テラコッタパーク」：中央左は「大日本製薬」の鬼面の柱頭飾り、奥は「大阪ビル一号館」の外壁を飾ったテラコッタ。鬼やトラなど愛嬌のある顔が10体並んでいる［撮影：相原功］
10　「帝国ホテル旧本館」の食堂の柱
11　スダレ煉瓦
［写真10・11：梶原敏英］
12　帝国ホテル煉瓦製作所（常滑、1919年）［提供：INAXライブミュージアム］

建築・まちづくりの情報ポータルサイト「アーキスケープ」のご案内

http://archiscape.lixil.co.jp/

「アーキスケープ」がリニューアルしました

建築やまちづくりに携わる専門家向けの情報ポータルサイト「アーキスケープ」をリニューアルしました。
従来の住宅設計向けサイト「イエスト」、ビル建築向けサイト「PROJECT INAX」、公共エクステリア設計向けサイト「ネルシスネット」の3つのサイトを統合・発展させ、特集、連載コラム、施工事例などのコンテンツがさらに充実しました。またタブレットでも使いやすいデザインに刷新し、興味のあるカテゴリーを登録することで、最適な記事を表示するコンシェルジュ機能も搭載しました。また、LIXIL商品をご採用いただいた豊富な施工事例を集約し、"建築・施設から探す"と"商品・部位から探す"の2軸での検索が可能です。各施工事例の詳細ページでは採用商品の紹介ページ、WEBカタログ、CADデータへのリンクを設置していますので、設計業務に必要な関連情報にすぐにアクセスすることができます。『LIXIL eye』のバックナンバーもご覧いただけます。
LIXIL独自の豊富な情報をタイムリーにお届けする「アーキスケープ」を、ぜひご活用ください。
http://archiscape.lixil.co.jp/

施工事例 index

相互館110タワー

オフィスやショールーム、結婚式場などが入る複合ビルです。第一生命保険所有のこの建物は、1921年に建築家・辰野金吾が設計した初代相互館の外観デザインを踏襲し、三代目相互館として建て替えられたものです。その外壁に採用されているのが、乾式二丁掛けの矢羽面状タイルです。タイルは初代相互館の趣を再現しつつ、高強度低吸水率を追求。釉薬の流れる方向や溜まりを計算することによって、リブのトップと底では微妙な色の違いが生まれ、やきものの風合いをより際立たせています。

■建築概要■
所在地：東京都中央区京橋3-7-1｜規模：地下3階、地上12階、塔屋2階｜構造：S造、RC造｜工期：2010.7-2012.6｜設計：清水建設｜施工：清水建設

インターコンチネンタルホテル大阪

都会的で洗練された、国内ホテルでは最大級の広さの客室を持つホテルが誕生しました。コンセプトは「コンテンポラリーラグジュアリー」。大理石がふんだんに使われた水まわり空間には、よりラグジュアリー感を高める、特注の舟形浴槽が採用されています。

■建築概要■
所在地：大阪府大阪市北区大深町3-60 グランフロント大阪タワーC 1-4,20-32階｜構造：S造、一部SRC造、RC造｜工期：2010.4-2013.3｜基本設計：NTTファシリティーズ、実施設計：NTTファシリティーズ+竹中工務店、ホテル内装設計：NTTファシリティーズ+イリア｜施工：梅田北ヤード共同企業体（大林組・竹中工務店）

道の駅 湖畔の里 福富

大型遊具のあるふれあい広場や、デイキャンプ場、多目的グラウンドなどが併設された、観光スポットとして人気の道の駅です。バイク駐輪場には、アルミ製のアーチ屋根が設置され、雨の日も安心して駐輪できるようになっています。また、身障者用駐車場には、ワイド仕様のスチール製シェルターが採用され、展望スペースには、本体や柱・キャップのデザインが選べるオリジナリティの高い防護柵が取り付けられています。

■建築概要■
所在地：広島県東広島市福富町久芳1506｜施主：国土交通省中国地方整備局

道の駅 みつ

播磨湾に面した広大な眺望が自慢の道の駅。砂浜で遊ぶことができる親水広場には、子どもや高齢者に対応した2段手すりを付けた階段とスロープによってアプローチできます。その他、防護柵やフェンス、門扉によって、安全で快適な施設利用をサポートしています。

■建築概要■
所在地：兵庫県たつの市御津町室津896-23｜施主：国土交通省近畿地方整備局

LIXILからのご案内

NEWS

「LIXIL：GINZA」が新しくオープン
LIXILの企業・文化活動を中心とした新たな情報発信拠点として「LIXIL：GINZA」が9月2日にリニューアルオープンしました。
2階は従来のギャラリースペースとし、生活文化の多様な豊かさを今に活かしていくための巡回企画展や、アーティストの斬新で先鋭的な表現を紹介します。1階は新しいレセプションフロアとして改装し、上質な空間展示と映像や資料によってLIXILの企業活動を紹介するスペースを設けました。
また併設する「LIXILブックギャラリー」では、建築・インテリア・デザインを中心とした書籍の他、ギャラリーの展示内容に沿った書籍などを販売しておりますので、ぜひお立ち寄りください。

LIXIL：GINZA
東京都中央区京橋3-6-18
http://lixilginza.info/

1階レセプションフロア
［撮影：梶原敏英］

2階 LIXILギャラリー

LIXIL出版 新刊案内

BOOKS

http://www1.lixil.co.jp/publish/

LIXIL BOOKLET『海藻——海の森のふしぎ』
執筆：川井浩史、北山太樹、横浜康継　定価：1,890円［税込、好評発売中］

LIXIL BOOKLET『ヴィクトリア時代の室内装飾——女性たちのユートピア』
執筆：吉村典子、川端有子、村上リコ　定価：1,890円［税込、好評発売中］

現代建築家コンセプト・シリーズ15
『菊地宏｜バッソコンティヌオ 空間を支配する旋律』
執筆：菊地宏　定価：1,890円［税込、好評発売中］

現代建築家コンセプト・シリーズ16
『中村竜治｜コントロールされた線とされない線』
執筆：中村竜治　定価：1,890円［税込、好評発売中］

上—現代建築家コンセプト・シリーズ15
『菊地宏｜バッソコンティヌオ 空間を支配する旋律』
下—現代建築家コンセプト・シリーズ16
『中村竜治｜コントロールされた線とされない線』

10+1 WEB SITE　http://10plus1.jp/
建築・都市を巡るサイトです。建築写真アーカイブ、建築関連書籍、イベントの紹介、特集などを毎月更新しています。

10+1 DATABASE　http://db.10plus1.jp/
雑誌『10+1』の全記事について検索できます。

ギャラリー+イベント

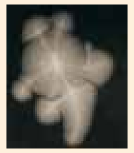
GALLERY

http://www1.lixil.co.jp/culture/

LIXILギャラリー｜東京

建築とデザインと その周辺をめぐる巡回企画展

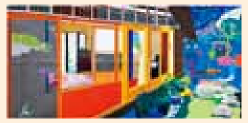
中谷宇吉郎の森羅万象帖展
会期：開催中、11月23日［土］まで
「雪は天から送られた手紙である」というフレーズで知られる科学者・中谷宇吉郎。研究の軌跡を年代順に追いながら、貴重な記録写真やアルバムなどを通して科学に対する姿勢を紹介します。



火花放電
［提供：中谷芙二子（PROCESSART Inc.）］

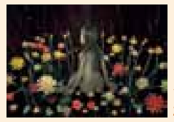
現代美術個展

入谷葉子展［絵画］
会期：10月31日［木］-11月26日［火］
アーティスト・トーク
日時：10月31日［木］18：00-19：00



「縁側ララバイ」
［1,500×3,150mm｜色鉛筆、コラージュ、紙｜2010年］

村山加奈恵展［写真］
会期：11月29日［金］-12月24日［火］
アーティスト・トーク
日時：11月29日［金］18：00-19：00



「eternally of beauty」
［1,060×1,486mm｜インクジェットプリント｜2013年］

やきもの個展

山元規子展
会期：11月7日［木］-12月2日［月］
アーティスト・トーク
日時：11月7日［木］18：30-19：00

「ランカク」
［470×470×130mm｜2013年］

大久保陽平展
会期：12月5日［木］-24日［火］
アーティスト・トーク
日時：12月7日［土］17：30-18：00

「SOJIKI」
［2,500×450×450mm｜2012年｜撮影：Miyazawa Toshiharu］

LIXILギャラリー｜大阪

建築とデザインと その周辺をめぐる巡回企画展

ヴィクトリア時代の室内装飾——女性たちのユートピア展
会期：開催中、11月19日［火］まで
インテリアに熱いまなざしが向けられた英国・ヴィクトリア時代。中産階級の女性たちがインテリアに求めた"くつろぎの空間"をさまざまな実資料を通して紹介します。

展覧会DM
［デザイン：祖父江慎+柴田慧］

INAXライブミュージアム

土・水・火、ものづくりと 生活文化をつなぐ企画展

ラスター彩タイル——天地水土の輝き
会期：開催中、2014年2月16日［日］まで
会場：世界のタイル博物館 企画展示室・2階常設展示室内特設会場
入館料：共通入館料で観覧可
「世界のタイル博物館」収蔵コレクションから、イスラーム地域の神聖な建築の壁を飾った、金属的な光沢を持つラスター彩タイルの逸品を展示します。その空間の雰囲気を再現した展示では、ラスター彩独特の輝きによる光の効果を体感できます。

GALLERY INFORMATION

［LIXILギャラリー｜東京］
所在地：東京都中央区京橋3-6-18
東京建物京橋ビル LIXIL：GINZA 2階
Tel：03-5250-6530
開館時間：10：00-18：00
休館日：水曜日、12月28日-1月5日

［LIXILギャラリー｜大阪］
2013年8月移転オープン
所在地：大阪府大阪市北区大深町4-20 グランフロント大阪タワーA 12階
Tel：06-6733-1790
開館時間：10：00-17：00
休館日：水曜日、12月28日-1月5日

［INAXライブミュージアム］
所在地：愛知県常滑市奥栄町1-130
Tel：0569-34-8282
開館時間：10：00-17：00
（入館は16：30まで）
休館日：第3水曜日（祝日の場合は翌日）、12月26日-1月4日
共通入館料：一般；600円、高・大学生；400円、小・中学生；200円

「コンクリートは二〇世紀の工業化社会の産物で、人間という生物のやわらかい体にはふつりあいに堅く、重く、息がつまるような材料だ」といって、時には、「だから僕は安藤さんとは全く違う材料を使って、違うことをやりたいんだ」と付け加えます。

これを聞いていたアメリカ人の建築家が、講演の後で、ワインを飲みながら「安藤はお前にとって父親なんだよ。だから、逆らったり、反抗したくなるんだよ」といいました。

前回の手紙の中で、父親が僕のことを、すべてに雑でだらしがないとしかり続けていた話をしましたが、安藤さんのキチンとして雑なところが少しもないコンクリート建築の多くは、まさに僕にとっても父親そのものだったかもしれない、と妙に納得しました。年の差は十三ですから、父親としては少し若すぎですが。

こんな僕の「コンクリート批判」が安藤さんの耳に届くことなんてないだろうと、僕はたかをくくっていました。しかし、違いました。数ヶ月前、あるTV番組が僕の特集を組んだのですが、それがなかなか意地の悪い企画で、僕に何のことわりなく、様々な人に会いにいって、彼らの「隈論」を収録して、それを最終収録のスタジオで、突然流すのです。

安藤さんが喋り始めたので、僕は驚き、緊張しました。安藤さんは、こういったのです。「隈さんが私のことやコンクリートのことを色々悪くいっているのはよく知っています。最初聞くとカーッとします。でも、ちょっとたって考えてみると、なるほどそうかもしれないなあと思うんです。彼は僕らとは全く新しい時代に生きているのです」。

これを聞き、全く不意をつかれ、僕は涙が止まらなくなりました。スタジオの中で、カメラが廻っているにもかかわらず、止めようとしてもなぜだか涙が止まらないのです。幸いにこの場面はカットされ、放送されませんでした。安藤さんは本当にすごい。本当に大きい、とただただ呆然としているうちに収録が終わりました。

そんなわけで僕には何人かの父親がいます。その人たちのおかげで僕がいるわけですが、妹島さんのお父様にも僕は会ったことがあります。確か二十年くらい前、都内で妹島さんの展覧会のオープニングにお父様がいらっしゃいました。とてもチャーミングで、話がべらぼうにおもしろかった。

「世界の妹島といわれているそうだけれど、僕にとってはずっと前から、世界の妹島なんだよ」という素敵な自慢話を聞いて、僕らは大笑いをしました。お父様のこと、聞いてもいいですか？

二〇一三年八月一日

隈研吾

くま・けんご——建築家・東京大学教授／1954年生まれ。1979年、東京大学建築学科大学院修了。1990年、隈研吾建築都市設計事務所設立。
主な作品：水／ガラス[1995]、森舞台／登米市伝統継承館[1996]、馬頭広重美術館[2000]、根津美術館[2009]、梼原木橋ミュージアム[2010]、浅草文化観光センター[2012]、長岡シティホールアオーレ[2012]など。

隈研吾様

今年の夏はとても暑い夏でした。それもだんだん終わりに近づいてきました。この夏はいつもよりけっこう家にいて面白いことに気づきました。

クマさんにも一度来てもらったことがありますが、私の住んでいる家には割合多くガラスが使われています。住み始めてから七年目を迎えていますが、猫の額くらいの庭に植えた木が今ではけっこう大きくなって、明るい白い室内から薄暗い室内を作り始めました。それはとっても綺麗です。ガラスのまわり一メートル内外をひょろひょろした木が取り囲み、強い光が木漏れ日となって室内に入り込みます。トップライトのガラスの上にも緑のレイヤーが重なっています。二、三年前までは、目の高さに緑が広がっていたのですが、気づくとそれは上の方に上がっていってしまい、屋根の上に広がり始めています。つまり、隣地との間が小さいために、幹を太くしてしっかりする代わりに、木々たちは急いでひょろひょろ上に伸びて、太陽の光をなんとか得ようとしたみたいなのです。上の方に緑が大きくなると下の方には当然光が届かなくなり、葉をつけていた細い枝がなくなり幹だけになってきたみたいです。小さなくぼみに植えたサルスベリも同じようにひょろひょろ上に伸びました。実家のサルスベリと比べると同じ樹種とは思えないような形態をしています。形がその庭のくぼみと同じような形に育ちました。

何を言いたいかというと、動かないと思っている建物と生きている植物が、実はものすごくインタラクティブに創作とでもいうべきことを続けているのだと思いました。それに驚きました。ちょっと大げさかもしれませんが、建築は動かないけど、でも、話すのだ、と感じました。

天井の一番高いちょっとサンルームのような部屋が父の好きな部屋でした。もともとお前の家なんかに来ないと言っていたのに、(私はどちらでもいいから全く気に止めていませんでしたが)、一度来たらよく来るようになり、更に一応ゲストルームらしい部屋を用意しておいたのに、ここが一番いいといって、サンルームのソファーベットの上に自分でマクラと掛け布団を移動して、いつも寝ていました。高い天井とトップライトの上に見える空と緑を見上げながら。通り道になる場所なのに全然気にしないで。開放的な場所ですから、周りから丸見えなのですがそれも全く気にせず。自分の思いのまま話したり行動したりする父でした。でもなんか鋭いなあと思っていました。大きなトップライトがあるから暑かったり寒かったり、数値的には一番不安定な部屋ですし、それに、丸見えなのですが、それでもある意味で一番快適な場所を直感的に理解したように思います。小さい頃はほとんど会話がなかったように思いますが、お互いとしをとったらなんとなくよく一緒に旅するようになり、体を悪くしてからも私が作った建物を訪ねてくれました。

この薄暗い明るい室内を私はけっこう昔から作ってみたいと考えていました。多分もう十五年以上前からだと思います。白い明るさでなく、暗い明るさです。それは光と影の対比的なものでなく、混じり合ったものです。白い明るさより柔らかいものだと思います。

そういう状態を作るには十分に光が入り、そしてそれがカットされなければならないのでしょう。室内の大きさと境界面までの距離との関係。それから場所によっても違ってくるのでしょうね。例えば、去年完成したルーブル・ランスは、北ヨーロッパの自然の中にあるから、暗い冬でも光が水平に差し込み、ほわーっとした明るさなのです。それもとても綺麗だけど、薄暗い明るさではありません。もう少し考えると、アジアに住む私達が得られる環境を見つけれるのではないかと思います。

京都で今賃貸の集合住宅の設計をしています。勾配屋根で庇があって、たくさん庭があって。敷地中にばら撒かれている小さな庭の緑が何年かして育って、室内、室外がこの薄暗い明るさに包まれればいいなあと思っています。

二〇一三年九月九日

ROLEXラーニングセンターの現場で

妹島和世

せじま・かずよ——建築家／日本女子大学大学院修了後、伊東豊雄建築設計事務所勤務を経て、1987年、妹島和世建築設計事務所設立。1995年、西沢立衛とSANAA設立。
主な作品：金沢21世紀美術館[2004]、ニューミュージアム[2007]、ROLEXラーニングセンター[2009]、犬島「家プロジェクト」[2010,2013]※、ルーブル・ランス[2012]など（※以外はSANAA）。

「おっかない父」と「父親のような人」と「もう一人の父親」

妹島和世様

妹島さんが、僕の父親のことを覚えてくれていて、しかもわりと好印象をもったということで、すっかり気がゆるんで、これから「父親論」をたれ流すことをお許し下さい。なにしろ、父はおっかなくて、僕の一番の苦手で、しかも今から二十年も前の一九九四年に、八十五歳で亡くなってしまったので、父のことを語ったり、ましてや書くことなど今までありませんでした。

「父親論」のひとつのきっかけは、妹島さんが、二川幸夫さんが亡くなった話をしたことも関係があります。二川さんは、僕にとって、「父親のような人」というより、父親の代理をしてくれたともいえます。父親は一九〇九年生まれで、僕は四十五歳の時の子供ということになりますが、年の差のせいで、前に出ると凍りついて、物が全くいえなかったというのもありますし、父は酒を全く飲まず、食事の時も、夜中も休みの日でも、生来の堅さがほぐれない人間だったので、僕は父が亡くなるまで凍りついたままで、一言も甘えたり、軽口をたたくということもありませんでしたし、一緒に旅した思い出もほとんどありません。

二川さんは一九三三年生まれだし、めちゃめちゃ酒飲みだし、旅に明け暮れていた人だったので、このくらいの年頃のこんな父がいてくれたら、と無意識のうちに望んでいたのかもしれません。そして実際にも二川さんから頂いたいくつかのメッセージを思い返すと、まさに二川さんは父親の代わりをしてくれたんだな、とも思います。

「もう一人の父親」の話もしたくなりました。安藤忠雄さんです。講演会でよく僕はコンクリートの話をするのです。

大倉山の自宅で、父と。小学１年生頃

LIXIL
Link to Good Living

株式会社 LIXIL

私たちは、優れた製品とサービスを通じて、豊かで快適な住生活の未来を創造する住まいと暮らしの「総合住生活企業」です。

XT3200 カ-RP-LX-3 01 2013.10発行

＊XT3200＊

9011377152